

今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市西区・糸島郡前原町所在遺跡の調査

第 5 集

1 9 7 7

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

福岡市西区・糸島郡前原町所在の遺跡の調査

第 5 集

1 9 7 7

福岡県教育委員会

序

「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集」が刊行の運びとなりました。今回、報告申し上げるものは1971年から1973年にかけて調査を実施した7ヶ所の遺跡についてであります。

なかでも、湯納遺跡から出土した、建築部材・木製品・植物遺体などについて九州芸術工科大学沢村仁先生に古墳時代初頭の高床家屋の復原案の原稿を、九州大学松本島・林弘也先生には木製品・建築部材の材質の分析の結果を、第一薬科大学細川隆英先生・大阪市立大学紛川昭平先生には植物遺体についての調査結果を本書に収録させて頂けたことは望外の喜びであります。

夏の暑いなか冬の寒中にお世話頂いた地元の方々、私達の調査に全面的に協力して頂いた九州地方建設局の方々に心からお礼申し上げます。本書が文化財の保護と活用という点で利用頂くことを期待して序といたします。

1977年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告は、1971年・72・73年に福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託をうけて実施した一般国道202号線今宿バイパス建設計画地に係る埋蔵文化財の調査記録である。
2. この報告書には第2-4-(1)に九州芸術工科大学沢村仁先生の「出土材による建築復元」を第2-3-(4)と第2-4-(3)に、九州大学松本勲・林弘也先生の材質の分析結果を第2-6には、第一薬科大学細川隆英先生・大阪市立大学粉川昭平先生の植物遺体の調査結果を掲載させて頂いた。また、第2-3-(1)・(2)・(3)は出光美術館弓場紀知氏によるものである。さらに第2-4-(2)は、九州大学山本輝雄先生との栗原の話し合いにより栗原がまとめたものである。その他の原稿は次のとおりである。

第1	栗原和彦
第2-1	栗原和彦
第2-2-(1)	上野精志
第2-2-(2)・(3)・(4)	栗原和彦
第2-5	柳田康雄
第3・第4・第5	馬田弘稔
第6	栗原和彦
第7-1-(1)・(2)	栗原和彦
第7-1-(3)	上野精志
第7-2-(1)	柳田康雄
第7-2-(2)・(3)・(4)・(5)・(6)	上野精志

3. 掲載写真については図版目次に示すとおりである。
4. 実測図については、各遺跡の調査者が分担して作図をしている。遺構図の製図 遺物の実測・挿図は挿図目次に掲載したとおりである。
5. 本報告書の編集は、第1・第2を栗原和彦・稲富裕和・関晴彦が、第3・第4第5は馬田弘稔が、第6は栗原和彦・稲富裕和・関晴彦が、第7は、上野精志が編集し栗原・上野・稲富・関が最終の組上げを行った。

本文目次

	頁
第1 序 説.....	1
第2 湯 納 遺 跡.....	7
第3 今宿大塚南遺跡.....	78
第4 今宿高田遺跡.....	83
第5 今宿小塚遺跡.....	91
第6 糸島平野の条里遺構の調査と古野遺跡の調査.....	97
第7 上 鎌 子 遺 跡.....	105

図 版 目 次

	湯 納 遺 跡	本文対照頁
図版 1	湯納I式土師器に見られる技法(石丸洋撮影)	12
図版 2	湯納遺跡土師器・高杯の観察(石丸撮影)	12
図版 3	湯納遺跡出土木製農耕具 その1(中尾徹撮影)	40
図版 4	湯納遺跡出土木製農耕具 その2(中尾徹撮影)	40
図版 5	湯納遺跡出土木製農耕具 その3(中尾徹撮影)	40
図版 6	湯納遺跡出土木製槽(中尾徹撮影)	42
図版 7	湯納遺跡出土木製槽と竹籠(中尾徹撮影)	42
図版 8	湯納遺跡出土木製日用具 その1(中尾徹撮影)	42
図版 9	湯納遺跡出土木製日用具 その2(中尾徹撮影)	42
今宿大塚南遺跡		
図版 10	1 今宿大塚南遺跡から今宿大塚前方後円墳を望む(馬田弘稔撮影)	78
	2 今宿大塚前方後円墳から今宿大塚南遺跡を望む(馬田撮影)	78
図版 11	1 今宿大塚南遺跡全景(馬田撮影)	78
	2 今宿大塚南遺跡全景(馬田撮影)	78
今宿高田遺跡		
図版 12	1 今宿高田遺跡全景(馬田撮影)	83
	2 今宿高田遺跡第2トレンチ溝状遺構検出状態(馬田撮影)	83
図版 13	今宿高田遺跡遺物出土状態(馬田撮影)	83
今宿小塚遺跡		
図版 14	今宿小塚遺跡全景(馬田撮影)	91
図版 15	1 今宿小塚遺跡溝状遺構内遺物出土状態(馬田撮影)	91
	2 今宿小塚遺跡溝状遺構内遺物出土状態(馬田撮影)	91
図版 16	1 今宿小塚C地点(下方)から今宿大塚南遺跡を望む(馬田撮影)	91
	2 今宿小塚C地点から今宿今山(石斧製作所)を望む(馬田撮影)	91
糸島平野の条里遺構の調査と古野遺跡の調査		
図版 17	糸島平野の条里遺跡 背後は高祖山(栗原和彦撮影)	97

図版 18	右	糸島平野条里遺構の調査トレンチの状況 (栗原撮影)	91
	下	糸島平野条里遺構の調査土層の状況 (栗原撮影)	91
図版 19	1	古野遺跡第1地点の状況 (栗原撮影)	100
	2	古野遺跡第1地点C-1トレンチ (栗原撮影)	100
	3	古野遺跡第1地点C-4トレンチ (栗原撮影)	100
図版 20		古野遺跡第2地点全景 (柳田撮影)	100
図版 21	1	古野遺跡第2地点A溝の状況・2-3 t (栗原撮影)	100
	2	古野遺跡第2地点A溝の状況・2-1 t (栗原撮影)	100
図版 22	上	古野遺跡第3地点遺景 (栗原撮影)	103
	中	古野遺跡第3地点 (栗原撮影)	103
	下	古野遺跡第3地点調査状況 (栗原撮影)	103
図版 23		糸島平野条里遺構の調査と古野遺跡の調査で出土した遺物 (石丸撮影)	103

上 罐 子 遺 跡

図版 24		上罐子遺跡近景 (柳田撮影)	105
図版 25		上罐子遺跡遺構全景 (上野精志撮影)	105
図版 26	1	上罐子遺跡遺構の状況 (上野撮影)	107
	2	上罐子遺跡遺構の状況 (上野撮影)	107
図版 27	1	上罐子遺跡1号住居跡 (柳田撮影)	107
	2	上罐子遺跡1号住居跡ベット状遺構 (柳田撮影)	107
図版 28		上罐子遺跡2号・3号住居跡 (上野撮影)	107
図版 29	1	上罐子遺跡2号住居跡東壁下ピットの状況 (上野撮影)	107
	2左	上罐子遺跡2号住居跡より石庖丁の出土状況 (上野撮影)	107
	2右	上罐子遺跡2号住居跡より砥石の出土状況 (上野撮影)	107
図版 30	1	上罐子遺跡3号住居跡 (上野撮影)	108
	2	上罐子遺跡3号住居跡 (上野撮影)	108
図版 31	上	上罐子遺跡1号溝状遺構 (上野撮影)	108
	右	上罐子遺跡1号溝状遺構より土器出土状況 (柳田撮影)	108
図版 32	1	上罐子遺跡2号溝状遺構 (上野撮影)	108
	2	上罐子遺跡2号溝状遺構より土器出土状況 (上野撮影)	108
図版 33	1	上罐子遺跡方形周溝埋土の状況 (上野撮影)	109
	2	上罐子遺跡方形周溝 (上野撮影)	109
図版 34	1	上罐子遺跡1号土壇墓遺物副葬の状況 (上野撮影)	110

	2左	上罐子遺跡1号土壇基より遺物出土状況(上野撮影) ……………	110
	2右	上罐子遺跡1号土壇基(上野撮影) ……………	110
図版 35	1	上罐子遺跡2号土壇基(上野撮影) ……………	110
	2	上罐子遺跡2号土壇基より土器出土状況(上野撮影) ……………	110
図版 36	1	上罐子遺跡1号(右)・2号(左)建物跡(上野撮影) ……………	111
	2	上罐子遺跡1号建物跡(上野撮影) ……………	111
図版 37	1	上罐子遺跡1号建物跡(上野撮影) ……………	111
	2上	上罐子遺跡1号建物柱穴の状況(上野撮影) ……………	111
	2下	上罐子遺跡2号建物柱穴と溝状遺構より土器の出土状況(上野撮影) ……	111
図版 38	1	上罐子遺跡2号建物跡(上野撮影) ……………	111
	2	上罐子遺跡2号建物跡・1号住居跡と溝(上野撮影) ……………	111
図版 39	1	上罐子遺跡溝の断面(柳田撮影) ……………	113
	2	上罐子遺跡溝より土器出土状況(柳田撮影) ……………	113
図版 40	1	上罐子遺跡溝の断面(上野撮影) ……………	113
	2	上罐子遺跡の溝(上野撮影) ……………	113
図版 41	右	上罐子遺跡溝より土器出土状況(上野撮影) ……………	113
	下	上罐子遺跡溝より土器出土状況(上野撮影) ……………	113
図版 42	1	上罐子遺跡の溝(上野撮影) ……………	113
	2	上罐子遺跡溝より土器出土状況(柳田撮影) ……………	113
図版 43		上罐子遺跡溝出土の土器(石丸撮影) ……………	113

挿 図 目 次

	頁	
第1図	今宿バイパス周辺の遺跡(建設省国土地理院原図 栗原和彦作図) ……………	折り込み
第2図	斜ヶ浦瓦窯跡付近採集瓦のスケッチ(故高野瓊鹿氏描) ……………	39
第3図	建築部材 その1(尾形柱子製図) ……………	48
第4図	建築部材 その2(尾形製図) ……………	51
第5図	建築部材 その3(尾形製図) ……………	53
第6図	建築部材 その4(尾形製図) ……………	53
第7図	建築部材 その5(尾形製図) ……………	54
第8図	建築部材 その6(尾形製図) ……………	54

第9図	湯納遺跡第8次調査区出土の建築部材からの推定復原家屋（沢村仁作成・整図）	…57
第10図	湯納遺跡Ⅱ—A区D5溝出土青銅製鏃先（柳田康雄実測・製図）	…63
第11図	田原出土青銅製鏃先（柳田撮影）	…65
第12図	鳥越出土青銅製鏃先（柳田撮影）	…66
第13図	立石出土青銅製鏃先（柳田撮影）	…66
第14図	立石出土四乳龜虎紋（柳田撮影）	…66
第15図	今宿付近地形図（馬田弘毅製図）	…77
第16図	今宿大塚南遺跡実測図（馬田製図）	…折り込み
第17図	今宿大塚南遺跡出土遺物実測図（馬田製図）	…80
第18図	今宿高田遺跡平面実測図（馬田製図）	…84
第19図	今宿高田遺跡第2トレンチ内溝状遺構・遺物出土状態・同断面図（馬田製図）	…85
第20図	今宿高田遺跡第2トレンチ溝状遺構出土遺物実測図（馬田実測・製図）	…87
第21図	今宿高田遺跡第2トレンチ溝状遺構第3トレンチ出土遺物実測図 （馬田実測・製図）	…88
第22図	今宿高田遺跡表掘遺物実測図（馬田実測・製図）	…89
第23図	今宿小塚遺跡地形図・周溝実測図（馬田製図）	…92
第24図	今宿小塚遺跡周溝内出土遺物実測図その1（馬田実測・製図）	…94
第25図	今宿小塚遺跡周溝内出土遺物実測図その2（馬田実測・製図）	…95
第26図	今宿小塚遺跡周溝内出土遺物実測図その3（馬田実測・製図）	…96
第27図	糸島平野の条里遺構と古野遺跡発掘調査地点（栗原製図）	…折り込み
第28図	糸島平野の条里遺構調査地点土層柱状模式図（栗原製図）	…98
第29図	古野遺跡第1区土層柱状模式図（栗原製図）	…100
第30図	古野遺跡第2区平面実測図（栗原製図）	…101
第31図	古野遺跡第2—3区実測図（栗原製図）	…102
第32図	古野遺跡第2—7区実測図（栗原製図）	…102
第33図	古野遺跡第3区土層柱状模式図（栗原製図）	…103
第34図	古野遺跡出土弥生土器片実測図（栗原実測・製図）	…103
第35図	上籙子遺跡周辺地形図（二神和子製図）	…折り込み
第36図	上籙子遺跡遺構配置（柳田・上野精志実測・二神製図）	…折り込み
第37図	上籙子遺跡地形図（柳田・上野実測・稲富裕和製図）	…折り込み
第38図	上籙子遺跡1号住居跡実測図（柳田作図・二神製図）	…折り込み
第39図	上籙子遺跡2号・3号住居跡実測図（上野実測・稲富製図）	…折り込み
第40図	上籙子遺跡1号・2号溝状遺構実測図（上野実測・稲富製図）	…折り込み

第41図	上罐子遺跡方形川溝1号土壌基実測図(上野実測・稲富製図)	109
第42図	上罐子遺跡1号土壌基実測図(上野実測・稲富製図)	110
第43図	上罐子遺跡2号土壌基実測図(上野実測・稲富製図)	110
第44図	上罐子遺跡1号建物実測図(柳田・根井康治・波辺和子実測・稲富製図) …折り込み	
第45図	上罐子遺跡2号建物実測図(上野実測・稲富製図)	112
第46図	上罐子遺跡溝断面図(柳田・肥山正秀実測・稲富製図)	113

目 次

	頁	
第1表	今宿バイパス埋蔵文化財調査報告書一覧(栗原和彦作成)	1
第2表	今宿バイパス発掘調査の実績一覧(栗原作成)	2
第3表	土器の観察その1(栗原作成)	16
第4表	土器の観察その2(栗原作成)	17
第5表	土器の観察その3(栗原作成)	18
第6表	土器の観察その4(栗原作成)	19
第7表	土器の観察その5(栗原作成)	20
第8表	土器の観察その6(栗原作成)	21
第9表	土器の観察その7(栗原作成)	22
第10表	土器の観察その8(栗原作成)	22
第11表	土器の観察その9(栗原作成)	23
第12表	土器の観察その10(栗原作成)	24
第13表	土器の観察その11(栗原作成)	25
第14表	土器の観察その12(栗原作成)	25
第15表	土器の観察その13(栗原作成)	26
第16表	土器の観察その14(栗原作成)	27
第17表	土器の観察その15(栗原作成)	28
第18表	土器の観察その16(栗原作成)	28
第19表	土器の観察その17(栗原作成)	28
第20表	土器の観察その18(栗原作成)	29
第21表	土器の観察その19(栗原作成)	29
第22表	土器の観察その20(栗原作成)	30

第23表	土器の観察その21 (栗原作成)	30
第24表	土器の観察その22 (栗原作成)	31
第25表	土器の観察その23 (栗原作成)	32
第26表	土器の観察その24 (栗原作成)	33
第27表	土器の観察その25 (栗原作成)	34
第28表	土器の観察その26 (栗原作成)	35
第29表	土器の観察その27 (栗原作成)	36
第30表	土器の観察その28 (栗原作成)	37
第31表	土器の観察その29 (栗原作成)	38
第32表	材質の分析その1 (松本昂・林弘也作成)	44
第33表	材質の分析その2 (松本・林作成)	45
第34表	材質の分析その3 (松本・林作成)	46
第35表	北部九州の弥生時代の鉄器出土遺跡数 (栗原作成)	61
第36表	8次調査出土建築部材その1 (松本・林作成)	61
第37表	第8次調査出土建築部材その2 (松本・林作成)	62
第38表	弥生時代青銅製鋤先土地名表 (柳田康雄作成)	64
第39表	湯納遺跡出土の植物遺体その1 (細川隆英・粉川昭平作成)	70
第40表	湯納遺跡出土の植物遺体その2 (細川・粉川作成)	71
第41表	湯納遺跡出土の植物遺体その3 (細川・粉川作成)	72
第42表	湯納遺跡出土の植物遺体その4 (細川・粉川作成)	73
第43表	湯納遺跡出土の植物遺体その5 (細川・粉川作成)	74
第44表	湯納遺跡出土の植物遺体その6 (細川・粉川作成)	75
第45表	湯納遺跡出土の植物遺体その7 (細川・粉川作成)	76
第46表	上罐子遺跡1号建物跡計測表 (上野精志作成)	111
第47表	上罐子遺跡2号建物跡計測表 (上野作成)	112

付 図 目 次

本文対原頁

付図第1図	湯納遺跡古式土師器編年図	12
-------	--------------	----

第1 序 說

第 1 序 説

1. は じ め に

1968年の分布調査をもとに「路線決定の資料を得る」目的で、九州地方建設局の依頼を受け、福岡県教育委員会が発掘調査を実施したのは1969～73年にかけての4ヶ年間であった。今回、報告しようとするのは、71年度に調査した、糸島平野の条里遺構・古野遺跡と72年度に調査した今宿高田遺跡・今宿大塚南遺跡・今宿小塚遺跡と71・72年の二年度にわたって調査した上鑑子遺跡の報告と「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集」（以下本文では、「今宿4」と記し、第1集～第3集も、「今宿1」～「今宿3」のように記す。）であつた湯納遺跡と合せて7つの遺跡についてである。

今宿バイパス関係の埋蔵文化財の調査は、現在休止中であるが78年度から再開する予定である。

今日までの今宿バイパス関係の発掘調査の報告は、第1表のとおりである。また発掘調査の進行状況は第2表のとおりである。

第 1 表 今宿バイパス埋蔵文化財調査報告書一覧

集	副 題	収録した遺跡	報 告 者	備 考
第1集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯納遺跡 宮の前遺跡B地点 高崎古墳群 大又遺跡	浜田 信也 酒井 仁夫 浜田 副島 邦弘	1969年調査 1970年報告
第2集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若八幡古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳田 康雄 ・浜田・副島 永井 昌文 ・柳田・副島 浜田	1970・71年調査 1971年報告
第3集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高崎古墳群 大又遺跡	栗原 和彦 上野 精志 上野	1971年調査 1973年報告
第4集	福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査	湯納遺跡	青峰重輔 松本 昂也 林 弘也 山本 輝彦 栗原・上野 馬田弘徳	1971・72・73年調査 1976年報告

第2表 今想バイパス発想調査の実績一覧

番号	遺跡名	所在地	調査所要区間				既調査面積				残調査 予定面積	備考	
			長さ	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡			計
1	遺物散布地	福岡市西区大字柏六町	34	28	520	45	㎡	㎡	㎡	45	0	調査不要	
2	"	"	52	50	2,600	63	"	"	"	63	0	"	
3	湧納遺跡	"	280	40	11,200	168	1,200	4,612	5,990	0	0	発掘調査終了	
3'	"	"	30	20	600	"	450	"	450	0	"		
4	宮の前遺跡	"	110	40	4,400	400	"	"	400	0	0	消滅	
5	高崎1,2号墳	"	36	15	540	160	"	"	160	0	0	発掘調査終了	
6	大又遺跡	"	57	20	1,140	300	900	"	1,200	0	"		
6'	高崎3,4,5号墳	"	40	15	600	200	249	"	449	0	"		
7	須恵器散布地	"	55	20	1,100	27	"	"	27	0	0	調査不要	
8	弥生散布地	"	30	38	1,287	"	"	"	"	"	"	0	消滅
9	若八幡宮古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000	1,100	"	"	1,100	0	0	保存施設調査不要	
10	弓巻遺跡	福岡市西区大字紀氏	70	70	4,900	290	"	"	290	2,000	"	"	
11	徳原遺跡	"	70	50	3,500	550	"	"	550	2,000	"	"	
12	糸原遺跡	福岡市大字板浜～糸島郡朝敵町龍原	3,000	40	12,000	136	"	"	136	1,500	"	"	
13	古野遺跡	糸島郡原町大字有田・龍原	150	40	6,000	482	"	"	482	0	0	発掘調査終了	
14	上鏡子遺跡	糸島郡原町大字有田	70	30	2,100	304	630	"	934	0	"		
15	遺物散布地	"	300	30	9,000	"	"	"	"	4,500	"	"	
16	古墳2基	糸島郡朝敵町	30	30	900	"	"	"	"	0	0	0	発掘調査不要
17	遺物散布地	"	100	30	3,000	"	"	"	"	0	"	"	
道1	"	"	40	30	1,200	"	"	"	"	1,000	"	"	
道2	今高田遺跡	福岡市西区大字今高田	100	40	4,000	650	"	"	650	2,000	"	"	
	今布大塚遺跡	福岡市西区大字今布	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
道3	今高小塚遺跡	福岡市西区大字今高字女原	30	40	1,200	500	"	"	500	500	0	0	発掘調査終了
	合計				79,187	1,363	1,940	3,271	5,242	1,600	13,416	12,000	

この報告書の発掘調査事務局の関係者は次に記すとおりである。

1971年

総括	福岡県教育委員会	教育長	吉久勝美	教育次長	森田 實
		教育次長	村上 智	文化課長	岩下光弘
		文化課課長補佐	菅 隆		
庶務会計 調査		文化課庶務係長	姫野 博	文化課主事	中村一世
		文化課課長技術補佐	渡辺正気	文化課調査係長	藤井 功
		文化課技師	栗原和彦	文化課技師	柳田康雄
		文化課技師	上野精志		

1972年

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田 實	教育次長	西村太郎
		文化課長	古川善久	文化課課長補佐	菅 隆
		文化課課長技術補佐	藤井 功		
庶務会計		文化課庶務係長	姫野博(前任)	文化課庶務係長	前田栄一
		文化課主事	師岡 満		
調査		文化課調査係長	松岡 史	文化課技術主査	霧久嗣郎
		文化課技術主査	西谷 正	文化課技師	栗原和彦
		文化課技師	上野精志		

1973年

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田 實	教育次長	西村太郎
		文化課長	森 英俊	文化課課長補佐	今井岩雄
		文化課課長技術補佐	藤井 功	文化課主事補佐	川崎隆夫
庶務会計		文化課庶務係長	前田栄一	文化課主事主査	小川治一郎
		文化課主事	師岡 満		
調査		文化課調査係長	松岡 史	文化課技術主査	霧久嗣郎
		文化課技師	栗原和彦	文化課技師	上野精志
		文化課技師	馬田弘徳		

2. 位 置 と 環 境

個々の遺跡が報告されるなかで、個々の遺跡の立地条件や環境についてふれられる予定である。また早良平野周辺の遺跡について10指にあまる報告書があり、なかでも「宮の前遺跡（A

～D地点」¹¹に総合的に解説されている。また、周船寺周辺の古墳群については、「今宿2」で、古墳群の分布調査にもつづいたグルーピングまで整理されている。

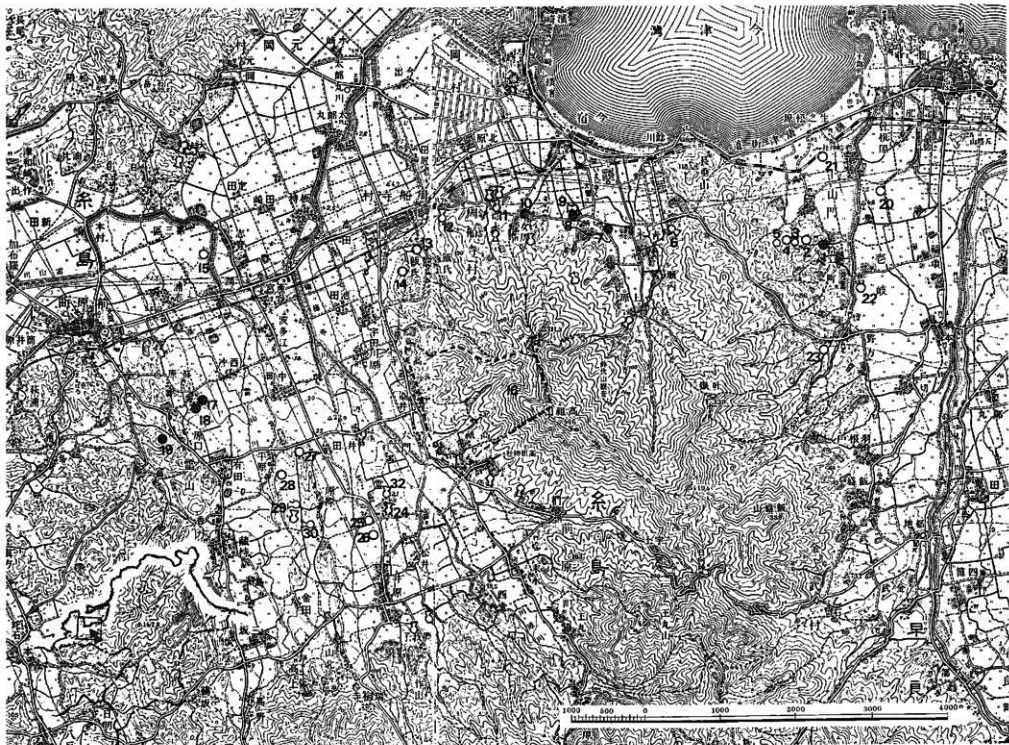
ここでは、今宿バイパス関係としては、始めて糸島平野の発掘調査の報告となり、この土地は「魏志倭人伝」のなかの一大率のいた伊都国に比定される所でもあるので著名な遺跡のいくつかについて紹介したい。

18. 怡土城跡（国指定史跡） 高祖山の西側斜面一帯に構築された山城で、天平勝宝8年（756年）6月に吉備真備に命じて起工し神護景雲2年（768年）に完成した。この山城は、東の稜線を利用して境とし北は尾根づたいに5ヶ所の望楼を設けている。また、南は谷を通り3ヶ所の望楼、西は山麓に接して平地に上壁、石塁をめぐらせている。城門、望楼などは礎石がみつまっている。大野城、基肆城に次いで築造された。白村江以後の対大陸対策の一環として築造されたものである。¹²

雷山神籠石（国指定史跡） 背振山脈の雷山の北斜面にある山城で、城内に山頂を含まず、一つの谷を上流と下流とで2度横ぎっている。列石の全貌は未調査である。この神籠石の築造年代について7世紀とする説¹³、6世紀の筑紫君磐井の反乱〔継体天皇22年（528年）〕に関係するとする説¹⁴がある。

25. 三雲南小路遺跡 文政5年（1822年）地下約1mから台口甕棺が出土し、有柄細形銅剣・銅鋒刺戈3・鏡35・勾玉・管玉・壺などの発見があった。¹⁵福岡県教育委員会が1974年から発掘調査を実施し、文政5年の甕棺とその隣にもう一基の甕棺を発見している。前者を1号・後者を2号甕棺と報告書では呼ぶが、1号甕棺の抜穴の周囲よりガラス壺5体分・ガラス勾玉2・ガラス管玉60・金銅四葉帯形飾金具8ヶ体分・鏡14面以上・鉄鏃・小玉などが発見されている。また2号甕棺は1号甕棺のすぐ北隣りから発見され鏡片10面以上、ガラス勾玉12・硬玉勾玉1・ガラス破片利用垂飾1などの発見があった。¹⁶この遺跡出土の鏡は前漢鏡ばかりである。

26. 鏡溝遺跡 三雲南小路遺跡の南にあり、天明年間（1781～88年）に、1枚中より「古鏡数十」、「鏡の紋の如きもの」、「刀剣の類」が出土したと伝えている。鏡の拓本から、唐草文鏡、雲文鏡、波文鏡、鳥獸連統草文鏡などの方格規矩四神鏡の型式に属するものと森本氏は解説する。これらの鏡の他に巴形銅器の出土があったようだ。さらに森本氏は、甕棺自身と伴出遺物の編年を整理し、三雲南小路よりも新しい時期におきている。現在、土器などは不明であり明確なことは言えないが、鏡の形式から、弥生中期末～後期初頭頃と考えてよいようだ。¹⁷



1. 湯崎遺跡
2. 宮の削道跡
3. 高岡古墳群 (1・2号墳)
4. 大叉遺跡
5. 高岡古墳群 (3・4・5号墳)
6. 徳先古墳
7. 今宮高田遺跡
8. 今宮大塚海遺跡
9. 今宮大塚古墳 (国指定史跡)
10. 今宮小塚遺跡
11. 若八幡古墳
12. 丸殿山古墳 (国指定史跡)
13. 佐氏馬場遺跡
14. 徳原遺跡
15. 志兼文石墓 (国指定史跡)
16. 恰土城跡 (国指定史跡)
17. 赤鳥桑原遺跡調査地点
18. 古野遺跡
19. 上里子遺跡
20. 石丸遺跡
21. 下山門遺跡
22. 牟多田遺跡
23. 野方中原遺跡 (国指定史跡)
24. 徳山古墳
25. 三葉梅小路遺跡
26. 徳津遺跡
27. 石ヶ輪遺跡
28. 平原遺跡
29. 先山古墳
30. 鏡坂古墳
31. 今山石冨岩母遺跡 (国指定史跡)
32. 端山古墳

第1図 今宮バイパス周辺の遺跡 (縮尺1/5000)

15. 志登支石墓（国指定史跡）弥生前期から中期に及ぶ墓塚墓地である。10基の支石墓があり、その間に墓棺が散在する。1953年に文化財保護委員会が支石墓4基と墓棺8基を調査した。石材は玄武岩と花崗岩が使用されている。遺物は磨製石鏃3点の他に打製石鏃などがある。墓棺は、單室、合口寛、杯や浅鉢を蓋としたものなどがある。支石墓の構造と磨製石鏃は、朝鮮半島の支石墓との関連をうかがわせる。

28. 平原遺跡 方形周溝の中心に割竹形木棺の痕と推定される墓がみつかり、副葬品は素環頭大刀・42面の鏡（変形内行花文八葉鏡・変形内行花文四葉鏡・内行花文四葉鏡・方格規矩四神鏡・四鏡連など）・ガラス製勾玉・琥珀製丸玉1000個以上・瑪瑙製管玉12・紺色ガラス製小玉600以上・赤色小玉・紺色丸玉などがある。なかでも変形内行花文八葉鏡は、径46.5cmという大きな仿製鏡で4面あり、弥生終末の時期の伊都国の国力を想起させるものがある。

また、この平野では前方後円墳を20基以上数えることが出来る。「若八幡古墳」・「丸隈山古墳」・場所はやや離れるが「一貫山鏡子塚古墳」など内部主体のわかっているものをあけても4世紀末から5世紀の頃におかれている。4世紀に朝鮮半島の侵略に従軍したであろうこの土地の族長層がきずいたものであろう。

著名な2〜3の遺跡を紹介したにすぎないが、それでも糸島平野が日本史の古代のなかではたした役割は、対大陸交渉の中心としてであったことは疑う余地はない。この平野部は、今口、福岡市西郊の住宅地として変貌しつつあり、バイパスの完成による影響は大きなものと予想される。文化財を守る行政側の私達としてはより慎重な態度で望まねばなるまい。

註1 下条信行・沢島巨編「宮の前遺跡（A〜D地点）」福岡県労働者住宅生活共同組合（1971）

註2 鏡山猛「怡土城跡の調査」日本文化研究所（1937）

註3 鏡山猛「北九州の古代遺跡」（1956）

註4 坪井清足「城瀬の設置」世界の考古学大系IV平凡社（1961）

註5 森本六爾編「柳園古器略考・鈔の記」（1930）

註6 柳田康雄編「井原・三雲遺跡発掘調査概報」福岡県教育委員会（1976）

註7 註5に同じ

註8 「志登支石墓群」文化財保護委員会・埋蔵文化財発掘調査報告4（1956）

註9 「邪馬台国のナゾにむく伊都国王墓展」パンフレット、夕刊フクニ社新聞社・平原遺跡調査団（1967）

第2 湯 納 遺 跡

福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査

本文目次

	頁
1. はじめに.....	7
2. 土製品について.....	7
(1) 縄文式土器.....	7
(2) 土師器須恵器について.....	12
① 土師器.....	12
② 須恵器.....	28
③ 歴史時代の小形盛器を主とする土師器・黒色土器などについて.....	31
(3) 青磁・白磁・陶器類について.....	36
(4) 古瓦片について.....	39
3. 木製品について.....	40
(1) 木製農工具.....	40
(2) 木製日常用具.....	42
(3) その他の日常用具.....	43
(4) 木製品の材質の分析について.....	44
4. 建築部材について.....	47
(1) 出土材による建物復原.....	47
(2) 使用された木工具について.....	59
(3) 建築部材の材質の分析について.....	61
5. 青銅製鋤先.....	63
(1) 湯納遺跡出土の青銅製鋤先について.....	63
(2) 青銅製鋤先について.....	63
① はじめに.....	63
② 青銅製鋤先と遺跡.....	65
③ 形式分類.....	67
④ 性格および用途.....	67
6. 植物遺体について.....	69

第2 湯 納 遺 跡

1. は じ め に

湯納遺跡については、遺構と遺物の出土状況について「今宿4」に報告した。今回は、前回山本輝雄氏が部材個々について説明を終えたものを土台として、九州芸術工科大学沢村仁先生に「出土材による建物復原」の原稿を頂いたものを掲載すると、前回遺物個々についての報告は若干しか報告出来ていないので、土製品、木製品、金属器などについて若干の報告を行うこととした。なお、石器類・弥生土器などについては都合上、次回にまわすこととした。

2. 土製品について

(1) 縄文式土器について

「今宿4」第93図、第94図、第95図のものと、他に第93図1～16と同様な小破片若干で総数約70点であり、明確に遺構に伴うものがなくここでは文様により3類に大別する。

1類土器（「今宿4」第93図1～16）

I-Y区出土がほとんどで、他はその周辺である6・14・15はI-U区出土である。I-Y区のもものはI-YE30・31区、XY tに検出された。「今宿4」第76図H1、H2の円形ピット直上層である腐蝕土混入砂質土層、紫砂層より、6はI-Z区D5溝の上層より14・15はI-UH25区より出土している。

1. 口縁がやや外反するもので、外面はなでの上に、口縁部に細く低い粘土紐凸帯を4本を乱雑によこに貼りつけ内面は口縁端部までよこに只数腹縁条痕文がみられる。外面は暗黒褐色、内面は極褐色を呈し、焼成は良好で胎土は少々小砂を混むも微密である。

2. 外面は口縁部に細いところと太いところと不統一でやや高低差のある粘土紐凸帯を3本を平行的に貼りつけ、内面は口縁端部近くまでやや幅広くかすかに斜め方向に条痕文が乱雑に施こされている。内外面とも暗黒褐色を呈し、焼成良好、胎土は大小の小砂粒を含むも密である。

3. 外面は口縁端部に近いところまで、細く鋭い平行に走る粘土紐凸帯が6本よこに貼りつけてあり、凸帯より底部に下る部分にはススが付着している。内面は口縁端部よりはなれて斜めとよこ方向に浅く細い条痕文がみられる。内外面ともに暗黒褐色を呈し、焼成良好で胎土は小砂粒を含むも密である。

4. 口縁端部は欠いているが、凸帯がみられることより口縁部でも上位の土器片と思われる

る。外面には太めの丸味をおびた高く平行に走る粘土紐凸帯が3本貼りつけられ、内面は無文である。内外面ともに暗黒褐色を呈し、焼成は良好で胎土は大・小砂を含みやや密である。

5. 口唇部までみられるもので外面は細く鋭い沈線が口縁端部より下位の4本はやや平行的でそれより下位の4本は大きく被打つ被状沈線である。内面は口縁端部直下よりよこに浅い条痕文が幅2cm近くに施こされている。外面はススが付着して黒くなっている部分がみられるが地肌は暗黒褐色で、内面も暗黒褐色である。焼成は良好で胎土は金色の小砂片(雲母粉末?)を少量含み、非常に緻密である。

6. 口縁部分で外面は無文、内面は口縁端部近くよりよこ方向の条痕文が施され、内外面ともよくなである。なお補修孔とみられる径約0.8cmの小孔がある。外面は明褐色、内面は暗黒褐色で、焼成は良であり胎土は密である。

7. 口縁端部は見られないが口縁部と思われ外面は幅広く深い斜めの沈線があり、沈線の両端には竹管で引いた痕が残る内面は浅く細い斜めに走る条痕文である。外面は褐色、内面は黄褐色を呈し、焼成は良で胎土は大小砂粒を含んでいるが密である。

8. 胴部近くで外面はやや幅広く深い沈線があり内面は細く浅い斜めのうすい条痕文が乱雑に施こされている。外面はススが付着しており暗黒褐色で内面はススのない暗褐色を呈し、焼成は良好で、胎土は小砂粒を含むが密である。

9. 胴部で外面は無文でやや凹凸があり、内面はよこ、斜めに走る浅い条痕文である。内外面とも大部分ススが付着している。外面は黒色、内面は暗黒褐色を呈し、焼成は良好で胎土は少量の大砂粒を含むも密である。

10. 底部に近く丸味を帯びている破片であり外面はよこ、斜めのうすい条痕文、内面はよこ、斜めのやや幅広く深い条痕文である。内外面とも黒褐色を呈し、焼成良好、胎土密である。

11. 底部により近い部分で外面はたての細く浅い条痕文、内面はたての極細の浅い条痕文が施こされている。内外面ともに暗黒褐色を呈し、焼成は良で胎土はやや密である。

12. 底部に近く外面はたての幅広く浅いよこの条痕文、内面は指で調整している。外面は黒褐色、内面は暗黒褐色を呈し、焼成は良好であり胎土は緻密である。

13. 底部に近い部分で内外面ともたての細く浅い条痕文である。内外面とも黒褐色を呈し、焼成良好であり胎土は密である。

14. 底部近くで外面は指腹による調整、内面はよこの浅い条痕文がみられる。内外面ともに黒褐色で、焼成はやや悪く胎土は小さな砂粒を含んでいてやや密である。

15. 底部に近く外面は荒い気まぐれな条痕文で内面はよこのやや幅広く浅い条痕文である。内外面ともに黒褐色を呈し、焼成は良で胎土は緻密である。器内が厚い。

16. 丸底の底部で外面は斜めの条痕文、内面は格子目の条痕文である。外面は明茶褐色、内面は黒色を呈し、焼成は悪く胎土は大砂粒を含み粗悪である。

以上のように1類土器1から16の5・7を欠く土器は凸帯文と条痕文であり前期前半の阿高式土器に、5・7は沈線文であり5は雲母を含んでおり前期の管細系土器である。

器形はいずれも深鉢形土器である。

2類土器（同第93図17～22）

I—UH25区出土で、第78図のG7杭列、付図第5図のC断面の第7層茶褐色粘質土層（腐植土混入）内より出土する。

17. 口縁部で、口縁部は凹凸の小さな波状で口縁端部は内厚で外反する。外面の凹線は幅広く深い。小破片のため全体の凹線文の構成は不明である。内外とも明茶褐色を呈し、焼成は良であり胎土は雲母を少量含んでおりそれが外面にはあまり出ず内面に多量に見られる。

18. 口縁部近くの胴部で凹線は浅く狭いところと幅広くところがあり不統一である。凹線文は直線文・曲線文と列点文よりなる。外面は褐色、内面は暗褐色を呈し、焼成は非常に良好で胎土に多量の雲母を含んでいる。

19. 口縁部に近い破片で凹線が幅広く深い。凹線文は曲線的で2つの列点文がみられる。内外面ともに茶褐色で、焼成は良好であり胎土は雲母を含み密である。

20. 胴部で一線だけよこの凹線文があり、内面に指腹による調整痕がかすかにみられる。外面は明茶褐色でスガが付着して内面は暗茶褐色を呈している。焼成は良好で、胎土は内面に多量の雲母がみられる。

21・22は胴部でいずれも外面は調整されていて茶褐色を呈し焼成良好であり胎土中に多量の雲母を含む。

以上2類土器は大形凹線文で胎土中に雲母を含む阿高式土器である。いずれも典型的な中期の阿高式土器で阿高式独特の大形凹線文が曲線的に構成されていて中期中葉に編年される。なお器形は深鉢形土器である。

3類土器（同第94・95図）

II—A・B・C・D区出土が多く、I区X・Y・Z区でも若干出土している。II—D区に在る第5図C1号壁穴住居跡周辺ではピット内出土のものがある。これらには壺・壺・浅鉢・深鉢形土器がありさらに細かく分類する。

壺形土器は凸帯文が口縁部より下につくもの(A)と直下近くにつくもの(B—I)、と直下につくもの(B—II)とに細分する。さらに口縁部が外反及び直立するものを1とし内反するものを2とする。

壺・A—1 同第94図1から4で、口縁部より下の胴部方向に太めの刻み目凸帯が付き、口縁部が直立する。刻み目は深いもの浅いもの、幅の広いもの細いものがあり、茶褐色のものが多く比較的焼成良好で胎土は密である。

壺・A—2 同第94図5で刻み目凸帯は口縁部の下方に付くが、口縁部が内反するものであ

る。

5の凸帯は三角凸帯で刻み目は深く垂直方向につく。茶褐色を呈し、焼成良好で胎土は密である。

壺・B-I-1 同第94図6,7で刻み目凸帯が口縁部のほぼ直下に付き、口縁部は直立する。

6は刻み目凸帯は低く刻み目も浅い。器内面に一部横位条痕を数条認めるが、凸帯部及び外面は摩滅しており不明である。全体に赤褐色で、口縁部のみは暗黒色をなす。焼成は良好で胎土は密である。7は口縁唇部は水平に近く刻み目凸帯は丸味を帯び刻み目は斜めで深い。なお、凸帯下1cm前後で接合をなしその部位は若干ふくらむが、内面は平滑である。内外面とも暗茶褐色を呈し、焼成は良好であり胎土は石英細砂粒を多く含む。

壺・B-I-2 同第94図8でB-I-1の口縁部が内反するものである。8の刻み目凸帯は高く浅い。内外面とも暗褐色を呈し、焼成良好でかたく胎土は細砂粒を含むも密である。

壺・B-II-1 同第94図9から13で、刻み目凸帯は口縁端部外面に付き、口縁部は直立する。

9の刻み目凸帯は高く、刻み目は斜めで深い。口縁部下1cm位に粘土の接合面が認められ内面に段を有す。内外面ともに暗褐色を呈し、焼成良好で胎土は細砂粒を含んでいるが密である。

10の凸帯は低く刻み目は浅い。外面にはうすい条痕がみられる。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈し、焼成はやや良で胎土は小砂粒を含み密である。

11の凸帯は高く刻み目は深い。外面は茶褐色、内面は淡明な灰茶色を呈し、焼成はやや悪く胎土は砂粒を多く含むやや粗である。

12の凸帯は幅狭く高い。刻み目は垂直と左下りの不統一で深い。外面に横方向の条痕があり、外面は暗茶褐色、内面は明褐色を呈し、焼成はやや悪く胎土は砂粒を含んでやや密である。

13の凸帯は幅広く低い。刻み目は左下りで深い。外面に横方向の条痕があり凸帯の下部分を一部かき取っている。内面は斜め方向にナデ付け。内外面とも黒褐色で、焼成は良好であり胎土は砂粒を含むも微密である。

壺・B-II-2 同第94図14,15でB-IIの口縁部が内反するものである。14の凸帯は幅広く低い。刻み目はへら状の器具によって器肉まで達するよう深く、帯状の粘土紐が1粒づつにちぎられていて、どの粒も張り出した粘土が下部で「下向きのI字」状となっている。外面に斜めの条痕あり。内外面とも茶褐色で、焼成は良好であり、胎土は砂粒を含むが密である。15の凸帯は幅が狭く高い。刻み目はほぼ垂直方向で深い。内外面ともに灰茶色で、焼成はやや悪く胎土は砂粒を含む。

同第94図16から19は胴部破片である。

壺形土器は口縁部が二片のみであるが、口縁端部により直立するもの(A)と外反するもの(B)に細分する。

壺・A 同第94図20で小破片である。口縁部直下に一条の沈線があり、口縁唇部は山状をなす。外面は茶褐色、内面は淡黒褐色を呈し、焼成悪く胎土に砂粒を含む。

壺・B 同第94図21底部近くまでである。口縁端部が大きく外反し、口縁唇部は丸味を帯びている。口縁部と胴部の境に若干の変換線がみられる。内外面ともに丁寧な整形がなされ、口縁部内面と外面全体に丹塗を施している。器高は約22cmを測る。

鉢形土器は口縁端部が直線的なものをAとし、さらに口縁部が口縁折部より大きく、最大径が口縁端部のものをA-Iとし、屈折部が最大径のものをA-IIとし、A-Iは浅鉢、A-IIは深鉢である。Bは口縁端部がコブ状のものである。いずれもB-IIであり、深鉢である。

鉢・A-I 同第95図1から3で、それぞれ口縁折部より口縁部にかけて違った特徴を有している。1は大きく「くの字状」に立ち上り、口縁唇部は丸い。外面は淡褐色、内面暗茶褐色を呈し、焼成は不良であり、胎土は砂粒を含みやや密である。2は口縁部が大きく外反し、口縁唇部は直線的である。内外面ともに淡褐色を呈し、焼成不良であり胎土は砂粒を含む密である。3は大きく「くの字状」に外反し、口縁唇部は尖り気味で、口縁反転部に厚みがあり、接合面を認める。内外面ともに暗茶褐色を呈し、焼成良好であり、胎土は細砂粒を含むも微密である。

鉢・A-II 同第95図4と5と6であり、4は口縁部より屈折して口縁端部は直立していて、口縁唇部は丸味を帯びる。器面のまめつが目立つ。内外面とも暗褐色を呈し、焼成は良であり、胎土は石英砂粒を多く含むもやや密である。5は大きく屈折して、そのまま細く尖り気味の口縁唇部となる。内面は暗黒色で外面は暗黒色と淡茶褐色の部分とがありまだらで、焼成は良好で胎土は砂粒を少し含むが密である。6は底部近くまであり、屈折部より小さく「くの字状」に立ち上り口縁端部となり、口縁唇部は直線的となり両角に丸味をもつ。口縁部の高さが高い。反転部に接合面を認める。内面は黒褐色で外面は暗褐色を呈し、焼成は良であり胎土は密である。

鉢・B-II 同第95図7と7で、8は口縁部がやや内傾して直線的に立ち上り、口縁端部は内外面ともにコブ状に太い。外面のその直下は沈線となる。口縁屈折部の稜は鋭い。外面は暗黒褐色、内面は黒色を呈し、焼成は良好であり、胎土は細砂粒を含むが密である。7は口縁部が大きく「くの字状」に立ち上り、口縁端部は外面のみに口縁唇部が外反する。8と同じく口縁屈折部の稜は鋭い。内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良であり、胎土は砂粒を含み密である。以上の鉢類はいずれも研磨されている土器である。

同第95図9は鉢IIの胴部で10から15は3類土器の底部である。底部のくびれ部は指による押え成形による稜が一周する。底周縁部に稜を有し、正円をなさず若干の上げ底をなす。内面は白褐色で外面は褐色を呈し、底部は一部分黒色をなす。焼成は良であり、胎土は砂粒を少し含みやや密である。底部径は9cmを測る。

底部11はくびれ部の横位に条痕を残し、その後底縁部をナデ整形した為に若干の稜をなして面を有す。底部は多少上げ底気味となり条痕を残す。底部断面形は円板底を接合し補強している。内面黒色、器壁内灰褐色で外面は暗茶褐色を呈し、焼成は良好であり、胎土は石英粒を含むが密である。底部径約10cm強を復元値で得た。これらは壺と鉢の底部と思われる。

第95図は円盤状土製品で、底部を利用した土器打欠き品であり、有孔円盤状製品の未製品とも思われる。

以上のように3類土器は晩期末の夜臼式土器であり甕形土器A-Iは古くA-II、Bは板付式土器併行期のもと思われる。壺形土器は夜臼式土器でも新しい方に、鉢形土器は夜臼式土器と板付式土器併行期のものようであり板付I式はない。このように3類土器は夜臼式土器のセットである。

縄文式土器は3類に大別され、1類は前期の竊式土器と曾畑系土器、2類は中期の阿高式土器に、3類は晩期の夜臼式土器に比定できる。そこで、1類土器はH1・H2ピットの直上層より出土しており、(H1・H2ピットはドングリの貯蔵穴である。)このピットの上面標高は4m40cmである。非常に低位置に在り、縄文時代前期の海進海退論の好資料となるものである。

九州地方における(中国、四国を含んで)竊式土器と曾畑式土器を出土する遺跡は数多くあり、この内標高m内外に位置する遺跡がいくつか存在しており、「海底遺跡」と呼ばれている。

(2) 土師器・須恵器について

ここで言う土師器・須恵器とは、古墳時代を主とし、奈良・平安時代のものも含む。しかし湯納遺跡では、壺・甕などの器種がなく、高台付碗・高台付皿・皿・碗などの一群の土師器・黒色土器は別項として報告する。

一括あるいはそれに近い状況のものなどで必要と考えたものについては先に報告する。なお個々のものは、器種ごとに表の形式で報告をすることとした。表中の器種下の番号は「今宿4」のなかの挿図番号であり備考の図版番号も「今宿4」の図版番号である。

①. 土師器(付図第1図)

II-A区D5溝より一括出土の土師器(「今宿4」第37-1・38・39・40・41・42・43・44・45・47図)の一群、III-U区D11溝より出土の土師器(同第57, 58図)が第55, 56図と混在して発見された一群と井堰跡の建築部材群といっしょに発見された一群がある。そのほかの場所からも、2~3点くらいずつ発見されている。

古式土師器の研究も近年非常にその資料が増加し、筑紫郡那珂川町柏田遺跡・糸島郡那原町三雲南小路の周辺の住居跡群から出土している土師器群など注目すべきものがあり、その成果に期待するところが大きい。土師器は弥生土器に比較して斉一性の強い性格をもつといわれ

ながらも、湯納遺跡のそれと比較するとき、柏田遺跡のものとも前原町の遺跡のものとも多少様相を異にしているようだ。このことはすでに早良平野は弥生・古墳時代を通じて伊都国（糸島平野）と奴国（筑紫平野）の緩衝地帯であると先学によってとらえられていることにそのこと自体に起因するようだ。

幸にも、早良平野では、有田遺跡・宮ノ前遺跡・野方中原遺跡・牟多田遺跡などが発掘調査されている。なかでも、有田遺跡の報告で小田宮上雄氏は、有田Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期を提示された。有田第Ⅰ期が畿内地方の庄内式文化期に選ずる資料。第Ⅱ期は畿内地方の布留式文化期に選じる様相を持つものと認められた編年が組まれた。さらに、有田第Ⅰ期と竪穴構造において類似する弥永原住居跡の弥生土器との対比から、両者の間にもう一様式を設定する必要を提起された。小田氏はこの空白部は、九州地方の弥生終末期の土器としての西新町式が設定されているが、これに近い要素を持った土師器が将来この空白を埋めることをこのときすでに予想された。宮ノ前遺跡を調査した下条信行氏は、いわゆる西新式の土器群とのとりくみから、宮ノ前Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式の編年を組まれた。このなかで宮ノ前Ⅲ式の土器は「壺・甕における丸底底部の増加と壺形土器製作における調整技法（ヘラ削り）、器形、造形技法や胎土に前時期と異った新しい要素の増大と新出をこの期に特徴的に認める」とし最古の土師器とされた。

この二書により早良平野の古式土師器は、宮ノ前Ⅲ式→有田Ⅰ期→有田Ⅱ期の順に編年されることとなった。が宮ノ前Ⅲ式と有田Ⅰ期との間にはまだ充足されていない間隙がありうるように思える。それは、宮ノ前Ⅲ式は、土師器としての認定は出来ても弥生土器の色彩をつよく残していることによるためである。

このなかにあつての湯納遺跡から出土した土師器群はどのような時間的・編年的な位置をしめるのであろうか。D5溝・D11溝出土の土器はすでに器形の上では、壺・甕・埴・甕・器台・長頸壺・杯・高杯などがあり、ヘラ削り・ハケ目仕上げなどの調整手法を具備し薄手丸底であり、従来・ごく一般的に土師器と言われてきたものであった。

井堰跡から出土の土器は、若干の弥生式土器の混入を除けば井堰用材として転用された建築部材といっしょに発見されていて、ほぼ一括の資料としてあてかえる。器種には、壺(同第91図1・2・3・4・5・10など)、甕(同第92図1・2・3)埴(同第91図6)がある。また、製作手法は壺・甕では粘土ひものまき上げ手法で頸・胴・底部の三つの部分をつなぎ合わせて作られ、器の表面を叩打した後ハケ目の仕上げをしているもの(同第91図3・92図1・3)、や胴部内面にヘラ削りの手法があるもの(同第91図2・4)、それらしいもの(同第91図3)、などがある。底部には、丸底のものと同部との間によわい稜を作りながらも中心部が張り出すものの二種がある。これを宮ノ前Ⅲ式の土器と比較した場合、さらに土師器の様相をもつものとしてとらえることが出来る。

この前提に立って形式的に3者を比較すれば古いものから順に井堰跡出土の土師群、D11溝

の土器群、D5溝の土器群の順にならべられる。ここでは仮に古い順に、湯納Ⅰ式 湯納Ⅱ式、湯納Ⅲ式の名称を与えることとする。

この3つの形式の土器を器種ごとに比較すれば、

壺、Ⅰ式は単口縁のみでやや厚手の器内をし、叩き目・胴内部のへら削りをするものがある。壺に比較してやや小さ目の球形胴で底部はよわい稜を胴との間にもち、中心部がふくらむものと丸底のもの二種がある。Ⅱ式では、今回の調査では二段口縁の大型の壺と小型の壺とがある。小型のものは、口縁部の中央がふくらみをもつ。Ⅲ式の二段口縁の壺に比較して外反度は弱い。底部には、丸底の破片がある。大型のものも壺であろう。Ⅲ式では、二段口縁のものと単口縁の二種類があり、二段口縁のものは長球形、単口縁のものは球形のようだ。なお、壺棺の破片がある。

甕 Ⅰ式では、口縁が外反せず直にたつものと、強く頸部で「く」の字状にくびれて外反するもの二種類があり胴は、倒卵形でやや尖った底部をもつものと思われる。胴表面に叩き目を残し内外ともハケ目で仕上げられている。全体的にやや厚手で弥生土器の形態に近い。Ⅱ式の甕は胴部下半の資料を欠くので全体の器形をとらえられないが、やや肩の張った球形胴を示している。口縁は内湾ぎみに外反するが、口縁下半が中ぶくれを見せるもの、強く「く」の字に外反するもの、口縁外面途中で弱い稜を作って折れを見せるものなどがある。Ⅲ式の甕は全体にやや長球形の胴をし丸底のものでⅡ式に比較して頸部のくびれがやや弱く、Ⅱ式で特徴的であった口縁の中ぶくらみも見られない。

長頸壺、Ⅱ・Ⅲ式にありⅡ式のもの口縁が内湾ぎみで張りがありつやがあるほどにみがかれている。Ⅲ式のもの外反する口縁が途中でさらに外反りを見せている。

高杯・Ⅱ・Ⅲ式にある。Ⅱ式にやや弥生土器としてもよいと思われる脚部があるがⅡ・Ⅲ式との間に大差はないようだ。逆にⅢ式に古い様相を示すものもあり次のように分けられる。杯部が球形をなすもの、杯の底で稜をつくり強く外反するもの、稜を作ったのちの外反度の弱いもの3つがあり、脚部では、脚柱が中ぶくれのするもの、脚底との間に折れをみせるもの、三ヶ所に穿孔があり、脚柱からゆるく脚底にまがるもの3種がある。

埴・Ⅰ・Ⅲ式にある。形式的にはⅢ式に古い様相がうかがえるがⅠ式のもの器内の厚さ調整手法はⅠ式の他の土器に共通のものである。Ⅲ式では胴高が低く口縁が強く内湾ぎみに長くのびるもの、やや球形の胴のもの、球形の胴に短い口縁がつくもの、頸部のくびれが強く埴としてはやや形のくずれを示すものなどがある。

器台、Ⅱ、Ⅲ式にあり、今回の調査ではⅡ式に特殊大型器台・Ⅲ式では小形の器台が見られる。

鉢 Ⅱ・Ⅲ式にある。Ⅱ式のもの甕形土器を平たくした感じで短い口縁が付く。Ⅲ式のものは大型で半球形のものである。

杯Ⅲ式にある。口縁のつくものに大・小、無口縁のものに大・中・小あり、いずれも丁寧
に仕上げられている。この外にⅢ式に甗がある。

以上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の相違点、共通点、形式的に逆転している部分についてふれたが、甗、甗
を基本にすえて考えるうえで編年の順序は成立し得る。ただし、Ⅰ・Ⅱ式は器種の不足・さ
らにⅡ式からⅢ式への移項はすなおにとらえることが出来るにしてもⅠ式とⅡ式との間には間
隙があることを認めなければならないなどの弱点を残している。Ⅲ式では、埴・高杯・甗など
の器に、形式的に古式・新式の区別が出来るように見えるが、発掘状況からは一括としてとら
えた資料である。なお、Ⅰ—Ⅱ区D2の土器は、滑石製品と伴出しているがこれもⅢ式のなか
にとらえる。

湯納Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を、有田Ⅰ・Ⅱ期および宮ノ前Ⅲ式の土器群と比較した場合一応次の
ような順に整理されよう。

宮ノ前Ⅲ式……→有田Ⅰ式→有田Ⅱ式

湯納Ⅰ式→湯納Ⅱ式→湯納Ⅲ式

宮ノ前Ⅲ式と湯納Ⅰ式との間の問題は・甗では前者には口縁内面先端を肥厚させるもの、
外反りまたは直に立ちあがる二段口縁のもの、頸部から曲線的に口縁が外反りするもの、小形
の甗の口縁のように内湾ぎみに外反りするものなどがあり、湯納Ⅰ式は単口縁のみであるとい
う差がある。が内面頸部下のヘラ削り削外面の甲き目などの調整手法など共通している。

甗では、どちらも倒卵形胴部、「く」の字形の頸部から外反する口縁をもつなど共通した要
素をしめしている。しかし逆に湯納Ⅰ式の方が頸部のくびれの強いことなど古い要素をもつ点
もある。しかし、全体的に見れば甗では、湯納Ⅰ式の甗が単口縁のものだけとすることは出来
ないが、より土師器的な器形となっていること、また埴の器種が新たに入っていることなどが
指摘出来よう。とすれば宮ノ前Ⅲ式より下らせて考えることが出来得よう。

つづいて有田Ⅰ・Ⅱ期と湯納Ⅱ・Ⅲ式に見るならば、有田Ⅰ式には甗の口縁外面に一条の突
帯をもつものなどがあり、甲き目を残す手法も残している。このことはすでに畿内庄内式に通
じる要素がある点などとして、小田氏により提起されているので湯納Ⅱ式はやや新しく置く必
要があるが、おくて始まりながらもある部分は重なりを持ち有田Ⅱ式よりは古くおくべきで
あろう。湯納Ⅲ式は、有田Ⅱ式とほぼ同時またはやや古いものと思われる点もあるが、器種
的に少なかった有田Ⅱ期を補うものともいえよう。

これを他の地方と比較するならば、宮ノ前Ⅲ式および湯納Ⅰ式は、齊一性をもつと言われる
土師器でありながら、弥生土器の西新式の新式とも言うべきであり、今すぐに比較するべき資
料をしらない。このことはさきにもふれたが、伊都や奴の地に、畿内型の前方後円墳があるの
に早良はその緩衝地帯となりついにその出現が見られなかった。この理由もこのへんにあるよ
うだ。湯納Ⅱ式は、甗・甗の口縁などの特徴が大坂府の小若江北遺跡の土器群に、湯納Ⅲ式は

奈良県布留遺跡の土器群に通じる様相がある。

- 註1 柏田遺跡は新幹線の車輛基地として井上裕弘氏等によって調査され、今年報告書刊行の予定であり、三雲周辺の遺跡は現在、柳田康雄氏等によって調査中の遺跡である。
- 註2 日野尚志 律令時代における早良平野の開発「有田遺跡」有田遺跡調査団(1968)
- 註3 森貞次郎・小田富士雄他「福岡市有田古代遺跡」福岡市教育委員会(1967)および註2に同じ
- 註4 下條信行・沢皇臣編「宮の前遺跡(A~D地点)」福岡県労働者住宅生活協同組合(1971)
- 註5 柳田純孝等「福岡市野方中原遺跡」調査概報 福岡市教育委員会(1974)
- 註6 烏津義昭等「牟多田遺跡」福岡市教育委員会(1974)
- 註7 小田富士雄 有田遺跡の土器とその性格 註2に同じ
- 註8 下條信行 土器編年について 註4に同じ
- 註9 横山浩一 手工業生産の発展・土器と須恵 器世界考古学大系3日本Ⅲ 平凡社(1959)と杉原荘介・大塚初重編「土師式土器集成本編1前期」東京堂出版(1971)を参照した。

第3表 土器の観察(その1)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼胎土	備考
甕	D5一括	口径 119.6cm 器高 (1) — 脚幅(2) — (3) —	●二段口縁で肩部は外反し断面は角ばる ●内面は腹部まで横なで接合部以下へウ割り ●外面はハケ目	●長球形を呈するものと思われる	欠損	淡褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版55-1
壺	D5一括	1180.5 1227.5 1305.5	●二段口縁で肩部はやや外反し断面は角ばる ●内面口縁部は横なで肩部はハケ目 ●外面口縁部はハケ目の上から横なで	●長球形の胴をもち最大径はやや上 ●内面はへウ割り ●外面はテテ方向のハケ目のあとよこ方向ハケ目	丸底 内側は指によるおさえ 外側にス付着	淡灰黒色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	口縁部・胴部・底部の二つに分けてつくり接合している
壺	D5一括	(1) — (2) — (3) —	●二段口縁で強く外反し断面は角ばる ●内面は横なで ●外面は横なで	●欠損	欠損	灰白色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	
壺	D5一括	(1) — (2) — 1321.1	●口縁欠損(二段口縁と思われる)	●長球形で器内うすい ●内面はへウ割り ●外面はハケ目	丸底 内面に指でおさえたい痕あり	灰白色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版55-5
壺	D5一括	1187.2 (2) — (3) —	●口縁のみの破片、肩部は剥離し、腹部も接合面で剥離している ●内面は横なで ●外面は横なで	●欠損	欠損	茶褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版54-1
壺	D11	1105.6 (2) — (3) —	●二段口縁で中ぶくれのする口縁、肩部は外反さみに丸味をもつ ●内面は横なで ●外面は横なで	●欠損	欠損	灰白色 焼成良好 胎土に多量の細砂を含む	図版55-3

第4表 土器の観察(その2)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼土	備考
甕	第58区-13	D11 口径 1129.8mm 器高 (2) — 胴部最大径 (3) —	●二絞口縁の大型の甕で先端部は角びる ●内面はハケ目仕上げのうえを横なで ●外面はハケ目仕上げのうえを横なで	●欠損	欠損	赤褐色 焼成良好 胎土に多量 の細砂を含む	意図用 図版66-9
(他部) 甕	第58区-12	D11 (1) — (2) — (3) —	●欠損	●欠損	丸底やや厚手 内面はハケ目指おさえ	茶灰色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	
甕	第39区-1	D5一括 1117.5 (2) — (3) —	●単口縁で頸部から大きく外反 ●内面はハケ目のあと横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●球形割を呈するものと思われる ●内面はへら削りのあとハケ目 ●指によるおさえ ●外面は荒いハケ目	欠損	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を多量に含む	頸部につながるの痕 図版65-2
甕	第39区-2	D5一括 (1) — (2) — 1328.0	●口縁欠損(単口縁と思われる) ●頸部付近にハケ目	●球形割で最大径は中やや内面はへら削り ●外面はハケ目のあと横なで	丸底で接合部より下で厚みを増す	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版66-4
甕	第43区-2	D5一括 (1) — (2) — (3) —	●単口縁で頸部からするとく外反する ●頸部の断面は角びる ●内外面とも横方向のなで	●欠損	欠損	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	
甕	第43区-3	D5一括 (1) — (2) — (3) —	●単口縁でやや厚手 ●内外面とも横方向のなで	●欠損	欠損	茶灰色 焼成良好 径2mmほどの砂粒を含む	
甕	第91区-1	井堀 1127.0 (2) — 1323.6	●頸部のまがりは弱く、口縁の外反度も強くない ●内面は横なで ●外面は横なで	●下半欠損、頸部からゆるい曲線で胴部を形成するがつくりは粗い ●内面は指おさえ、へら削り ●外面は横なで	欠損	茶褐色 焼成良好 胎土に多量の砂粒を含む	図版69-1
甕	第91区-2	井堀 1117.1 (2) — (3) —	●頸の接合部からやや内面がみに立ち上り、丸い口縁端となる ●内面はハケ目のあと横なで ●外面は横なで	●下半欠損、頸部からへら削りによって器内は薄くなるながら下半へ移行する ●内面はへら削り ●外面はハケ目仕上げ、頸部は横なで	欠損	褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	肩外面に右の正横を残す 図版69-4
甕	第91区-3	井堀 1125.7 (2) — 1323.4	●頸部より直線的に立ち上り、中位より外反する ●内面はハケ目のあと横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●下半欠損、球形割で器内はうすい ●内面はへら削り、ゆびによるおさえ ●外面は印打したあとハケ目仕上げ	欠損	暗褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版69-2

第5表 土器の観察(その3)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼土	備考
壺 第39図-4	井 堀	口径 (1)16.6cm 器高 (2) — 胴部最大径 (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ●頸部より内湾ぎみに立ち上り薄く、丸廻りのする口縁端を作る ●内面はハケ目のあと横なで ●外面は指によるおさえのあととハケ目 	<ul style="list-style-type: none"> ●大半欠損 ●内面はへり削り ●外面はハケ目のあと横なで 	欠 損	褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	
壺 第39図-5	井 堀	(1) — (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ●頸部から外反しながら立ち上り、口縁断面は丸い ●内面は横なで ●外面は横なで 	<ul style="list-style-type: none"> ●一部分のみ ●内面は指によるおさえ ●外面はハケ目のあととなでつけ 	欠 損	褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	
壺 第39図-10	井 堀	(1) — (2) — (3)22.6	●欠 損	<ul style="list-style-type: none"> ●上半欠損 ●縁部で頸内は厚い ●内面はなでつけ、底部との接合部にへら状の工具痕 ●外面はハケ目のあと横なで 	平底に近く中央部がややふくらむ	褐色 焼成良好 胎土に径 1-6mm ほどの砂 粒を含む	図版69-8
(底 部) 第39図-7	井 堀	(1) — (2) — (3) —	●欠 損	●欠 損	平底に近く中央部がややふくらむ	褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	第39図-10 の例から意 図される
(底 部) 第39図-8	井 堀	(1) — (2) — (3) —	●欠 損	●欠 損	平底に近く胴との接合部に筋はない、中央がふくらむ	褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	第39図-10 の例から意 図される
(底 部) 第39図-9	井 堀	(1) — (2) — (3) —	●欠 損	●欠 損	丸底に近い	暗褐色 焼成不良 胎土に砂 粒を含む	
(底 部) 第39図-11	井 堀	(1) — (2) — (3) —	●欠 損	<ul style="list-style-type: none"> ●一部分残る ●内面はハケ目仕上げ ●外面はハケ目仕上げ 	丸底に近いが狭い平坦面をもつ	暗褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	図版69-6
壺 第40図-1	D 5-一括	(1)12.0 (2)15.0 (3)12.7	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁は頸部からやや内湾して立ち端部は角ばる ●内面は横方向のハケ目 ●外面はハケ目のあと横なで 	<ul style="list-style-type: none"> ●やや胴長で厚手である ●内面は肩部で横、その下はたて方向のへら削り ●外面はたて方向のハケ目 	欠損(丸底) 外面は底面近くで横方向のハケ目	茶灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	型の中では最も小さい 図版56-1
壺 第40図-2	D 5-一括	(1)13.6 (2) — (3)17.0	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁は頸部から直線的に外反 ●内面は指痕を残す ●外面は横方向のなで 	<ul style="list-style-type: none"> ●最大径がやや上にある球形 ●内面はへら削りのあととなでつけ ●外面はハケ目 	欠損(丸底)	灰褐色 焼成良好 胎土に砂 粒1-2 mmのもの を含む	図版56-3

第6表 土器の観察(その4)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼土	備考
甕 第40図-3	D5一括	口径 (1)15.5cm 器高 (2)21.8cm 胴部最大径 (3)19.6cm	●口縁は胴部から内湾しながら立ち上がる。肩部断面は丸い ●内面は横なで ●外面は横なで	●ややゆがんだ球形、胴部最大径が中位にくる ●内面はヘラ削りのあとなで ●外面はハケ目	丸底で最下部がやや厚い 外面にスス付着	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	口縁部・胴部・底部の三つに分けて作り接合している 図版56-5
甕 第40図-4	D5一括	(1)15.5 (2) — (3) —	●口縁は胴部から直線的に外反、肩部は角びる ●内面はハケ目とのあと横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●下半を欠く、肩部に接合の痕あり ●内面は胴部で横方向のヘラ削り ●外面はハケ目	欠損	明灰白色 焼成不良 胎土に砂粒を含む	
甕 第40図-5	D5一括	(1)14.9 (2) — (3) —	●口縁部は内湾しながら立ち上がり角びった口縁端となる ●内面は横なで ●外面は横なで	●やや圓のはった球形割となる ●内面はヘラ削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	褐色 焼成不良 径2~3mmの砂粒を含む	外側全面にススが付着している
甕 第40図-6	D5一括	(1)14.7 (2) — (3)20.0	●口縁部はやや内湾して立ち上がり角びった端部となる ●内面はハケ目の上から横なで ●外面はハケ目の上から横なで	●最大径を中位よりやや上にもつ ●内面はヘラ削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	褐色 焼成良好 胎土は径1~2mmの砂粒を含む	図版56-2
甕 第40図-7	D5一括	(1)15.0 (2)20.9 (3)18.7	●内湾しながら立ち上る口縁部で先端は角びる ●内面はハケ目のあと横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●長割で最大径を上半にもつ ●内面はヘラ削り ●外面はハケ目仕上げ	丸底	褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版56-5
甕 第41図-1	D5一括	(1)17.0 (2) — (3) —	●内湾しながら立ち上り、肩部近くでややふくらみをます ●内面は横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●内面ヘラ削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	灰褐色 焼成良好 胎土に多くの砂粒を含む	図版57-1
甕 第41図-2	D5一括	(1)17.8 (2) — (3)22.9	●頸部はややだれている、口縁は内湾、肩部は角びる ●内面は横なで ●外面は横なで	●やや長割 ●内面はヘラ削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	灰色 焼成不良 胎土に2~3mmの砂粒を含む	図版57-2
甕 第57図-3	D11	(1)15.4 (2) — (3) —	●頸部のくびれは強く、口縁部がふよくらみし、内湾がみに立ち上る ●内面は横なで ●外面は横なで	●ほとんどが欠損 ●内面は接合部下ヘラ削り ●外面はハケ目の上に横なで	欠損	淡茶色 焼成良好 胎土に砂粒を多量に含む	
甕 第57図-4	D11	(1)15.7 (2) — (3) —	●頸部のくびれが強く、口縁の中ふよくらみが大きい ●内面はあれびどい、横なで ●外面は横なで	●大半欠損 ●内面はハケ目のあと横なで ●外面はヘラ削り	欠損	赤褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	

第7表 土器の観察 (その5)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴部の特徴	底部の特徴	色調 胎土	備考
甕	D11	(1)12.8cm 器高 (2) — 器最大径 (3)15.1cm	●とくに頸部のくびれが強く、口縁の中ぶくらみも大きい、端部断面は丸い ●内面は横なで ●外面は横なで	●下子は欠損するが、かなりの陰彫刻となりそう ●内面はへう削り ●外面は上半横なで、下半ハケ目	欠損	茶褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版64-8
甕	D11	(1)15.4 (2) — (3) —	●頸部のくびれから内湾ぎみに外反する、口縁の中ぶくらみも大きい ●内面は二段の弱い縁線があり、横なで ●外面は横なで	●下半欠損 ●内面は頸部に指のおさえへう削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	赤褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	
甕	D11	(1)16.7 (2) — (3)22.8	●頸部のくびれはやや強く内湾ぎみに外反する、口縁端部の断面は角ばる ●内面はハケ目のあと横なで ●外面は横なで、スス付着	●下半欠損、やや長胴の器形になるものと思われる ●内面は頸接合部へう削り指によるおさえ、中下半へう削り ●外面は裏面側、ハケ目仕上げ	欠損	茶褐色 焼成良好 胎土に1-3mmほどの砂粒多量	図版64-5
甕	D11	(1)16.7 (2) — (3)21.9	●外反度のきつい口縁で頸部は「く」の字を呈する ●内面は横なで ●外面は横なで	●頸部から直線的に広がりやや長胴となりそう ●内面はへう削り ●外面はハケ目のあと横方内のなで	欠損	暗褐色 焼成良好 胎土に径1-3mmの砂粒多量	図版64-9
甕	D11	(1)14.7 (2) — (3)20.8	●頸部から内湾ぎみに立ち上る口縁で下ぶくれがする、端部は角ばった断面 ●内面は一致の弱い縁線が出来ていて横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●球形胴である ●内面はへう削り、頸部下で指のおさえ ●外面はハケ目仕上げ	欠損	暗褐色 焼成良好 胎土に径1-3mmの砂粒多量	図版64-7
甕	D11	(1)19.4 (2) — (3) —	●頸部からするどく外反して中位に一段の横が出来る ●内面は横なで ●外面は横なで	●頸部からやや直線的に広がる胴で下半欠損 ●内面は頸部へう削りのあと指のおさえ、下半へう削り ●外面はハケ目仕上げ	欠損	灰白色 焼成良好 胎土に細砂粒多量	
甕	井堀	(1)13.6 (2) — (3)26.9	●頸部から直に立ち上る、端部は丸くなる ●内面はハケ目のあと横なで ●外面は横なで	●下半欠損、長胴で器内はうすい ●内面は細かいハケ目仕上げ ●外面は甲冑の上に丸いハケ目	欠損	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版69-3
甕	井堀	(1)25.8 (2) — (3)30.4	●頸部は「く」の字にくびれやや中ぶくれする感じで外反する口縁がある、端部断面は角ばる ●内面は横なで ●外面は横なで	●下半欠損、長胴で器内はうすい ●内面はハケ目のあとなどでつけ ●外面は甲冑の上にハケ目仕上げ	欠損	暗褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版69-7
甕	井堀	(1)22.0 (2) — (3)27.1	●「く」の字にまがる頸部からやや中ぶくれして外反する、端部は角ばる ●内面はハケ目のあと横なで ●外面はハケ目のあと横なで	●下半欠損、長胴形や肩部の肉が厚い ●内面は頸部はハケ目のあと横なで、胴部は指のおさえ ●外面は甲冑のあとハケ目仕上げ	欠損	茶褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	器外面全体にスス付着 図版69-9

第 8 表 土 器 の 観 察 (その 6)

器 種	出土地点 遺 構	法 量	口 頸 部 の 特 徴	肩 胴 部 の 特 徴	底 部 の 特 徴	色 調 胎 土	備 考
壺 第73図	D 1 上層	口径 (1)12.6cm 器高 (2)13.8cm 胴部最大径 (3)15.3cm	●短い口縁がやや内湾しながら、まっすぐに立つ ●内面は広い横なで ●外面は広い横なで	●球形の胴で外面斜方向にへう割りのあとを残す ●内面はへう割り ●外面はへう割り	丸底(?)	暗褐色 焼成良好 胎土に多量の砂粒を含む	
壺 第47図-3	D5 仲土pit	(1)118.0 (2) — (3) —	●頸部からやや内湾ぎみに立ち上る口縁で肩部断面は丸がる ●内面は横なで ●外面は横なで	●下半欠損 やわらかい球形胴である ●内面はへう割り ●外面はハケ目仕上げ	欠 損	淡灰色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版60-3
小 壺 第47図-1	D5 仲土pit	(1)110.5 (2)10.4 (3)11.8	●胴部がよくびれている直線的に外反する口縁でやや中よぐれている ●内面は横なで ●外面は横なで	●肩部のりがつよい ●内面はへう割り ●外面はへう割りのあとと横なで	丸 底 光沢がある	暗褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版60-1
長 頸 壺 第44図-9	D5 一拵	(1) — (2) — (3) —	●頸部から外反して立ち上り、一度くびれてすぐどい口縁に移行する ●内面は横なで ●外面は横なで	●欠 損	欠 損	褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版58-11
長 頸 壺 第59図-2	D 11	(1)114.6 (2) — (3) —	●中よぐらみをしながら直線的に外反する ●内面は先端部横なでハケ目 ●外面はへうによる磨き、光沢あり	●欠 損	欠 損	茶褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版65-5
長 頸 壺 第63図-1	D 5 (1-Y区)	(1) — (2) — (3)13.4	●欠 損	●頸部がやや肩上りの球形胴を作る ●内面はへう割りのあとと横なで ●外面は胴部で横なで下半ハケ目を残す	丸 底	灰褐色 焼成不良 胎土に少量の砂粒を含む	図版66-3
壺 第44図-1	D5 一拵	(1)110.5 (2) 7.1 (3) 6.8	●やや内湾ぎみにすっと外反する口縁をもつ ●内面は丸れがひどく不明 ●外面は横なで	●口縁に比べて胴はきわめて小さい ●内面は横なで ●外面は横なで	丸 底	淡茶褐色 焼成不良 胎土に細かい砂粒を含む	図版58-7
壺 第44図-2	D 5 拵	(1)110.2 (2) 9.2 (3) 7.2	●胴部から一度内湾する感じで立ち上り、その後には外反する口縁で肩部は丸くうすい ●内面は横なで ●外面は横なで	●口縁から強くくびれて胴部となる ●内面はへう割り ●外面は横なで	丸 底	褐色 焼成不良 胎土に砂粒を含む	図版58-10
壺 第44図-3	D 5 一拵	(1)111.6 (2) — (3) 6.5	●外反度があつた口縁で先端は外反ぎみに丸めをもつ ●内面はハケ目のあとと横なで ●外面は横なで	●口縁から強くくびれて胴部になる ●内面は丁寧なへう割り ●外面は横なで	欠 損	赤茶色 焼成不良 胎土に小砂粒を含む	図版58-13

第9表 土器の観察 (その7)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼胎土	備考
埴 第44図-4	D 5-一括	口径 (1) 10.0cm 器高 (2) 8.4cm 胴部最大径 (3) 7.8cm	● 胴部から一度内湾ぎみに立ち上り、直線的に外反する口縁をもつ、底部はうすく丸い ● 内面は細かいハケ目 ● 外面は横なで	● 口縁から強くくびれて胴部になり、丸みも大きくなる ● 内面はなでつけ ● 外面はハケ目のあととなでつけ	丸底 やや平たい感じがある	茶褐色 焼成良好 胎土に小砂粒を含む	図版58-10
埴 第44図-5	D 5-一括	(1) 7.5 (2) 7.0 (3) 7.9	● 外側によわい線を有する短い口縁 ● 内面は横なで ● 外面は横なで	● 球形の胴をもつ ● 内面へう削り ● 外面上半部なし、下半部ハケ目	丸底	茶灰色 焼成不良 胎土に砂粒を含む	図版58-11
埴 第44図-6	D 5-一括	(1) — (2) — (3) 8.3	● 欠損	● 口縁とのつながりはだれて胴部は丸みを帯びる ● 内面はなでつけ ● 外面は横なで	丸底	暗褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版58-14
埴 第44図-7	D 5-一括	(1) — (2) — (3) 9.1	● 欠損	● 平たい球形胴で厚い ● 内面はなでつけ指によるおさえ ● 外面は横なで	丸底	灰褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版58-9
埴 第44図-8	D 5-一括	(1) — (2) — (3) 9.6	● 欠損	● やや大きな平たい球形胴 ● 内面はへう削り ● 外面は上半へう削り	丸底 外面へう削り		
埴 第91図-6	井 電	(1) 9.7 (2) 8.3 (3) 8.3	● 胴部からの立ち上りは直線的にゆるく外反する ● 内面は横なで ● 外面はハケ目のあと横なで	● 球形で器内は厚い ● 内面は指によるおさえ ● 外面はハケ目仕上げ	丸底	褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版69-5
埴 第69図-1	D 2* (I-VI)	(1) 10.2 (2) 7.8 (3) 7.0	● 胴部から内湾ぎみに外反する口縁 ● 内面は荒れひどく不明 ● 外面は荒れひどく不明	● 胴部からやや肩のはった球形胴をつくる ● 内面は荒れひどく不明 ● 外面は荒れひどく不明	ややとがりぎみの丸底	淡褐色 焼成不良 胎土に少量の砂粒とえんど含まず	第132図 1-8 共伴 第133図 1-4 図版67-1

第10表 土器の観察 (その8)

器種	出土地点 遺構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 焼胎土	備考
高杯 第42図-1	D 5-一括	口径 (1) 17.4cm 器高 (2) — 胴底径 (3) —	● 杯部の底で明瞭な線を有し、口縁部は力強く外反する ● 内面、外面共に横なで	● 欠損	茶褐色 焼成不良 胎土に少量の砂粒を含む	図版57-4

第11表 土器の観察(その9)

器種	出土地点 遺構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 焼土	備考
高杯 第42図-2	D5一括	口径 (1)18.5cm 器高 (2) — 脚底径 (3) —	●杯部の底で段を有し、口縁端は鋭く尖る ●内面、外面共に丁寧な横なで	●欠損 ●杯部の接合部にへう状の工具痕	茶褐色 焼土 胎土に少量の砂粒を含む	図版57-6
高杯 第42図-3	D5一括	(1)17.4 (2) — (3) —	●外面に一段横をつくり、力強く外反する。内面の縦線は弱い ●内面は横なでのあとへう磨き ●外面はへう磨きのあと下半部よこなで	●欠損	淡茶灰色 焼土 胎土に砂粒を含まない	図版57-7
高杯 第42図-4	D5一括	(1)18.1 (2) — (3) —	●杯底部からゆるやかな曲線で口縁部に移行し段をもたない やや厚手端部は丸 ●内面は横なでのあとよわいへう磨き ●外面はハケ目の上にへう磨き	●欠損 ●杯接合部に凸突起	灰褐色 焼土 胎土に少量の砂粒を含む	図版57-5
高杯 第42図-5	D5一括	(1)15.8 (2)14.3 (3)12.2	●内外ともに明確な段を有し、口縁は直線的に外反 ●内面はハケ目のあとよこなで ●外面は横なで	●直線的に脚底につながる脚柱である ●内面はへう削り ●外面はなでつけ	灰白色 焼土 胎土に小粒の砂を含む	図版57-8
高杯 第42図-6	D5一括	(1)15.4 (2)14.0 (3)11.6	●浅い杯部で内外ともに段がない、鋭い脊りである ●内面、外面共によこなで	●杯底部に粘土を盛り上げて接合、脚柱内面にしぼりの痕 ●内面はしぼりの後磨きおさえ ●外面は脚柱へう磨き、脚底横なで	杯部・脚柱・脚底の三つに分けて作っている	図版58-6
高杯 第42図-7	D5一括	(1) — (2) — (3)11.6	●欠損	●脚柱と脚底との接合部で外面から三つの穴が穿たれている ●内面はしぼりのあと磨きのおさえ ●外面はハケ目のあとへう磨き	灰白色 焼土 胎土に砂粒を含む	図版58-1
高杯 第42図-8	D5一括	(1) — (2) — (3)11.8	●欠損	●脚柱と脚底との接合部に外面から3つの穿孔がある ●内面は脚柱へう削り脚底ハケ目仕上げ ●外面はハケ目仕上げのあとへう磨き	褐色 焼土 胎土に砂粒を含む	図版58-4
高杯 第42図-9	D5一括	(1) — (2) — (3)11.3	●欠損	●他の高杯に比較し脚柱と脚底とのくびれが強い ●内面は脚柱部へう削り、脚底部横なで ●外面は横なで	暗褐色 焼土 胎土に砂粒を含む	図版58-2
高杯 第42図-10	D5一括	(1) — (2) — (3)11.1	●欠損、脚柱の頸部に杯底の一部が残る	●直線的な脚柱から脚底はゆるく開く ●内面は脚柱部へう削り横なで脚底ハケ目横なで ●外面はハケ目仕上げのあと横なで	淡黒茶色 焼土 胎土に砂粒を含む	図版58-3

第12表 土器の観察 (その10)

器種	出土地点 造構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 焼胎 土質	備考
高杯 第42図-11	D5-一番	口径 (1) 一 器高 (2) 一 脚底径 (3) 13.7cm	●欠損	●中ぶくれのする脚柱、脚底も外にふくれる感じがする ●内面は脚柱上部にしぼりの模様まで ●外面は横まで	茶褐色 焼良 胎土に砂粒を含む	図版58-5
高杯 第58図-8	D11	(1) 17.3 (2) 一 (3) 一	●杯底部欠損、口縁と杯底円盤との接合部の剝離した痕あり ●内面、外面共に丁寧な横まで	●欠損	茶灰色 焼良 胎土に砂を含まない	図版65-6
高杯 第58図-9	D11	(1) 17.0 (2) 一 (3) 一	●口縁は大きく外反する、口縁部と杯底円盤の接合部に剝離痕あり ●内面、外面共に丁寧な横まで	●欠損	淡水茶色 焼良 胎土に炭人ど砂粒を含まない	月並彩
高杯 第58図-10	D11	(1) 一 (2) 一 (3) 12.3	●欠損	●脚柱は杯縁合部からやや太くなり、そのまま「く」の字状に平たい脚底部に移る ●内面は上半にしばり脚底は「う」目 ●外面は脚柱部横まで、脚底部ハケ目	暗褐色 焼良 胎土に砂粒を含まない	図版65-7
高杯 第58図-11	D11	(1) 一 (2) 一 (3) 15.2	●欠損	●器内の厚い脚柱からフツフツに脚底部に移行する ●内面は一部にヘラ削りハケ目仕上げ ●外面はハケ目仕上げ ●欠損	淡水茶色 焼良 胎土に砂粒を含む	図版65-8
高杯 第47図-2	D5 岸北pit	(1) 16.8 (2) 一 (3) 一	●杯外底に一破の段をもち口縁は突順りに外反する ●内面、外面共に横まで	●杯、脚接合部に丸い突起がある	灰褐色 焼良 胎土に砂粒を含む	図版60-2
高杯 第59図-6	D11新	(1) 一 (2) 一 (3) 一	●口縁欠損、このまま平たく広がる杯部と思われる ●内面はヘラ磨き ●外面はハケ目	●脚柱は中空にならず粘土脚で脚底に3つの穿孔がある ●内面は横のおさえと横まで ●外面はハケ目	茶褐色 焼良 胎土に砂粒を含まない	図版63-10
高杯 第14図-3	II-F区 第2層	(1) 一 (2) 一 (3) 12.4	●欠損	●やや厚手の脚柱は直線的にのび、糸のくびれを作って直線的な底部となる ●内面はヘラ削り ●外面は脚柱へラ磨き、脚底横まで	赤褐色 焼良 胎土に砂粒を含む	脚くびれ部に焼成前の穿孔が3ヶ所ある
器台 第44図-10	D5-一番	(1) 一 (2) 一 (3) 10.0	●欠損	●くびれ部から外ぶくらみして大きく広い脚底に移る ●内面は上半へラ削り、下半は横まで ●外面は横まで	茶褐色 焼良 胎土に砂粒を含む	くびれ部に焼成前の穿孔あり 図版59-1

第13表 土器の観察 (その11)

器種	出土地点 遺構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 胎土 焼上	備考
甗 第44回-11	D5-一括	(1) 口径 — 高さ (2) — 底径 (3) —	●上半部欠損、やや厚い杯部が直線的に外反 ●内面、外面共に横なで	●下半部欠損、やや厚い脚部は内湾がみに開く ●内面は横なで指おさえ ●外面は横なで	茶褐色 焼良 胎土に砂 粒は少な い	くびれ部上からの焼成前の穿孔がある 図版59-2
甗 第44回-12	D5-一括	(1) 8.5 (2) 8.6 (3) 10.1	●中ぶくらみの口縁で幅は薄くとがる ●内面、外面共に横なで	●くびれ部からやや内湾がみに張りをもち端部は外反する ●内面はしぼりのあと指のおさえ ●外面は上平ハケ目仕上げ、下半部は横なで	褐色 焼良 胎土に砂 粒を含む	くびれ部に焼成前の上からの穿孔がある 図版59-3
甗 第58回-4	D11	(1) — (2) — (3) —	●口縁欠損、頸部のくびれから明確な段をつくり直線的に外反 ●内面はヘラ削り ●外面は横なでヘラ磨き	●頸部くびれの下に一段をもつて内湾がみに開く ●内面はヘラ削り ●外面は横なで	灰黄色 焼良 胎土に砂 粒を含む	図版65-10

第14表 土器の観察 (その12)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色調 胎土 焼上	備考
甗 第41回-3	D5-一括	(1) 口径 119.9cm 器高 (2) 14.8cm 脚高 (3) —	●鉢形の土器で内面に一段の段が付き口縁を形づくる ●端部断面は内 ●内外面共に荒れがひどく不明	●口縁とらゆるい曲線で底部に移る ●胴内面はヘラ削り、外面は荒れがひどく不明 ●丸底の中央に内側から1.0×1.5cmの丸い穿孔あり	灰黄色 焼良 胎土に3 ~5mmの 砂粒多量	図版57-3
甗 第63回-4	D5 (I-Y区)	(1) — (2) — (3) —	●欠損	●大半欠損 ●胴部内面は指によるおさえ、外面はハケ目のあとをうけ ●焼成前の外側から1.5×1.5cmの穴が穿孔	赤褐色 焼良 胎土に砂 粒を含む	図版69-5
甗 第63回-5	D5 (I-Y区)	(1) — (2) — (3) —	●欠損	●欠損 ●平底に楕円形の4孔が焼成前に穿孔されているものと思ふ	茶褐色 焼良 胎土に砂 粒を含む	
鉢 第45回-9	D5-一括	(1) 27.0 (2) — (3) —	●やや内湾したままの口縁で端部は丸みをもつ ●内面、外面共に横なで	●内湾する口縁よりやや張りをもち胴部となる ●胴部内面はヘラ削り指のおさえ、外面はハケ目、下半でヘラ削り ●丸底	褐色 焼良 胎土に砂 粒を含む	図版59-10
鉢 第45回-10	D5-一括	(1) 29.4 (2) 17.0 (3) —	●口縁端から1.5cmほど下位でやや外反する口縁をもつ ●内面、外面共に横なで	●器肉は一段でやや厚目の底部へ移行する ●胴部内面は荒れがひどく仕上げなど不明、外面も荒れがひどい、ヘラ削り ●丸底	黄褐色 焼良 胎土に3 ~4mmの 砂粒を含む	図版69-13

第15表 土器の観察 (その13)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色調 胎土	備考
鉢 第57図-1	D11	口徑 (1)15.4 最高 (2) — 軸心 (3)15.4	●頸部から外反して外反する 口縁をもつ ●内面、外面共に横なで	●頸部から丸みをもって広がり やや厚手 ●胴部内面はへう削り、外面は なでつけ ●丸 底	灰白色 焼 良 胎土に砂 粒を多量 を含む	図版64-1
鉢 第57図-2	D11	(1)15.2 (2) — (3)17.2	●短い口縁が頸部から直接的に 外反する ●内面、外面共に横なで	●頸部からつよくまがって広がり 胴をつくる ●胴部内面はへう削り、横なで 、胴部に磨のおさえ、外面は ハケ目仕上げで横なで ●丸 底	茶褐色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	図版64-6
杯 第65図-1	D5一括	(1)14.5 (2) 5.5 (3) —	●中位よりやや上部に1段のく びれがあり、口縁となる 口縁はやや中ぶくらみ、丸い 口縁部をつくる ●内面、外面共に横なで	●丸い胴部で底部に移行する ●胴部内面は割いへう磨き、外 面は下半部へう削り ●丸底 (胴部との差はない) へ う削り	褐色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	図版59-7
杯 第45図-2	D5一括	(1)17.0 (2) 6.5 (3) —	●第45図-1と同じ器形でやや 大きい、口縁はやや内湾ぎみに 外反する、肩部は内湾する ●内面、外面共に横なで	●丸い胴部でへう削りを施す ●胴部内面はなでつけ、外面は へう削りのあとなでつけ ●丸底 (胴部との差はない) へ う削り	褐色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	図版59-4
杯 第46図-3	D5一括	(1)11.6 (2) 5.1 (3) —	●厚手の胴部から薄くなりなが らやや内湾する口縁となる ●内面、外面共に横なで	●口縁と胴部との差はない ●胴部内面はなでつけ、外面は へう削りのあとなでつけ ●やや広めの底部で内も厚い	灰褐色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	図版59-5
杯 第45図-6	D5一括	(1)13.1 (2) 3.7 (3) —	●薄い器内の土器で丸い口縁端 部をもつ ●内面、外面共に横なで	●口縁との差はみとめられない ●胴部内面は横なでのあと暗文 あり、外面はへう磨き ●丸 底	暗褐色 焼 良 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版59-9
杯 第45図-7	D5一括	(1)15.2 (2) 4.7 (3) —	●角ばった口縁端部を作る、同 様の器形の第45図-6より大 きい ●内面、外面共に横なで	●口縁、胴部、底部の差はない ●胴部内面は丁寧ななでつけ、 外面はへう削り ●丸 底	褐色 焼 良 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版59-11
杯 第45図-8	D5一括	(1)17.9 (2) 7.2 (3) —	●同様の器形第45図-5、6よ りもさらに大きい、口縁端部 はやや外反 ●内面、外面共に横なで	●胴部は中ほどがややよくらみ をもつ ●胴部内面はなでつけ、外面は へう削りのあとなでつけ ●丸 底	茶褐色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	図版59-12
杯 第63図-3	D 5 (1-YE)	(1)15.1 (2) 6.5 (3) —	●底部から外反し先削りになる 口縁 ●内面、外面共に横なで	●底部は丸底で内面はなでつけ 外面は荒れひどく不明	赤褐色 焼 不 良胎土に砂 粒を含む	図版66-6

第16表 土器の観察(その14)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色調 胎土	備考
杯 第69図-2	D 2 (I-Y区)	口径 (1)10.5cm 器高 (2)5.4cm 最大径 (3)9.0cm	● 胴部でくびれて短く外反する 口縁がつく ● 内面は荒れひどく不明 外面は滑なで	● 胴部から一度はりだし、やや 厚い底部につながる ● 胴部内面は指によるおさえ 外面はなでつけ ● 丸底の中央に指でおさえたく ぼみをもつ	灰 色 焼 不 胎土に砂 粒を含む	第132図1-8 の滑石製品と 133図1-4の 玉と共伴 図版67-2
杯 第69図-5	D 2-1砂 (I-Y区)	(1)15.6 (2)8.4 (3) -	● 深い器で直線的に立ち上る口 縁をもつ ● 内面は荒れひどく不明 外面はハケ目のもと滑なで	● やや口縁から厚みをましなが ら底部に移行する ● 胴部内面はなでつけ、外面は 粗いハケ目 ● 丸底	淡 黄 色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	
手づくね土器 第42図-4	D 5-一括	(1)12.5 (2)6.5 (3) -	● 口縁は一段でない ● 内面、外面共に滑なで	● 口縁と胴部との差はなく指あ とを換す ● 胴部内面はなでつけ、外面は 一部にヘラ削り ● 丸底であろう	灰 褐色 焼 不 胎土に径 1-2mm の砂粒を 含む	図版59-5
手づくね土器 第42図-5	D 5-一括	(1)10.4 (2)7.2 (3) -	● 口縁は一段でない ● 内面、外面共に滑なで	● 口縁から厚さをましながら底 部に移行する ● 胴部内面は横方向に滑なで 外面はなでつけ ● 丸底内面にヘラ削りのあと	茶 褐色 焼 不 胎土に径 1-2mm の砂粒を 多く含む	図版59-8
手づくね土器 第58図-3	D11	(1)13.1 (2)7.0 (3)7.4	● ややとがった口縁である ● 内面、外面共に指によるおさ え	● 厚い器内で底部につづく ● 胴部内面は指によるおさえ 外面はなでつけ ● 平 底 厚さ 1.8cm	淡茶褐色 焼 不 胎土に砂 粒を多く 含む	
手づくね土器 第58図-5	D11	(1)8.8 (2)3.5 (3) -	● 細くとがった口縁で比較的整 っている ● 内面は指によるおさえ、なで つけ、外面は指によるおさえ	● 短い胴で厚さをましながら底 部に移行 ● 胴部内面、外面共になでつけ ● 丸底	褐 色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	第58図-6・ 7と同じ位置 より出土
手づくね土器 第58図-6	D11	(1)8.3 (2)4.8 (3)6.2	● 口縁は先削りにつくられやや 内湾する ● 内面、外面共に指によるおさ え	● 口縁部・胴部の差はなく底部 に移行する ● 胴部内面、外面共に指による おさえ ● 平底を周知から指でおさえて 作る	褐 色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	第58図-5・ 7と同じ位置 より出土
手づくね土器 第58図-7	D11	(1)9.6 (2)4.0 (3) -	● 薄手につくられ先削る口縁 ● 内面、外面共に滑なで	● 口縁からすぐに底部に移行す る ● 胴部内面はハケ目仕上げ、外 面はなでつけ ● 丸底	褐 色 焼 良 胎土に砂 粒を含む	第58図-5・ 6と同じ位置 より出土
手づくね土器 第69図-5	D 2-1砂 (I-Y区)	(1)11.6 (2)6.8 (3) -	● 器内が厚く、胴部は指でおさ えて盛り出す ● 内面、外面共になでつけ	● 底部は丸底	淡黄褐色 焼 不 胎土に砂 粒を含む	図版67-4

第17表 土器の観察 (その15)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色調 焼土	備考
手づくし器 第70図-7	D2 (I-Y区)	口径 (1) 10.8cm 器高 (2) 6.8cm 胴径 (3) -	●指のおきで口縁部を整形している ●内面外面共に指のおき	●胴部内面はなでつけ 外面は 焼れひどく不明 ●底部丸底	茶褐色 焼土に径 1~3mm の砂粒多 量	図版67-12

② 須恵器

土師器のように土器群としてまとまりを持つようなものではなく、破片が多くそれぞれの時期も古墳時代、奈良時代、平安時代とある。そこでいくつかの興味を引くものについて記すにとどめたい。

1. Oの刻印のある杯身(「今宿4」図版第14-2)。ここでは杯身としたが蓋である可能性もある。底部をヘラ削りした跡に刻印は打たれているが、同様の刻印のある須恵器については、管見に入っていない。

2. D11新溝出土の須恵器(同、第59-1~5, 7)蓋・高付杯・円面硯などがある。奈良~平安時代初頭のものであろう。なかでも5の円面硯の破片の存在はF1井戸から出土の須恵器蓋の破片を利用した硯とD10溝の皿が硯として使われているものと合せて興味深い。

3. D10溝出土土の裏面は粘土ひもの巻きあげの痕を残し、墨書で「弟公」と書かれている。「弟公」については人名と思われる。

第18表 土器の観察 (その16)

器種	出土地点 遺構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 焼土	備考
高杯 第14図-4	II-H区	口径 (1) - 器高 (2) - 脚径 (3) -	●杯底の一部を残している ●内面はなでつけ ●外面は横なで	●脚底部を欠く 内面、外面共に横なで	暗灰色 焼土に砂 粒を含む	図版48-11

第19表 土器の観察 (その17)

器種	出土地点 遺構	法量	口頭部の特徴	肩胴部の特徴	底部の特徴	色調 焼土	備考
鉢 第16図-2	P11(II-H) M60 No.11	口径 (1) - 器高 (2) - 胴径 (3) 10.8cm	●欠損	●胴部に流状文 胴部に横 目文が施されている 孔は焼成前外面からの穿孔 ●内面はなでつけ ●外面上半なでつけ 下半 ヘラ削り	丸底 ヘラ削り	灰褐色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版48-10

第20表 土器の観察 (その18)

器種	出土地点 遺構	法量	杯部の特徴	脚部の特徴	色調 焼土	備考
高杯 第7004-4	D 2 (I-Y区)	1) 通 (1) 13.8cm 器高 (2) 一 脚底性 (3) 一	●丸い底部からうすくなりながら外反する口縁を作る ●内面は横なで 杯底はなでつけ ●外面には一條の沈線が胴中央に施す	●下半欠損 脚柱の3分割する位置に焼成前に穿れたすかしがある	淡灰色 焼不良 胎土に砂粒を含む	図版67-11
高杯 第7005-9	D 2 (I-Y区)	(1) 一 (2) 一 (3) 一	欠 横	●厚手の脚柱から脚底部がゆるく広い ●内面は横なで ●外面はしぼりのあとを残し横なで仕上げ	灰 色 焼 良 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版67-9

第21表 土器の観察 (その19)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 焼土	備考
杯 第1404-2	II-B区 第2層	1) 脚底性 (1) 一 器高 (2) 一 高台性 (3) 一	欠 横	●胴部内面はなでつけ 外面はへつ削り ●底部丸底	灰 黒 色 焼 良 胎土に砂 粒をほと んど含ま ない	底部に径1.5cmの内形の刻印がある
杯 第7001-1	D 2 (I-Y区)	(1) 一 (2) 一 (3) 一	●短く小さい立ちあがりで受部のつくりも弱い ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●外面横なで ●底部欠損	青灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	
杯 第7001-2	D 2 (I-Y区)	(1) 一 (2) 一 (3) 一	●立ちあがりがやや大きくなるが、受部の作りは退化している ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●外面へつ削り ●底部欠損	青 灰 色 焼成良好 胎土に少 量含む	
杯 第7001-3	D 2 (I-Y区)	(1) 一 (2) 一 (3) 一	●立ちあがりも大きく 蓋の受部もしっかりしている ●内外面共に横なで	●胴部欠損 ●底部丸底	青 灰 色 焼成良好 胎土に砂 粒をわず かに含む	図版67-10
皿 第74回	D10	(1) 19.0 (2) 2.6	●短い口縁が外反する 端部断面は丸味をもつ ●内外面共に横なで	●底部平坦 外面は輪づみのあとを残す 内面は縦として使われたため平滑になっている	暗 灰 色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	「赤公」の高きが底面にある 図版68-1

第22表 土器の観察 (その20)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 焼胎土	備考
甌 第59図-7	D11新	口縁径 (1)17.7cm 器高 (2) 2.7cm 高台径 (3) -	●やや外反して立上る ●狭かい口縁、肩部は丸く外反する ●内外面共に横なで	●底部内面横なで 外面へつ削り	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版63-9
高台付杯 第59図-3	D11新	(1)13.9 (2) 3.8 (3) 7.9	●口縁は外反しながら中位でお れて外反度を増す ●内外面共に横なで	●胴部内面なでつけ ●外面横なで ●底部へつ削り	灰 青 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版63-7
高台付杯 第59図-4	D11新	(1)14.0 (2) 4.5 (3) 9.7	●第59図-3に比してやや広縮 的に立ち上る口縁 ●内外面共に横なで	●胴部内外面なでつけ ●底部 胎付高凸	灰 青 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版63-8
円面碗 第59図-5	D11新	(1)11.7 (2) - (3) -	●破片である、胎と胎との蓋は あまりなく直に近い口縁をも つ ●内面しぼりの痕	●胴部は欠損するが合計8つの 蓋があく ●外面横なで	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	

第23表 土器の観察 (その21)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	天井部の特徴	色調 焼胎土	備考
蓋 第59図-1	D11新	器径 (1)22.7cm 器高 (2) -	●やや小形の蓋で肩部は丸くお れて作り出されている ●内外面共に横なで	●欠 損 ●内面なでつけ ●外面へつ削り	灰 青 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版63-1
蓋 第59図-2	D11新	(1)17.0 (2) -	●かえりの弱い口縁肩部 ●内外面共に横なで	●内面なでつけ ●外面肩部でへつ削り	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版63-6
蓋 第66図-1	D3	(1) - (2) -	●欠 損	●つまみのついた蓋の破片 ●内面なでつけ ●外面へつ削りのあと横なで	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	
蓋 第66図-2	D3	(1) - (2) -	●かえりのついた蓋の破片 ●内外面共に横なで	欠 損	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	

第24表 土器の観察 (その22)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	天井部の特徴	色調 焼土	備考
甕 第70回-5	D2 (I-Y区)	器径 (1)16.2cm 器高 (2) —	●端部は丁寧にひき出され整っている ●内外面共に横なで	●内面なでつけ ●外面へり削り	灰 色 焼成良好 胎土に少 量の砂粒 を含む	図版67-7
甕 第14回-5	II-F区 第2層	(1) — (2) —	●やや外反ぶみの口縁で外面に一段縁をつくって肩部に移行する ●内外面共に横なで	●内面横なで ●外面へり削り	灰 色 焼成良好 胎土に砂 粒を殆ん ど含まな い	
甕 第14回-6	II-D区 3層	(1) — (2) —	●丸く弱い端部がわずかに作り出されている ●内外面共に横なで	●内面なでつけ ●外面へり削り	暗 灰 色 焼成良好 胎土に砂 粒を殆ん ど含まな い	
甕 第14回-7	II-E区 溝直上	(1) — (2) —	●第14回-5よりやや強く作られた口部をもつ ●内外面横なで	●内面なでつけ ●外面へり削り	暗 灰 色 焼成良好 胎土に砂 粒を殆ん ど含まな い	

③ 歴史時代の小形盛器を主とする土師器・黒色土器などについて

この土器群はF1井戸・E7土塚から一括のまとまりで出土しているものの他に溝の直上からの出土例などもある。F1井戸がB6建物を切り、E7土塚がB8建物を切り、A3欄列の柱穴からこの土器が出土しているので溝納遺跡の歴史時代の建物の時期・現在の水田の開田された時期を考えるうえで重要な資料である。まとまって出七した土器の組合せは、F1井戸の土器、皿・高台付皿・高台付椀の3種であり土師器6点に対して黒色土器A類を1点含む。他に須恵器製の破片を利用した硯が出している。

E7土塚、皿・椀・高台付椀・大形の椀・甕などの器種があり黒色土器A類5点・B類1点を含む他に「審固⁴¹」銘の瓦片・緑釉の陶片・白磁片が出土している。

この種の土器については、前川威洋・新原正典両氏による論考⁴²が、また、森田勉氏による瓦器椀について論考がある。さらに横田賢次郎・森田両氏による論考⁴³もある。前川・新原両氏の編年と横田・森田両氏の編年には、微妙な差がある。⁴³

溝納遺跡のE7土塚・F1井戸の土器にはそれほどの差はないようだ。前川・新原両氏の編年に従へばI-2類に最も近い。前川氏は、I-2類はI-1類を含めて現在細分が可能となり、この土器群を10世紀の前半から中途におきたいとの見解を示された。⁴⁴ また、横田・森田両

氏の編年によれば太宰府政庁の最終期の整地層・土壌SK357・土壌SK674の一群の土器に近い。この土器群は政庁最終時の整地層(天慶4年藤原純友の乱)以後と考えられている。現在双方に多少の差はあるが10世紀中頃に湯納遺跡のこの土器群を以てよいものと思われる。

- 註1 黒色土器A類・B類の分類については、田中琢氏「古代・中世に於ける手工業の発達、畿内」日本の考古学IV 歴史時代上 河出書房(1967)に従っておく。
- 註2 前川威洋・新原正典「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告—筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊道跡」第2集(1975)・第3集(1976)福岡県教育委員会
- 註3 森田勉「九州地方の瓦器について」考古学雑誌59-2 (1973)
- 註4 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書」九州歴史資料館研究論集2 (1976)
- 註5 この相違について両者ともに資料の増加から接近しつつあるようだ。前川・新原編年は湯城跡出土の土器がその根拠であり、横田・森田編年は、太宰府の政庁最終整地層が天慶4年(946)の純友の乱後のものとの位置づけが根拠であるようだ。
- 註6 註2に同じ
- 註7 註4に同じ

第25表 土器の観察(その23)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 焼 胎 土	備考
Ⅲ	F1	口縁径 (1)11.0cm 器高 (2)1.8cm 高台径 (3) —	●外反しながら丸い端部となる ●内外面共に横なで	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●底部はへらおこし(右まわり)	淡灰色 焼成良好 胎土精好	図版49-1
Ⅲ	E7	(1) 9.8 (2) 2.1 (3) —	●端部はややとがりざみ ●内外面共に横なで	●胴部内面は指によるなでつけ ●底部はへらおこし(右まわり)	黄灰色 焼成不良	図版50-1
Ⅲ	E7	(1)10.4 (2) 2.4 (3) —	●端部はやや外反しとがる ●内外面共に横なで	●胴部内面は指によるなでつけ ●底部はへらおこし(右まわり)	淡黄灰色 焼成不良 胎上に砂粒を含む	底部にすこの 状の痕跡の痕
Ⅲ	D2 (I-Y区)	(1)14.0 (2) 3.0 (3) —	●底部からひき出され外反ざみの の丸縁りの口縁 ●内外面共に横なで	●胴部欠損 ●底部は糸切りによる平底	灰茶色	
Ⅲ	II-F区 2層	(1)10.0 (2) 2.1 (3) —	●外反しながら丸い端部となる ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●底部はへらおこし(右まわり) で板目を残す	茶褐色 焼成良好 胎上に砂粒を含む ない	

第 26 表 土 器 の 観 察 (その24)

器 種	出土地点 遺 構	法 量	口 縁 の 特 徴	胴 底 部 の 特 徴	色 調 焼 胎 土	備 考
高台付皿 第21図-2	F 1	口縁径 (1) 11.6cm 器高 (2) 2.4cm 高台径 (3) 7.6cm	●口縁部欠損し肉眼的に底部に移る	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●底部はヘラかこし(右まわり) ●高台は貼付け	灰白色 少量の砂 粒を含む 焼成不良	図版49-2
高台付皿 第21図-3	F 1	(1) - (2) - (3) 7.2	●欠 損	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●底部はヘラかこし(右まわり) ●高台は貼付け	淡灰色 焼成良好 粘成され た土	
皿 第29図-3	E 7	(1) 10.8 (2) 3.4 (3) -	●端部は外反し丸みをもつ ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●底部と胴部との間に、後の段 をつくる ●底縁はヘラかこし(右まわり)	淡茶褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	図版50-3
皿 第28図-1	第5 トレンチ 4層	(1) 13.3 (2) 4.0 (3) -	●内湾ぎみに外反する ●内外面共に横なで	●胴部内外面共になでつけ ●底部は平底でヘラかこし	淡褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を少量 含む	
高台付碗 第21図-4	F 1	(1) - (2) - (3) 6.2	●欠 損	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●高台は貼付け ●底部はヘラかこし(右まわり)	淡茶灰色	内面墨汁の痕 あり 図版49-3
高台付碗 第21図-5	F 1	(1) - (2) - (3) 7.3	●欠 損	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●高台は貼付け	明茶灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	図版49-4
高台付碗 第21図-6	F 1	(1) - (2) - (3) 9.6	●欠 損	●胴部から底部にかけて丸みをも つ ●内面は焼成されている ●内面に平面三角形をかたちづ くるヘラ磨りの痕文 ●外面は横なで ●底縁はヘラかこし(右まわり) ●高台は貼付け	灰白色 焼成不良 胎土に砂 粒を含ま ない	黒色土器入層 図版49-5
高台付碗 第21図-7	F 1	(1) - (2) - (3) 10.0	●欠 損	●胴部内面は指によるなでつけ 外面は横なで ●底部はヘラかこし(右まわり) ●高台は貼付け	暗茶灰色 精良な粘 土	外面にスズが 付着 図版49-6
高台付碗 第29図-4	E 7	(1) 12.7 (2) - (3) -	●端部はやや外反し丸みをおび る。 ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●高台は欠損(貼付高台) ●底部はヘラかこし(右まわり)	暗褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	図版50-4

第27表 土器の観察 (その25)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 胎上	備考
高台付鍋 第29図-5	E 7	口縁径 (1) — 器高 (2) — 高台径 (3) 6.7cm	●欠損	●胴部内面はなでつけ ●高台は貼付け	暗灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	
高台付鍋 第29図-6	E 7	(1) — (2) — (3) 7.1	●欠損	●胴部内面は黒色処理、ヘラ磨 きされ光沢がある ●高台は貼付け ●底部は指によるなでつけ	暗灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	黒色土器A類 図版50-5
高台付鍋 第29図-7	E 7	(1) 3.2 (2) 5.4 (3) 7.0	●外反しながら底部は丸くなる ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ ●底部へらおこし	茶褐色 焼成良好 砂粒を含 む	図版50-6
高台付鍋 第29図-8	E 7	(1) — (2) — (3) 8.4	●欠損	●胴部内面黒色処理 ●底部へらおこし	灰白色 焼成不良 砂粒を含 まない	黒色土器A類 図版50-7
高台付鍋 第29図-9	E 7	(1) — (2) — (3) 8.5	●欠損	●胴部内面黒色処理 ●ヘラ磨きの痕わずかに残る ●高台は貼付け	灰白色 焼成不良	黒色土器A類
高台付鍋 第29図-10	E 7	(1) — (2) — (3) 7.7	●欠損	●胴部内面荒れがひどい ●高台は貼付け ●底部底面に飯目	黄褐色 焼成不良 胎土に砂 粒を含む	図版50-9
高台付鍋 第29図-11	E 7	(1) — (2) — (3) 7.5	●欠損	●胴部内面なでつけ ●高台は貼付け		
高台付鍋 第29図-12	E 7	(1) — (2) — (3) 7.2	●口縁は欠損しているが、外反 し丸味をもつと思われる ●内外面共に横なで	●胴部内面指によるなでつけ ●底部へらおこし ●高台は貼付け	灰白色 焼成不良	図版50-11
高台付鍋 第29図-13	E 7	(1) — (2) — (3) —	●欠損	●胴部内面共に黒色処理され てヘラ磨きがされている ●底部は丸味をもち高台の割離 した痕を残す	黒色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	黒色土器B類 図版50-12

第28表 土器の観察 (その26)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 焼胎土	備考
高台付甕 第30図-14	E 7	口縁径 (1) - 器高 (2) - 高台径 (3) 9.5cm	●欠損	●胴部内面近のみ黒色処理 ●底部へラおこし ●高台は貼付	灰白色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	黒色土器A類 図版50-13
高台付甕 第30図-15	E 7	(1) - (2) - (3) 9.3	●欠損	●胴部内面黒色処理され三方向 にへラ磨き ●底部なでつけ ●高台は貼付け	灰白色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	黒色土器A類 図版50-14
高台付甕 第30図-16	E 7	(1) - (2) - (3) 8.2	●欠損	●胴部内面なでつけ ●底部に縦目の痕 ●高台は貼付け	黄灰色 焼成不良 胎土に砂 粒を含ま ない	図版51-1
高台付甕 第30図-17	E 7	(1) 135.4 (2) 6.5 (3) 8.9	●端部は丸味をおびやや外反 ●内外面共に横なで	●胴部内面はなでつけ 外面はへラ削り ●底部に縦目を残す ●高台は貼付け	黄白色 焼成良好 胎土に砂 粒を含む	図版51-5
高台付甕 第30図-18	E 7	(1) - (2) - (3) -	●欠損	●胴部内面はなでつけ ●底部はなでつけ	暗黄灰色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	図版51-3
高台付甕 第30図-19	E 7	(1) - (2) - (3) -	●欠損	●胴部内外面共になでつけ ●底部は欠損	暗褐色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	
高台付甕 第16図-1	A 3柱穴 (E-FB55)	(1) - (2) - (3) 7.2	●欠損	●胴部は底部より外反しながら 口縁につづく ●胴部内面はなでつけ 外面は 横なで ●高台は貼付け	灰白色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	図版48-9
高台付甕 第66図-3	D 2 上面	(1) - (2) - (3) 9.3	●欠損	●胴部大半欠損 ●胴部内外面共になでつけ ●高台は貼付け	茶色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	
高台付甕 第70図-6	D 2 (I-Y区)	(1) - (2) - (3) 9.0	●欠損	●高台は貼付けで内外共になで つけられている	茶色 焼成良好 胎土に砂 粒を含ま ない	内外面共に旋 彩されている 図版67-8

第26表 土器の観察 (その27)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴底部の特徴	色調 焼土	備考
高台付碗 第88図-2	第5 トレンチ 第4層	口縁径 (1) 16.4cm 器高 (2) 5.1cm 高台径 (3) 7.5cm	●黒色処理された土器で丸みをもつ底部から円盤をえがくように口縁をつくる ●内外面共に横なで	●胴部内外面共になでつけ ●九底に彫付高台 ●板目を残す	黒色 焼成良好 胎土に砂粒を含まない	黒色土器B類
壁破片 転用現	F1	5.0×4.0				須恵器壁の内面を現として転用したもの 図版49-7
碗 第306図-20	E7	(1) - (2) - (3) -	●欠損	●胴部は欠損 ●底部は乳孔を阿蘭の花文に切る 内面は黒色処理	暗褐色 焼成良好 胎土に砂粒を含む	図版50-2
緑釉片	E7	1.5×1.5			濃緑色の釉 焼成良好 胎土に砂粒を含まない	(土師質)

(3) 青磁・白磁・陶器類について

青白磁類については、亀井明德氏の表示によるところが多い。

E7出土の白磁片は、少破片で図示し得ていない。第101図の白磁類は亀井氏の分類に従へば1がⅡ-a類に分けられよう。宋代福建省付近の製品であろう。7は、底部や釉の特徴から唐代越州窯のものであり湯納遺跡では3点が出土し図版74-9に示した。9は、手彫状の草花文を円形のなかに配する優美なものであるが、五代越州窯の製品である。10は、いわゆる珠光青磁で、亀井分類青磁B群の皿にあたる。11・12は天目茶碗でいずれも国産品の可能性が高い。13・14は、青磁B群に属し、南宋代竜泉窯系のものである。

註1 この項は、亀井氏の表示と同氏の「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」考古学雑誌8—4 (1972) によっている。

第30表 土器の観察 (その28)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色澤 焼上	備考
白磁碗 第100図-1	I-YD29 D1の土	(1) 口径 16.5cm (2) 器高 — (3) 高台径 —	●口縁部を折り返し、玉縁状につくる ●外面は輪足をすかしてよこなでが見える ●内面は輪足の流れがたまっている	●輪足が外面中途でとどまり生地がみえる ●下半は模なでされている ●底部は欠損	灰白色の輪 生地は灰色 焼良	図版74-1
白磁碗 第100図-2	Ⅱ-A区 1層	(1) — (2) — (3) 7.3	●欠損	●底部に近い部分を数片破片 ●外面は生地のままで、横なで内面は胴部とのつけねに一条の溝があり横のたまりがある ●底面の削り出しが浅く台付から2cmほど	灰白色の輪 生地は灰色 焼良	図版74-4
白磁碗 第100図-3	不明	(1) — (2) — (3) 3.6	●欠損	●底部に近い破片で外面は生地のまま横なで内面は胴部との間に一条の溝 ●底部は第100図-2に近く、底面の削り出しは浅い	灰白色でやや にごりがある 輪 生地は白色に 近い 焼良	図版74-5
白磁碗 第100図-4	Ⅱ-B区 2層	(1) 16.0 (2) — (3) —	●やや内湾さみの胴部から口縁へひきあげて外反させている	●外面に縦線を回転させながら削り出したときよわい輪がつく ●底部は欠損	乳白色の輪で 生地も白い 焼良	図版74-2
白磁碗 第100図-5	井原 西トレンチ 2層	(1) 15.4 (2) — (3) —	●第100図-4と同様のもので内湾さみの胴部から外反する口縁でやや外反度がつよい	●外面によわい縦線が平行につく ●底部は欠損	乳白色の輪 生地も白色 焼良	図版74-3
白磁碗 第100図-6	不明	(1) 9.2 (2) 2.3 (3) 4.7	●底部から直線的にのびて口縁で外反度がつよくなる 内面は重ね焼きのためか輪は底部中央と底部のつけねとにかけであり、その間は生地のままである	●外面底部直上は生地のまま ●底部の中央を高く削り出し高台も逆凸形の断面をもつ	灰白色の輪で 生地は灰白色 焼良	
青磁碗 第100図-7	Ⅱ-B区 2層	(1) — (2) — (3) 5.2	●欠損	●あめ色の輪足 内外面ともに均一にかかっている ●底部はいわゆる蛇目高台で高台底の5ヶ所が重ね焼で変色している	あめ色の輪 生地は灰色 焼良	図版74-9
白磁碗 第100図-8	Ⅲ-C区 新穴3	(1) — (2) — (3) 6.2	●欠損	●濁った灰白色の輪がかり内面底部よりやや上に一条の沈線があるが輪でうまっている ●底部は削りとのり深い高凸	灰白色の輪 生地は灰白 焼良	図版74-10
青磁碗 第100図-9	I-Y区 畦畔2層	(1) — (2) — (3) —	●欠損	●底部内面に毛彫の草花文が施され、これを沈線で囲んでいる	内面、外面 底部うらまでも 輪がかかっ ていて内面は ややくすんだ 緑灰白 外面ではつや のある緑灰色 生地は灰色	図版74-7・8

第31表 土器の観察 (その29)

器種	出土地点 遺構	法量	口縁の特徴	胴・底部の特徴	色調 焼胎土	備考
青磁皿 第101図-10	D11-2層	口径 (1) 130.2cm 器高 (2) 2.1cm 高台径 (3) —	●ヘラ削りされた底部から胴で一度焼をつくり、その後外反する短い口縁となる	●文様はヘラ掻きで底面を内側でかこまれた内側に草花状文と思われるものがある ●底部はあげ底状を呈している	青緑灰色の釉 生地は灰色 焼良	青磁目録 図版74-12
天目茶碗 第101図-11	II-A区 2層	(1) — (2) — (3) 3.6	●欠損	●器内の深い器で黒茶色の釉が内側全体、外面上半部にかかる ●底部は浅く中央部が削りとられている	釉薬は黒茶色 外面のうすいところでこげ茶色の釉 生地はやや硬い質で灰色	図版74-15
天目茶碗 第101図-12	II-F区 1層	(1) — (2) — (3) 4.8	●欠損	●最付の部分以外全体に釉薬がかかる ●第101図-11と比較してやや丸丸である ●底部はやや丸味をもってつくられている	深部の釉 生地は灰白色 焼良	図版74-13
青白磁青芦 第101図-13	D11-1層	(1) 14.1 (2) — (3) —	●口縁だけの破片で胴部で内側に折れ込み、直線的に立ち上って引き出されて口縁は水平におさまられて外反している ●釉は内側は口縁のみ	●欠損	灰白色の釉 生地は白 焼良	図版74-10
青磁碗 第101図-14	不明	(1) — (2) — (3) 5.1	●欠損	●底部のみの破片 淡青緑色の釉薬が内面および外面上半部にかかる ●釉は生地のまま ●底部は中央をやや高く削り残す	淡青緑色の 生地は灰白色 焼良	
灯明皿 第101図-15	不明	(1) — (2) — (3) —	●中央に油だまりをもつ灯明蓋で油だまりの口縁は欠損 ●蓋部の口縁は口ハゲのまま ●釉は内面のみに残されている ●外面は生地のまま	●底部はあげ底	黄灰色の釉 生地は灰色 焼良	図版74-11
青磁碗 第101図-16	I-S区 2層	(1) — (2) — (3) —	●欠損	●内面内側の内に花卉文を配し周囲に草文をヘラ掻きしている。釉は内外面とも味緑青灰色で外面は曇り上まで施釉している	暗青緑色 生地は暗灰色 焼良	青磁C群 図版74-16
青磁碗 第101図-17	II-1区 1層	(1) — (2) — (3) 6.6	●欠損	●内面内側のうらにヘラ掻き ●花卉文を配している。外面の釉のかがりぐわいは曇りまで ●底部はあらひへら削り	青緑色 生地は灰色 焼良	青磁C群 図版74-18
青磁碗 第101図-18	II-H区 第2層	(1) — (2) — (3) 4.8	●欠損	●底部のみの破片で青緑色の釉薬のかがりが厚い 釉は曇りの面までかけられているが、底部表面は生地のまま	暗青緑色 生地は灰色 焼良	

(4) 古瓦片について

湯納遺跡出土の古瓦片について概略を記したが、その大半が福岡市西区大字上山門所在斜ヶ浦窯の供給によるものであることが高野孤鹿氏資料との照合によって判明している。斜ヶ浦窯跡は、故高野氏により3基の窯が判明しており、福岡市教育委員会の手でそのうちの第2号窯が発掘調査されている。保存の状態は悪くわずかに焼成室の一部を知り得たにとどまっている。出土瓦は、軒平1点・平瓦・丸瓦であり、平瓦はいずれも粘土板幅巻4枚作りの痕跡を残すもので、叩打文は、斜格子文を基調としたもので、平安時代として孝えてよいものであった。

瓦窯からの収集品には「警固」「警」の逆字、「伊貴作瓦」などが同前資料より知られている。



第2図 斜ヶ浦瓦窯跡付近
採集瓦のスケッチ
(故高野孤鹿氏提供)

「警固」銘の瓦については、中山平次郎氏が1915年に早良郡老岐村大字拾六町與納の里道で発見したことを、考古学雑誌に記されている。

與納なる字名は、現在の湯納付近と言われ、この瓦を使用した建物は、城ノ原庵寺または、湯納遺跡の掘立柱の建物のいずれかに考えてよさそうである。

また、今だに城ノ原庵寺の丸瓦・平瓦を窺見する機会にめぐまれていないが、福岡県史跡名勝天然記念物第六輯の写真を見るかぎり、斜ヶ浦窯跡から供給されたと思われるものがある。湯納遺跡の掘立柱建物と城ノ原庵寺との関係は、単に同一瓦窯から瓦が供給されたものとも言えようが、それ以上のなにかの関係が平安時代のこの時期にあったのではなであらうか。

註1 高野孤鹿先生の資料を福岡市立歴史資料館長三島格先生の好意により写本したものである。

註2 村岡和夫・松村運博編「草場古墳群・斜ヶ浦窯跡」早良館業株式会社 (1974)

註3 中山平次郎「警の一字を有する古瓦片」考古学雑誌 (1915)

註4 磯山猛「福岡県史跡名勝天然記念物調査報告」第六輯

3. 木製品について

(1) 木製農具

鋤（「今宿4」第104図7、第107図）鋤は鋤身と柄がそろったのが3点、鋤身のみが1点、柄のみが1点、握り部が3点の計8点出土している。

第107図1～3は鋤身と柄がそろった鋤である。1は全長86.4cm、刃長6.9cm、柄の径は2.9cmで、刃部は中央が1.9cmですべて1木作りである。柄は断面ほぼ円形になり、柄から身にかけてゆるやかなカーブをつけ、身は端部が尖っている。2は柄が1部欠けている。現長70.4cm、鋤身長22.6cmで、身の肩の部分は一方の中が少し狭くなっている。身の先端は少しカーブをつけ丸く仕上げているが、端部に金属製の刃は装着しないで使用したものとおもわれる。3も柄の1部を欠いている。全長75.2cm、柄長49.6cm、鋤身長25.6cm。4は鋤の柄のみが残ったものと考えられる。5～7は鋤の先端につく握り部である。5は長さ20.0cmあり中央を山形にして2cm角の方形の孔をあけている。柄の先端を細くして挿入されると考えられる。6～7は逆半円形の握り部で6は長さ10.8cm、径2.8cmで、丁寧に面取りがなされている。装着の方法は挿入式である。第104図7は鋤身のみである。長方形をしており1部欠損しているが巾14.1cm、長さ23.8cmをはかる。

鍬（同第104図1～6、第105図、第106図）

湯納遺跡の木製農具の中で圧倒的に多いのが鍬である。すべて鍬身のみで、17点以上あり、種類も①平鍬、②又鍬、③三本鍬、④合わせ鍬と多彩である。

① 平鍬（同第104図1～4・6、第105図1～5）

平鍬はふつう長方形の板の一端をうすくして刃部とし柄をつけるため他の端によせて船形隆起部（湯納ではこの隆起部はみられない）をつくりだし、これに丸角の斜孔をうがったものをさすが、湯納例もほぼこれにあてはまる。第104図6はほぼ完全に残っている例である。長さ30.2cm、中央部巾16.2cm、刃部巾12.4cmで中央やや下部を巾広にして、刃部をほぼ平らにしている。頂部はやや厚くし、2×3cmの方孔をあけ、柄をつけるための孔としている。刃部は薄くなっている。材質はカシで、E9土壌より出土し、弥生後期と考えられる。第104図1はやや細ながい平鍬である。半分ほど欠いているが全体を推定できる。長さ33.2cmで、巾は推定14cmある。頂部近くを厚くし、斜方向の方孔をうがち柄をとりつけるようにしている。材質はイチイガシで、D1溝より出土し、弥生後期と考えられる。第104図2はさらに長く37.9cmをはかる。中央があまり巾広くなく、刃部はまるくなくなり、深耕用に使われたと考えられる。材質はイチイガシで東トレンチより出土し、平安時代と考えられる。第104図4、5は柄をとりつける孔がほぼ中央に穿たれている。5は全長35.1cm、中央部巾11.3cmで、両側がすぼみ、楕円形を呈す両手鍬の形態である。中央に2.6×3.0cmの孔を斜方向にあげ、柄孔として

いる。まわりを薄くしている。両手鍬は奈良泉唐古遺跡から2例出土しているが、側面が弓なりになっており、湯納とは少し違っている。4は全長31.4cm、巾12.8cmで、中央を厚くし、径3.6cmの円孔を穿ち、柄孔としている。ただ1方を平らにし、1方をU字形にしているのは未成品か？4・5とも材質はカシで、D1溝より出土し、弥生時代後期。

③ 馬鍬（同第105図6～10）

3点出土している。又鍬は「熊手」の類であり、身の下部に数本の棒状の前がつくりだされたのをさし、やわらかい土を掘りおこすために用いられる。第105図6～8は又鍬、ないしは2本鍬である。6は半分ほど欠いているが中央から下半分に2本の歯がとりつけられ、頂部に方形の孔が穿たれている。長さ30.0cm。7は刃が2本とも残っている。中央を逆U字形に穿ち、1本の刃は巾5.8cmで、全体の巾は16.0cmある。8も半分ほど欠いているが全体をうかがうことは可能である。全長39.2cmで頂部に長さ3cmの孔を斜方向に穿ち柄孔としている。中央下半部より2本の弧状の刃をつくりだし、先端は尖っている。刃は全体のちょうど半分約20cmであり、深耕には適さないであろう。すべて材質はカシで、6～7は第7次のトレンチより、8は8次のトレンチより出土し、古墳時代後期である。9・10は3本鍬である。9は全長31.8cmで頂部に長さ5.0cmの方孔を穿ち、下端部に長さ約10cmの歯を3本つくりだしている。歯は断面方形を呈する。10は全長28.0cm。9・10とも材質はカシでD1溝より出土し、弥生時代後期である。第105図4は柄を別にとりつける馬鍬であろう。頂部を面どりし、山形の突起をつくりだし、柄との結びをつけている。頂部から12cm下のところにえぐりを入れ、刃部になる。現長17.5cmで推定全長30cm前後と考えられる。材はカシでD1溝より出土し、弥生時代後期。

④ 合わせ鍬（同第106図）

同じ枝ぶりの木2本を利用して、枝を柄にし、幹を鍬身とした合わせ鍬である。幹と枝は65°の角度をもっている。柄はまわりをととのえた程度で、断面円形を呈し、鍬身は断面が舟形を呈しており、頂部をほぼ平らになるように丁寧に削り、側面は2本の鍬身が合うようにととのえ、先端は尖らせている。2本の鍬は柄と鍬身の接点の部分と刃部と反対の端部を藤篋で巻かれ（同図版13下）、上からみれば2本鍬のような形をしている。全長60.4cm、柄は長さ51.0cm、径2.6cm、鍬身は長さ24.4cm、巾2.6cm、材質はユズリハでD2溝より出土し、弥生時代後期。

④ その他の農耕具（同第109図）

湯納遺跡から出土した木製農耕具は鍬、鋤が大半であるが、他に掘り棒、串、へら状のものもいくつかある。第109図1は六角形の棒で全長75.4cmあり、一端を削り込んで尖らせており、種まきの際の掘り棒かと考えられる。2は全長56.2cmで、両端が尖っており、全体に丁寧に加工がほどこされている。3は全長24.2cmで、下端部8cmほど削り込んで刃をつくりだ

し、ヘラ状を呈す。4も両端が削り込まれ、尖っており、掘り棒かと考えられる。全長31.0cm。いずれも硬質の材を用いており、イスノキかカシとおもわれる。

(3) 木製日常用具

① 竪杵（同第110図1～3）

竪杵は3点出土しているが、すべて半分ほど欠けている。1は現長62.0cmで、もとは130cm前後の長さと考えられる。突部は断面円形をしており、径7.6cmを測る。掘り部は径3cmである。掘り部の中央に算盤状の突起があったかどうかは明らかではない。竪杵は長崎県里田原遺跡からも出土している。里田原の竪杵は全長125cmで、掘り部中央に算盤状の突起をつくり出している。1の竪杵は掘り部の折れた部分に削り痕があり、枯に転用されて再使用されたとも考えられる。材質はマツと思われ、第8次調査区より出土し、古墳時代。2・3もほぼ同形、同大。容器（同第110図7、第111・112・113図）類について多いのは各種容器類である。皿、槽、籠、盤と容器に伴う杓子である。椀や曲物、高杯等は出土していない。

② 槽、盤（同第111・112図）

槽とは鉢の一種で、舟形をしており飲食物を盛る器をさす。第112図1は槽の代表的な形をしている。全長18.8cm、高さ3.7cmで $\frac{1}{2}$ ほど欠いている。側面は弧状で、端部は主軸と直交に切り落としている。両端部は4cmほど平らになり、内のは12.4×9cmで深さは2cm弱である。軟質の材（スギかヒノキ?）を使用し、D1溝東岸で出土。2は端部のみ残っている。全長は明らかではないが30cm前後と考えられる。深さは5.4cm。端部に径1cmの孔があり、ひもを通し持ち運び用としたか。材はクリで、D1溝より出土し、弥生時代後期。3は浅い皿のようなもの。長さ24.7cmでD5溝より出土。4は端部を欠いているが、もっともよく整った槽である。長方形の身（23×12cm、深さ3.3cm）の両端に弧状の把手をつくりつけている。各面ていねいに削り整えられ、器の内底は平らに仕上げられている。軟質のスギのような材が用いられ、D2溝より出土し古墳時代。5は槽の中では大きい部類に入る。これも半分ほど欠いているが、全長40.0cm、巾は20cm以上あり、深さは5.0cmで食物を盛るための器と考えられる。端部は巾3cmほど平らにし、把手としている。各面ていねいに加工がなされ、側面には2～3cmのノミ痕が見える。D1溝より出土し、弥生時代後期。第111図の槽は今回出土した容器では最大である。全長64.0cm、幅は一端を欠くが30cm以上はあり、高さは8.2cmで身の深さは5cmである。器の厚みは2～4cmあり1木から造り出している。縦長の長方形の盤で、縁は外にひろがっており、1人用というより、盛り皿として用いられたのであろう。器底には四隅に短かい脚がつくりだされている。脚は主軸と平行に少し山形にとり、高さは2cm、長さ15.0cm、巾4.4cm。材は硬質のカシ材であろうか。第8次調査区で大量の建築部材とともに出土し、古墳時代と考えられる。

第110図7は縁を少し高くした円形の器で、皿かと考えられる。半分ほど欠けているが、径は12.0~13.0cm。材はスギ。

③ 籠 (第113図)

腐蝕がはげしいが1個体分出土している。第113図の上は側面、下は底面である。底は巾5mmのわり竹を用い網代編みをなし、径は3.5cm四方である。胴部の縦糸は巾5mm、緯糸は巾1mmのわり竹を用い、網代編みをなし、口縁は巻き編みとしている。高さは5cm前後である。推定復原すれば、底径3.5cm、高さ5cmの竹籠と考えられる。類品は長崎県里田原遺跡より出土している。

④ 杓子

2点(同第110図5・6)出土している。5は柄を欠くが、表面にベンガラを塗布した、ていねいな作りの杓子である。6も表面にベンガラを塗布している。長さ15cm、巾は推定9cm、厚みは約1cmで身はほぼ平らになっている。弥生時代後期。

(3) その他の日常用具

槽や釜などの他に湯船遺跡から種々の日常用具が出土している。第110図8は案と考えられる。両端を少し狭くした平らな板の端部中央に3.5×1.3cmの方形のほぞ穴を穿ち、脚をとりつけているが、脚はない。D2溝より出土し、古墳時代。4は浮木。長さ15.4cm、径5.0cmで、断面円形を呈し、頂部に孔をあけている。農、漁業共存を示す事例として興味深い。古墳時代。

第114図1は横櫛。半分ほど欠いているが、生活遺跡からの出土例として興味深い。巾4.3cm、高さ3.1cm、厚さ1cmで、齒の長さは1.5cmで1cmあたりの歯数は8本である。平安時代。2は紡錘車。中心に木芯がつまっております、明らかに使用されていたことを示す。径5.1cm、厚みは中央で1.2cm。D5溝から出土し、弥生時代後期。3は木製鎌である。鎌は径1.6cmで、きれいに面どりがなされている。鎌と矢柄は榎のカワで巻きつけられている。鎌は長さ9.1cm。4は断面方形で、両端が狭くなっている。松のようなものか。長さ15.7cm。5は先端部に切り込みを入れ、紐通しの孔があり、形は木簡状である。

第115図は長方形の厚板状で一端に短い把手をつくりだしている。厚板の方は長さ38.0cm、巾23.2cmで、長方形を呈し、各面はていねいに調整が施されている。表側はほぼ平らで底は丸くなっているが安定はよい。表側の中央部が少しくぼんでいる。把手は片側中央にあり、長さ16.0cm、厚さ4.6cmで断面は円形。材はイスノキを用い、弥生時代後期の作。

(4) 木製品の材質の分析について

「今宿4」に「加工木材について」の一文を九州大学農学部松木島・林弘也両先生から頂いた。その後分析して頂いた資料の一覧を掲載すべきであったが編集者の身勝手な一存により割愛させていただいた。両先生おわびするとともに、改めてここに掲載させて頂く。

第32表 材質の分析 (その1)

資料番号	遺構名	地区別	資料	樹種同定	備考
001	D2-3層	I-X	自然木	カナメモチ <i>Phytoloba glabra</i>	弥生時代後期末
002	D2-3層	I-X	*	ツブラゾイ <i>Castanopsis cuspidata</i>	*
003	D1-1層	I-Y北	*	シナノガキ <i>Diospyros lotus var. glabra</i>	古墳時代
004	D1-1層	I-Y北	*	アワブキ <i>Meliosma myriantha</i>	*
005	D1-1層	I-Y北	削り板石	クリ <i>Castanea crenata</i>	*
006	D1-1層	I-Y北	先端切	アラカシ <i>Cyclobalanopsis glauca</i>	*
007	D1-1層	I-Y北	自然木	ヤマゴウ <i>Morus bombycis</i>	*
008	D1-1層	I-Y北	*	不明 (広葉樹材)	*
009	D1-1層	I-Y北	*	チシャノキ <i>Ehretia ovalifolia</i>	*
010	D1-1層	I-Y北	*	不明 (広葉樹材)	*
011	D1-1層	I-Y北	*	不明 (広葉樹材)	*
012	D2	I-Y北	*	クヌギ <i>Quercus acutissima</i>	*
013	D2	I-Y北	板	サンゴジュ? (広葉樹 散孔材)	*
014	D1-1層	I-X東	自然木	ヒメズリハ又はズリハ <i>Daphniphyllum Teijsmannii</i> 又は <i>D. macropodium</i>	*
015	D1-1層	I-Y北	*	アラカシ <i>Cyclobalanopsis glauca</i>	*
016	D1-1層	I-Y北	*	ヒメコマツ <i>Pinus pentaphylla</i>	*
017	D1-1層	I-Y北	*	アラカシ <i>Cyclobalanopsis glauca</i>	*
018	D1-1層	I-Y北	*	ウバメガシ <i>Quercus phyllitracoides</i>	*
019	D2-底	I-Y S31	*	マンキク <i>Hamamelis japonica</i>	弥生時代後期
020	D2-底	I-Y S31	*	カジノキ <i>Broussonetia papyrifera</i>	*
021	D12	I-X F37 t	*	アカメガシワ <i>Mallotus japonicus</i>	*
022	D12	I-X F37 t	*	アカメガシワ <i>Mallotus japonicus</i>	*

第33表 材質の分析 (その2)

資料番号	遺構名	地区割	資料	樹種同定	備考
023	D12	I-XF37	自然木	マンサク <i>Hamamelis japonica</i>	弥生時代後期
024	D12	I-XF37	*	ウリハダカエデ <i>Acer rufrinerve</i>	*
025	D12	I-XF37	刃痕あり	タイミンタチバナ <i>Myrsine Seguinii</i>	*
026	D1-2層	I-Y北	自然木	不明 (広葉樹 樹乳材)	*
027	D1-2層	I-Y北	*	シナノガキ <i>Diospyros lotus var. glabra</i>	*
028	D2-1層	I-X西	*	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus spp.</i>	古墳時代
029	D2-1層	I-X西	*	ヒサガキ <i>Eurya japonica</i>	*
030	B1	I-BD44	柱根	チシャノキ <i>Ehretia ovalifolia</i>	弥生時代後期
031		I-ZO35	*	不明 (広葉樹材)	
032	pit	II-BE48	壁板	不明 (広葉樹材)	弥生時代後期
033		I-XF37	立木の根	アカガシ属 <i>Cyclobalanopsis spp.</i>	
034		I-XF37	*	不明 (広葉樹材)	
035	D2-1層	I-X西	杭	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus spp.</i>	弥生時代後-古墳時代
036	D2-1層	I-X西	*	シキミ <i>Illicium religiosum</i>	*
037	D1-1層	I-Y	*	イイギリ <i>Idesia polycarpa</i>	*
038	D2	I-X西	*	イスエンジコ <i>Maackia amurensis var. Ruergeri</i>	
039	D1	I-Y	自然木	マルバアオダモ <i>Fraxinus Sieboldiana</i>	
040	水田面	I-P	腐	アカガシ <i>Cyclobalanopsis glauca</i>	「今宿4」第107図-3 弥生時代後期
041	D1-1層	I-YE29	*	アカガシ <i>Cyclobalanopsis acuta</i>	「今宿4」第107図-1 古墳時代
042	D2-1層	I-XG33	平版	マルバアオダモ <i>Fraxinus Sieboldiana</i>	「今宿4」第104図-4 弥生時代後期
043	D1-1層	I-Y北	杭	シナノガキ <i>Diospyros lotus var. glabra</i>	
044	D1-1層	I-VP27	柱	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus spp.</i>	「今宿4」第110図-2 弥生時代後期
045		I-2	平版	イチイガシ <i>Cyclobalanopsis gilva</i>	「今宿4」第104図-2 平安時代
046	D2-3層	I-XF34	建築部材	ミツバツバジ <i>Rhododendron dilatatum</i>	「今宿4」付図第7図-300 弥生時代後期-古墳時代
047	D2-1層	I-YQ33	板材	スギ <i>Cryptomeria japonica</i>	弥生時代後期
048	XYトレンチ ビート層下	I-YE30	自然木	試料採取不能	縄文時代何高と縄文時代の間
049	XYトレンチ ビート層下	I-YE30	*	クスノキ <i>Cinnamomum Camphora</i>	*

第34表 材質の分析 (その3)

資料番号	遺構名	地区別	資料	樹種同定	備考
050	D 5-底	II-AD41	槽	試料採取不能	「今宿4」第112図-3 弥生時代後期
051	D 1	I-Y	木製品	クスノキ <i>Cinnamomum Camphora</i>	
052	D 1	I-YE29	*	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i>	「今宿4」第116図-5 弥生時代末
053	D 1	I-YE29	櫛	イチイガシ <i>Cyclobalanopsis gilva</i>	「今宿4」第105図-4 弥生時代末
054	D 1	I-YC29	又 櫛	イチイガシ <i>Cyclobalanopsis gilva</i>	弥生時代後期
055	D 1	I-YC29	小板材	カシワ <i>Quercus dentata</i>	*
056	XYトレンテ 最下層	I-YF30	自然木	ヒメズリハ又はスズリハ <i>Daphniphyllum Teijsmanni</i> 又は <i>D. macropodum</i>	縄文時代終式
057	XYトレンテ 最下層	I-YF30	*	スダジイ <i>Castanopsis cuspidata var. Sieboldii</i>	*
058	XYトレンテ 以下層	I-YF30	*	スダジイ <i>Castanopsis cuspidata var. Sieboldii</i>	*
059	XYトレンテ 最下層	I-YF30	*	ヤマモモ <i>Myrica rubra</i>	*
060	D 2-上層	I-ZC33	槽	クリ <i>Castanea crenata</i>	「今宿4」第112図-4 古墳時代
061	D 5-最下層	II-AD41	内穴きの ある木	ウバメガシ <i>Quercus phylliraoides</i>	「今宿4」図版10-1 弥生時代後期
062	D 5-最下層	II-A143	木製品	イスノキ <i>Distylium racemosum</i>	「今宿4」第115図 弥生時代後期
063	D 2-最下層	I-ZE34	槽	スギ <i>Cryptomeria japonica</i>	*
064	D 5-下層	II-AD41	小板材	クリ <i>Castanea crenata</i>	「今宿4」図版9-2右 弥生時代後期
065	D 2-下層	I-ZF34	櫛?	スギ <i>Cryptomeria japonica</i>	*
066	D 5	II-AD41	木製品	クスノキ <i>Cinnamomum Camphora</i>	*
067	D 5	II-AC41	櫛	クスノキ <i>Cinnamomum Camphora</i>	*
068	D 5-下層	II-AC41	櫛の柄	アラカシ <i>Cyclobalanopsis glauca</i>	「今宿4」第107図-6 弥生時代後期
069	D 2-下層	II-AC41	合わせぐわ	ヒメズリハ又はスズリハ <i>Daphniphyllum Teijsmanni</i> 又は <i>D. macropodum</i>	「今宿4」第108図 弥生時代後期
070		第8次	E1 220	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus</i> spp.	「今宿4」第118図 古墳時代
071		第8次	E1 252	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus</i> spp.	

4. 建築部材について

(1) 出土材による建物復原

弥生時代後期から古墳時代初めにかけての建築は全く地上に残っていない。歴史的にも重要なこの時期に、どのような様式の建築が、どのような技術で建立されていたか、というのはきわめて興味のある問題である。

従来、登呂・山木・菅生・古照その他の遺跡から建築物の材料が出土し、これらはどのような建物を構成していたか、復原案が公表されたものも多い。しかし、いずれも床・壁まわりの軸部の部材が主で出土部材の個体数も少なく、特に屋根を構成する小屋組部材の出土例が稀なのが復原の一つの弊点となっていた。

この度の器納遺跡出土材は、その点で全出土材の点数も多く、梁・桁・棟木・垂木などと推定できる小屋組材もふくまれる点で例をみなかったものである。

しかしながら実際に出土した建築材による建築の復原を考えるにはいくつかの困難な点がある。その一は出土状況からみて、これらの材が建てられたままで埋没したのではなく、一旦、他の用途に転用され、さらにそれが崩壊した様子で発見されたこと。その二は、そのため本来の材の組合せ・対応関係が失われていること。その三は転用・崩壊の過程で数棟分の材が混じり、また、かなりの部分が失われたとみられること。その四は土中の腐蝕等で材の表面が荒れ、一般の建築部材にみられるような仕口の当り痕・緊締痕・風蝕差などがわからなくなっていること、など、いずれも確定的な復原には不利な条件である。

以上のような混乱があるにしても、ごく近接した個所に転用や集積された部材は同一建物に属した可能性も高いと考えられるし、材の仕上・規模などで著しく性格の異なるものは入っていないと認められる。

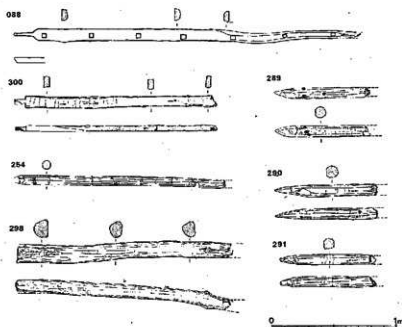
そこで、出土材によるどのような構造が考えられ、それが実際に可能か、同一または類似の事例があるか、吟味する必要がある。實際上可能かどうか、は出土材自体のPEG処理と復原修理終了後、実物を組合わせてみなければならぬが、これは処理が終るまで不可能である。一応、材自体と参考諸例から復原案を検討してみることにする。

出土材の原用途と柱材・梁材

出土材を長さ・断面・形状・仕口などで推定分類すると、桁・棟木・合輪・根太押え・破風・開口部まわり・垂木・木舞などに考えられる。〔今宿4〕、第3-3)

これには主部材として欠かせない主柱・梁等の大材が充分ふくまれていない。これらにあてて構造を推定できる部材はどれだろうか。

各出土材単体を報告した中で、柱の可能性をあげたのは088・300・254などの他に杭に転用



第3図 建築部材 その1 (縮尺1/30)

してあったもので、いずれも断面が細く主柱にはなりにくい。むしろ一端を加工した太い丸太の298などの方が十分な太さをもっている。これらの柱の用い方には二通りの可能性がある。一つは床下は298のような太いままで使い、床の台輪板を突抜けて上に出る分は細く整形してあったとみるもので、他の一つは太い柱は床まで止まり、床上は下と連続しない別の材による構造を考えるものである。

前者の構造は登呂・山木・古照等の出土材から推定され、柱の断面を次第に細くつくりながら横架材の大引・指鴨居・梁・桁などを差し込む構造は南西路島から高知県にかけて伝統的民家に用いられている。後者の構造は現存している古代・中世の校倉・板倉のすべてが、床下は太い束柱があり、床より上は別構造の壁体を組んでいるし、沖繩・奄美の高床の倉も同様である。また、アイヌの伝統的な倉である「プ」、特に大型の「オツマムンブ」も一旦床まで組み、上に木体をのせる構造といわれる。

以上のように二通りはあるが、出土材そのもので太い柱の中段以上を細めて床上柱を造りだした形跡のあるものがないのは前者を考えるには都合が悪い。

古い柱とみられる299・298などの径は14cm前後で古照遺跡出土の高床建物柱径とはほぼひとしく、湯納遺跡丘陵上のB1建物柱根も径20cm以下でこれに近い。いずれも底部が残るのみで上端の形状・構造出しなどはわからない。これからは柱上半を細めて床上柱としたかどうかが明

らかにできないが、細い目の柱とみられる形の材は、いずれも合輪とみられる058・003・089・256等の仕口穴より太すぎて貫通させることができない。したがって登呂・山木型・又は古照型の土台を貫通する柱は出土材には含まれていないと考えざるを得ない。058の両端のような凹字形仕口に喩ませた度もみられない。すなわち、出土材の範囲内では、太い床束と、別途の床上構造を持つ南西諸島又はアイヌ高倉と同様な建て方を推定できるようである。

次に、細いものにも太い丸太にも柱とみられる材に壁小舞穴のあるものがない。棟束が間仕切柱とみられる部材088には小舞穴があるので仕事にちがいがあることになる。現存例では高知県竹内家住宅(重文)のように水平の小舞を柱外面に縛りつける実例もあり、むしろ08の方が雑作材として特殊な納まりをもつとみるべきなのであろう。

床高は全長のわかる梯子から150cm前後と考えられよう。

床または小屋梁とみられる材は太めの丸太を簡単に整形し、一面のみを平坦にちかく仕上げ、両端よりに枅穴を貫通させたものである。出土時に完形またはそれに近かったのは257・070など報告に第3類とされている。この二材以外は枅穴部その他で折損し全形のわかるものはないが、類似のもの4点(226・148・270・012)が知られている。

これらの枅穴間距離は出土材自体からはわからないが遺跡の出土状況から推定できる。この枅穴を利用して細杭で地面に打ちつけてあったので、その杭の中心距離を測ると、南東から次のようになる。

杭番号	横材番号	杭中心略測距離	杭番号	横材番号	杭中心略測距離
①275~276		1.04 (m)	②276~277	012	2.74 (m)
③277~278		1.10	④278~279		2.75
⑤279~280		1.00	⑥280~282	070	3.10
⑦282~283		1.18	⑧283~284	148・270	2.04
⑨284~285		1.08	⑩285~286		3.12
⑪286~287		0.18	⑬287~288		3.16
⑭288~289		1.24	⑮289~290		2.30
⑯290~291		1.24	⑰291~292		2.32
⑱292~293		1.02	⑲293~294	257	2.56

以上のように、おおそ一つおきに長短があり、長いところに257が残るいは近くから070が出土している。すなわち、長い方の杭間隔は転用横木の枅穴距離に一致し、短いところは横木先端同士のつきつけ箇所にあたと推定できる。

前表を注意すると、近似した寸法が二~三箇所ずつ隣接している。③④、2.75m、⑥⑩⑬3.12、3.10、3.15m、⑮⑰⑱2.30mとなっていることに注意をひく。このことは類似した有効長の梁材

が2〜3丁ずつあったことをしめす。また、257の梁間2.56mは丘上第Ⅱ-C地区のB1・B2の梁間2.6mと近似するし、㊸㊹の2.30mはB3・B4・B5建物の2.2〜2.3mとほぼ一致する。丘陵上の建物の柱跡は痕跡にやや不明瞭なところがあり柱間寸法に数cmの移動もありうる。出土材の原建物と遺跡とはあるいは柱間が同一だった可能性が高い。

床梁・小屋梁とも、B1〜B3のような桁行2間の建物では3本づつ必要である。遺跡からみてこのような材は9本以上あった筈で、建物2棟分またはそれ以上の材が混入していることがわかる。

合輪と床

a (058・003)、b (089・256) は形からみて床を支える合輪のごとき材であろう。いずれも一方の面に小舞穴が一列あり、壁がとりついたとみられる。面戸型の造り出しのあるaと平板状のbとくらべると、造り出しのないbの方が厚さ3.5〜3.8cmあり、aより1cmほど厚い。またbには貫通する大きい枘穴は中央にしかなく、aの058は中央と両端に仕口がある。すると床上の柱を受けるのはbではなく058としなければならない。床梁に固定するには罫りつければよいのでどちらの材でもよいが、大引を乗せて荷重を受けるには厚さのあるbの板を用い、床上柱を受けるaを大引の上に置いた方が有利なようにみえる。これでbの壁小舞は床下の外壁に使われ、a材は造り出しを下に、小舞穴のある面を上にして床上の側壁を受けると考えられる。

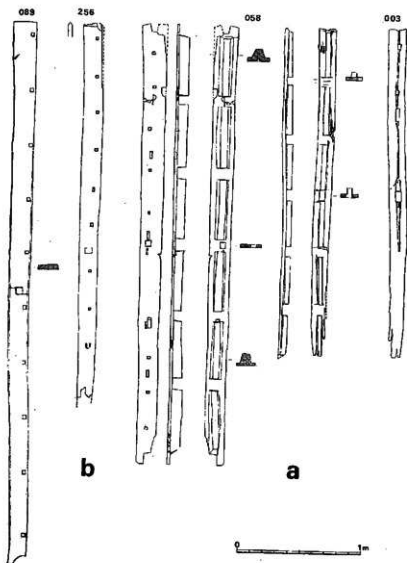
089の小舞穴は若しく片側に寄って設けられており、中央の枘穴中心から小舞穴の外縁までは約6.5cmほどで、柱断片と考えた299・298の半径とはほぼ一致する。したがって柱と壁小舞の外側に横小舞をとりつけた骨組を考えることができ、高知県竹内家(重文)などの実例と類似する。また、床下の妻側もふさぐ必要があるので、256と類似した合輪が089の両端に直角にかかり、小舞穴が下面にあって壁をとりつけたのであろう。

以上のように考えると、合輪089が床梁上を桁行につなぎ、この上に227のような大引が梁行にわたる。さらにその上の両端ちかくに058が造り出しを下にむけ、大引を歯の間に挟んで固定していた形となろう。

058の固定位置は合輪089の外縁に058の内縁を合わせると、089の幅の半分は約7.8cm、058の幅の半分は約8cmで床上柱は床束心より約15cmほど外にハネ出されて立つこととなり、梁間3mほどとなって070その他の梁の推定柱間と一致する。

同形の003も仮に同一建物のものとするとなると全長の2.655mは床梁梁間とほぼ等しい。そこで、妻に梁行において、桁行の根太の端などを押える材に使用できる。

058の両端の凹形仕口と中央の角枘穴を使って床上柱を立てるわけである。



第4図 建築部材 その2 (縮尺1/30)

床より上の構造

床上柱とみられるものは、ほぼ完形の088、断片では300・254などの他、杭に転用されている289・290・291も原形は柱だった可能性がある。

088は竹をのぞいた全長は265cm、300は竹をのぞいて現存長154cm、254は現存長で168cmほどある。他の材は短く切断されていて柱高を考える資料にはならない。

088は台形の断面で、広い方の面にのみ方3cm強・深1.5cmほどの仕口穴が一系列。先端部

は失われているが、現存末端の太さからみて、もう15cmほど長くなり杓状になって終わっていたと思われる。太い方の端の杓は材の広い面に直角の方向に長くつくられ、台輪・根太押えなどに立てると、それらと平行の方向の小舞を受けるようになっている。長さは側柱としては長すぎ、棟または近くを支える特殊な柱と考えざるを得ない。

一方、254の現存長は1.69m、300は杓をのぞいて1.54mあり、側柱長は1.7m以上あった筈である。すると088との長さの差は1mほどで、梁間の半分が1.5~1.6mなら垂木勾配6寸ほどとなり草葺にはゆるすぎる。したがって088は棟柱ではなく、棟を外れた位置にある妻または間仕切柱で、一方に壁をもち他方は開口となるものであろう。又首または垂木とみられる015の中ほどに納穴があるのはこの推定を助けるものである。

垂木勾配が1尺(45度)ほどなら棟木高は床上3.3mほどとなろう。

小屋組

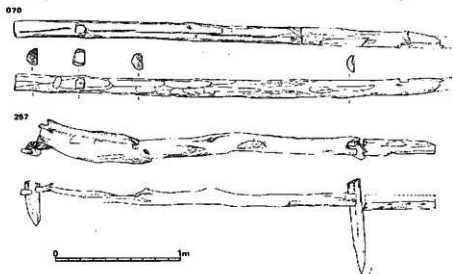
梁とみられる070には柱頭の納穴よりやや両端よりにハツリ痕があり、桁をわずかハネ出してとりつけたとみられる。084が桁と思われるが、片面に大小の納穴2列があり、大きい方の穴の間隔は大引押え058の切込みとほぼ一致する。058は一部に小舞穴がなくて出入口か窓と思われる部分があるのに、084は小舞穴に省略がなく全長に配される。両者とも同形同大の材が2丁ずつ必要なのに1丁しかないので058と084が直接組みあうのではなく、互に相手は失われたものであろう。大きい納穴は壁小舞が入り、小さい穴は草壁内装のヨシ簧やムシロ張を押える棧の納まりであろうか。

棟木は106と195をあてられるが、106は両端が折損し、195は同一個体の一方の端とみられる。図の106の左端は仕口近傍から折損しており、195と断面形・寸法とも酷似しているので、この折れ口に納穴の両脇長さ3cmほどを補って195が接続するとみられる。195が妻壁から外のケラバの棟木になるものであろう。他端は、仕口間53cmの一段、先端分の48cmの一段があって妻柱の納穴がつき、ついでケラバの195と対称の部分があるとすると妻柱間の距離が3.6mとなって058の長さとも一致する。

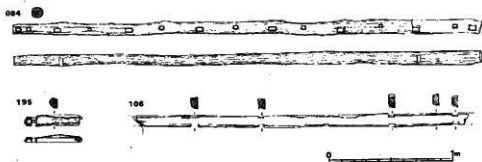
棟木としても両脇の欠き込みは幅6cm弱しかなく、両側が同位置にあるので251・077のようない丸垂木をはめ込むことはできない。251のように一端に納穴をあけて男木・女木の垂木を、奈良時代の建物のように組みあわせる可能性もあろうが、男木が出土していないので、いまは106の両脇の欠き込みは縄がらみとしか考えられない。

先端の納穴は棟持柱ではなく、破風板とりつけ用の栓の穴であろう。

垂木とみられる材のうち、251のみが一端に納穴を有する点で例外で、他はすべて太い端を雁首につくり、ここから約80cmのところに簡単なハツリがあり、さらに2.2mほどにハツリ整形したものもある。雁首が軒先の茅負をとりつけるところ、ここから80cmほどが軒桁ととりつき、さらに2.2mほどのところが棟木にかかるものであろう。これらの垂木状の材はいずれも



第5図 建築部材 その3 (縮尺1/30)



第6図 建築部材 その4 (縮尺1/30)

直径10cmほどあり、棟木より太く常識的なプロポーションとちがう。106は一般の棟木のように荷重を受けるものではなく、又首兼用の垂木間隔を固定するのみの用途と考えれば問題は無い。

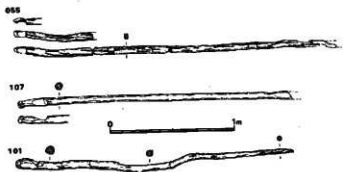
この垂木上に桁行の母屋(もや)または屋巾竹にあたる棟材があり、さらに垂木竹または野垂木にあたる細丸太がついて屋根の骨組はできる。101・055・107など一連の細長くて加工度の低い材がこれにあたるものであろう。

棟木両端の納穴に栓を大入れし、ここに018と221のような破風板をとりつける。図で左端が棟木端にかかり、右端が茅負先端を半ば隠す位置に来る。とりつけ仕口は何もないので、上端は棟木先の栓に縛りつけられ、下方は野垂木材と茅負に結ばれていたものであろう。

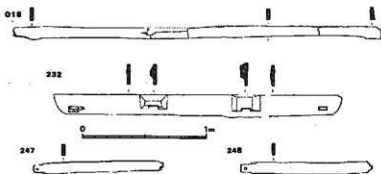
側桁 084 の全長は本体桁より仕口の余り分しか長くないので、ケラバの出は茅葺と屋根面の屋中竹にあたる材で保つことになり、あまり長くは出せない。棟木からみたケラバの出39cm程度でちょうどよいのであろう。

開口部その他の雑作

出入口・窓など開口部の部材とみられるものは敷見板に似ている 232 と、その仕口に合う 247・248 の両材が近接して出土している。232 は造り出しのある面を表面としても 247・248 は表裏のいずれにとりつか材自体や出土状況からわからない。一応、敷見板 232 が水平にとりつき、247・248 が両側の辺付として用いられ、上の轆居材は失われたと考えると、開口部の高さは辺付長さの93cmほどしかないことになる。高床建物には勾配の急な梯子から入るので1m弱の高さの入口も可能性はあるが、城輪屋などの例ではおおかた入口が背が高くつくられ、他の背の低い窓を床上加らあまり離れず設けているものが多い。この開口も出入口でなく窓だった可能性が強いように思われる。



第7図 建築部材 その5 (縮尺1/30)



第8図 建築部材 その6 (縮尺1/30)

敷見板 232 の造り出しの一方に凹字型の出張りをもつ形は南西諸島高倉の入口で梯子をとりつけるハシカケに似ている。ただしハシカケは開口部に一つあればよいので、232 の造り出しは別の用途と考えねばならない。形からみて、両方とも同じ向きに開いて、何かを受けとめる役割が推定できるので、シトミ式の扉の枠を閉鎖時に受けるものにも用いられよう。シトミ戸は残存していないが、古い民家のシトミヤムシロ戸の例からみて丸棒 261 のようなものから藁葛で縫い下げればよい。261 自体は全長が232の全長と近似するが両端の納を固定する装置が取りつけられないのでこの場所のものではなかろう。

この窓がどこにあったか。232の造り出し仕口間の内法寸法は67cmほどで、大引押え058の中央右寄りの小舞穴のない部分の長さ約60cmに近い。この両側には草壁小舞穴があり、232は壁のない部分より長く、草壁仕口はないから開口部の外側に窓の枠組をとりつけ、戸締りと化粧を兼ねたものであろう。

平の一方に窓があったとすると出入口はどこであろうか。さきに003を妻の根太押えと考えたが、この材の平らな面をみると、中央に貫通した納穴があり、さらに図で左方のみ仕口穴があって右方にはない。左方の仕口も左端より二つは草壁小舞穴らしく、他の二つは間柱に類似した長手の納穴となっている。これによると妻の半分が大きい開口になり他の半分は草壁と小さい開口があるようにみえる。出入口のわきに小窓があったのであろうか。

この出土材が仮に本道跡のB1又はB2建物のものとする。いずれも桁行は全長3.8mほどで、出土材から復原できる床上構造の桁行3.6mより20cmほど長い。これは妻出入口の前に短い簡素な濡縁風の部分がかったとすると都合がよい。もっとも、全長で20cmほどのちがいで、柱に298・109のような、あるいは現存民家で広島県掘江家(重文)のような曲木を使用していれば実際には問題にならないこともある。

床は板の出土がきわめて少く、民家の実例でも古くは竹などの簀の子床が多いので、梁行の大引・桁行の根太を組んだ上に細木の簀の子を敷きつめ、ワラ・ムシロなどで床面をつくったと考えられる。

床床上に001や036のような鼠返しをおくと階下の草壁との調整がつかない。また、床下も草壁がめぐっているので鼠返しはあっても意味がないであろう。

以上のように考えると、高床で1間(2.6m)×2間(3.8m)、床上棟木高3.3m、切妻・草葺で床上・床下とも草壁で閉ざし、妻の一方に出入口、平の一部に低い窓がある。内装はヨシ賃かムシロ張りの簡単な家屋ができる。

以上の復原は可能性による推定が多く、やや不確実の感を免れない。ただ、細部の修整はあっても全体の骨組については大きなまちがいはないであろう。全形がまったくちがう南西諸島の高倉のようにならないか、いろいろ工夫してみたが、前述の復原の方が無理がないようで

ある。

用途として、間仕切や窓があったことを認めると倉庫には不適当で、住居的なものとなる。ただし規模は小さく、三畳ほどの2室しかない。切妻・妻入で前後二室に分かれる点は出雲大社本殿や住吉大社本殿と似ているともいえようが、如何であろうか。高床の下方も草壁で閉ざされるのは家屋文様にもみられる高床家屋にもあり、神社建築でも床下を嚴重に閉鎖している例がある。あるいはこの家屋の用途も特殊なものかも知れない。

仕口について

用いられた仕口はすべて簡単なものである。結合の技法は程度により三段階に分けることができる。1は仕口のみで結合が完成するもの、2は簡単な仕口で組みあわせてう互に縛りつけて固定するもの、3はほとんど仕口らしいものではなく相互を縛りあわすだけで結合するものである。

1は開口部枠組とみられる232に247・248の端を一枚納として差し、さらに鼻縁によって固定しているもの、床束と床梁、側柱と小屋梁など納差しするものなどである。側柱の根元は大引押えに納差しとなるが納が細く弱いので縛りつけて固定する必要があったとみられ2に属する。

2として壁の壁小舞は側桁や大引押えの小舞穴に先端を挿入するが、小舞穴は後世のものとはちがい、浅く広いのでクサビなどでは固定できず、縛って固定したものであろう。そのため小舞の先端は尖らずだけでなく縄がかりの雁首をつくってある。

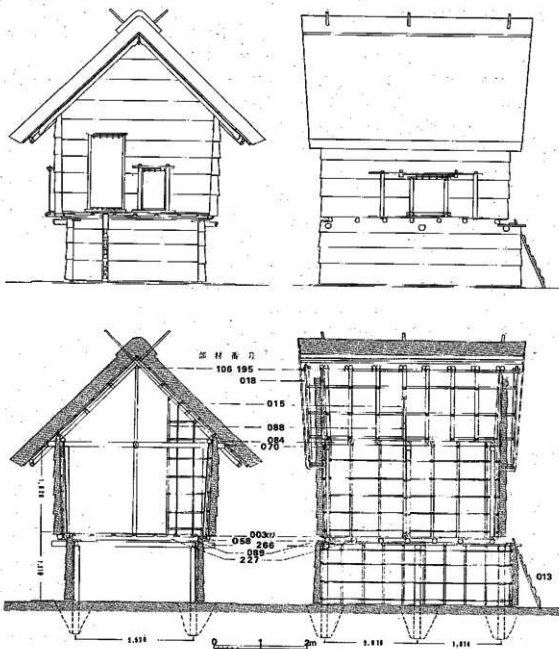
3として力垂木は棟木・側桁・茅負との当りを軽くハツてあるだけで藁藁で緊縛してとりつけたものであろう。茅負が滑り落ちないように垂木先端は雁首としている。側柱と壁の横小舞も仕口をつくらず縛りつけたと思われる。これは伝統的民家にもみられる技法である。

台輪と床梁、台輪と大引も縛って固定し、側面中央の床束のみ先の桁が床梁より上に出て台輪に挿入されていた。大引押え058・003も大引や根太をはさみつけて乗るだけでなく緊縛固定を伴ったものであろう。釘・鋸の類はまったく使用されていない。

尺度について

以上の仕口、小舞穴や大引押え・棟木の切欠きなどをみると、いかにも整然と配置され計画的に尺度を用いて作ったようにみえる。仕口や柱間の決定に或る種の尺度が使われたか、問題がある。

材の全幅・丈・全長については資料が少なく、埋没中の圧縮・変形・切損があり尺度を考えるには不適当な点が多い。仕口で数が多く間隔測定値の信頼できるのは小舞穴であるが、現存古建築でも小舞穴間隔は必ずしも正確に配されていない。平均値に対し5%近い誤差がみられるものもある。これは小舞間隔は高い精度を要求されず、寸法割りつけの際とノミによる穴彫りの際とに工作誤差が重なるためである。湯納出土材ではノミ刃幅は9mmほどとみられるの



第9圖 湯紡遺跡第8次調査区出土の建築部材からの推定復原家屋（縮尺1/80）

で、工作誤差もその幅に近いものを生じる可能性がある。

以上のことを考慮において類似の寸法を集め、平均して各々の値との比較差をなるべく小さく調整し、さらに信頼できる仕口両端間の全長の値等の寸法値を整理すると、24cm前後又は30cm前後を1尺とする単位では完数値を得にくく、25.2cm前後を単位とすると割りつけやすい。完数を得られる箇所もあるが、 $\frac{1}{10}$ 単位、あるいは数単位を3乃至4等分する割付もあるらしい。

この25cm強の尺度が物指の形をとるものか、人体の前脚部や足首の長さ、手指を拡げた長さというような自然の一部から来たものか疑問もある。しかし、尺完数や全長を数等分するばかりでなく、1寸を2.5cm強とした寸単位の割り付けかともみられる点があることは、自然物ではなく、1寸刻みの物指が使用されたという想像を助けるようである。

もし、25.2cm前後を1尺とする物指使用を認めると、この復原建物は桁行15尺、梁間10尺、床上桁行14尺、梁間12尺床高6尺に計画されたこととなる。

遺跡の年代について

出土材による復原建物の平面は前述のように丘上の建築遺跡B1・B2に合致する。

一方、B1・B2の推定年代はその柱穴埋土から弥生後期の土器片が出土しているためその時期とされ、古材出土の層は古墳時代初期の4世紀の土器をふくむことからその時期にあてられている。これは一見、古材は4世紀、丘上の建築遺跡は3世紀頃で年代が合致しないようである。しかし、柱穴から出る遺物はその建物建設年代の上限をしめすもので必ずしも建設年代そのものではない。周囲に前代の堆積層があれば建設時より古い遺物が柱穴に入るのは当然である。一方、古材出土地の堆積は古材を転用した工作物が崩壊埋没したときに4世紀の土器が入ったので、これも厳密には埋没したのが4世紀より遅らないということで構築年代とは直接の関係はない。ただしこのような古材転用の構築物が永持ちしたとは考えられないので、建設年代とは著しく異ならないであろう。要するに丘上の掘立柱建物の建設年代と、丘裾の転用材の年代とは、伴出土器の年代差ほどの差があったと考える必要はなく、接続した年代のものとみてまったく差支えない。すなわち、丘上の掘立柱建物の部材が丘裾に運ばれ転用されたことと推定することに困難はないのである。

参考文献 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房（1961）、鹿児島県教委『鹿児島県の民家』（1975）、鹿部屋福平『アイヌの住居』彩国社（1943）、

『重要文化財——修理工事報告書』法隆寺東室、岡岡封蔵、法起寺三重塔、唐招提寺宝蔵及び経蔵（以上奈良県）、竹間家住宅（高知県）、堀江家住宅（広島県）、太田博太郎編『信濃秋山の民家』日本民家集落博物館（1963）

(2) 使用された木工具について

今回、発見された建築部材・井堀用材は、すべて鉄製木工具によるものと推定している。すでに「今宿4」の部材各説で使用された工具について推断したところだが、工具の種類はそう多いものではない。斧、手斧、鑿、鉋、楔などがそれであり、木製農具や木製品などを加工する工具を加えても刀子が加えられる程度であろう。しかし、造り出しや納穴の工作面をとった丸太の存在などは、単に工具が一組あれば仕事が出来ると言うようなものではなくかなりの人数、もしくは時間と多量の工具の存在したものと想定しなければならないし、一定の間隔での分割された造り出しなどには、ある程度のものさしのようなものも予測しないわけにはいかない。

部材に残された工具痕跡から使用工具を想定することはそう簡単なことではないがここでもう一度その痕跡を検討することから始めよう。

斧 斧は両刃であり、伐採や粗割に利用する。柄を着けて腕の回転により斧自身の重量から生ずる遠心力を利用するものであるから重いものが想像される。

湯納遺跡では、⑨～⑩類の木材には多かれ少なかれ斧の使用された痕跡を残している。⑩類②27の部材には刃巾4.9cm以上、⑩類②298の部材には4.1cm以上という計測値がある。「今宿4」図版80の4・6などの欠き込みなども斧による仕事であり図版81の3もこれであろう。

手斧 手斧は片刃であり、刃は柄に対して直角に着装される。従って削り取る機能から細部の加工や仕上げに用いられる。

湯納遺跡では、さきに「ウロコ状」として報告したものが手斧の使用痕であり部材としては、①類058・089・300・018・036・②類256・③類076・④類290・291・289などに顕著に残っている。前記291では刃巾35～53mmほどが計測されている。「今宿4」図版81—5(256)・6(291)がこれにあたる。

鉋 刃の平面がやや丸味をおびた三角形をしたもので、横から見ると反りあがる特徴がある。柄をつけ休でおしながら削り取る機能を持つ性質上、木材に残された痕跡からは推断しにくい。しいては湯納遺跡出土の部材に鉋の使用された可能性をもとめれば⑩類の058・003・089・256・247・248・018・221などが想定されよう。

鑿 弥生時代の出土例から見れば棒状の一端が片刃に作られるもの、棒状の一端をやや広く刃部とするもの、断面台形で先端を片刃にするものなどが知られている。湯納例をひけば、柄の造り出し、納穴などを残す木材のすべてがこれに該当するものと思う。例えば「今宿4」図版81—7(003)は鑿による横からの抉りであり、同図版78に示した納穴のほとんどが細か細工で鑿がなくては穿つことは不可能である。⑩類の266の納穴の部分で刃巾9mmほどのものを認めている。

楔 楔は木片でも斧・手斧・鑿などの刃部を利用してこの役割は、はたし得るものと考え

てよいだろう。③類148の部材で二つ割りしたときのものと思われる刃巾7.0cmほどのものを計測した。

鉄製の木工具は、残念なことに湯納遺跡からは出土していない。またここまで記述してきた工具の組合せは弥生時代の工具の組合せであるので弥生時代の北部九州の出土例のいくつかからその形態や特徴をひろって見よう。

斧では、対馬赤崎出土のものは船載品といわれ、弥生中後期のものと言われる。また筑紫野市吉ヶ浦のものは国産品と首われ鉄板の両側を折りまげて袋を作るいわゆる袋斧²¹と嘉穂郡穂波町の日上遺跡から出土している楔形鉄斧の三種類がある。赤崎のものは15.3cmと大型であり、吉ヶ浦のものが11cmほど、日上例が12.1cmほどのものである。斧としては重量の記載が報告されている例が少ないが、大きさから赤崎例が最も重いようだ。切れ味を想定するとき吉ヶ浦例、日上例には重さの点でややものたりない感じもするが用途による使いわけがあるものと理解したい。手斧は、奄岐原の辻例は中期末で袋斧のように着装部を作るものがあり、九州以東では楔形のもの²²が紹介されている。斧に比較してやや小形で原の辻例で7.5cmほどである。鉈は、福岡市宮の前・対馬シケノダン・奄岐唐神・筑紫野市吉ヶ浦など例にことかかないようなのでかなり普及していたと考えられる。心強いのは宮の前遺跡例で、弥生後期のもの、長さ17.8cm、断面三日月形をしたものである。鑿は、同じく宮の前遺跡から断面成形で先端を片刃にし、反対側を袋につくるものが出土している。北部九州はこのような鉄器の普及した状況下に弥生後期の時にすでにあった。

湯納遺跡の建築部材は、その内から出現するのである。

これに鉄製農具の存在を合せて考えるとき石器と鉄器との交代はかなりのスピードであったものと予想される。

古代の日本において鉄製農具の出現と拡散の現象は、これまで自然条件に限定されて存在した農地を周囲に拡大させてゆき不可能を可能にする力を持ったものと想像されるし、登呂遺跡の水田跡のように実証されたものもある。川越氏によれば、「弥生時代の鉄製品の出土例は、現在までのところ、前期16、中期216、後期308、時期不明121、合計661点である。」「各時期別の調査の不均一さを無視すれば、そのまま当時の比を示すものと考えてよい。」とされている。今單純に藤田等、川越哲志両氏が作成された「弥生時代地名表」をもとに、福岡・佐賀・長崎・熊本の4県に於ける鉄器を出土した遺跡の数を表にすると第35表のようになり、後期における北部九州での鉄製品の普及度の一応の指標としてとらへよう。一方、北部九州では中期後半から石器は石包丁を残して他はほとんど姿を見せなくなる。つまり石斧が鉄斧に、柱状片刃快入石斧・扁平片刃石斧が手斧、鉈に石鑿が鉄製鑿にとの変化があったものと理解して良いだろう。ここでやや飛躍するが中期の円形プランをもつ住居跡が後期には方形プランに、中期で消滅する貯蔵穴が後期では高倉の倉庫に代わる変化の原因は木材の加工・調整が鉄器の普及に

よりたやすくなったことに起因するものとの推測がなりたちそうである。

第 35 表 北部九州の弥生時代の鉄器出土遺跡数

	中期以前	中期～後期	後期～古墳初
福岡	14	5	21
佐賀	3		4
長崎	4		3
熊本	3	1	7
合計	24	6	35

註1 川越哲志 金銅器の製作と技術「古代史発掘4, 稲作の始まり」講談社 (1974)

註2 同前

註3 酒井仁夫「日上遺跡」福岡県教育委員会 (1971) 酒井氏の報告によれば鉄等は古墳の墳丘盛土下田地表中よりの出土で所属時期決定にあたって疑問の残るところではあるが共存土器が須玖式のみであることから弥生時代中期後半に含める可能性があるとされる資料である。

註4 註1に同じ

註5 註1に同じ

註6 高倉洋彰 3号石棺出土遺物「宮の前遺跡 (A～D地点)」福岡県労働者住宅生活協同組合 (1971)

註7 註1に同じ

註8 註1に同じ

註9 橋口達也 鉄器 「宮の前遺跡F地点」福岡県教育委員会 (1971)

註10 註1に同じ, 鉄器の点数は川越氏が原稿を書かれた時点のものであろうから1974年の時点となろう。

註11 藤田等, 川越哲志 弥生時代鉄器出土地名表「日本製鉄史論」たたら研究会 (1970)

註12 下条信行 石器の製作と技術 註1に同じ

(3) 建築部材の材質の分析について

九州大学農学部松本島・林弘也両先生によって建築部材の材質について分析して頂いた結果は次のとおりである。すでに「今宿4」の山本輝雄氏の部材各説に挿入させて頂いたが改めてここに掲載する。

第 38 表 第 8 次調査出土建築部材 (その1)

資料番号	部材番号	分類番号	樹 種 同 定	備 考
001	106	①	ツブラジイ <i>Castanopsis cuspidata</i>	榎 木
002	261	①	ツブラジイ <i>Castanopsis cuspidata</i>	
003	227	④-2	マツ (アカマツ又はクロマツ) <i>Pinus spp.</i>	大 引

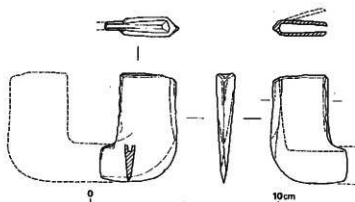
第 37 表 第 8 次調査出土建築部材 (その 2)

資料番号	部材番号	分類番号	樹 種	同 定	備 考
004	073	㊦	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	
005	089	㊦	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	台 輪
006	058	㊦	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	台 輪
007	022	㊦	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	
008	015	㊦	アケボノシ	Mallotus japonicus	
009	070	㊦	ヤマモモ	Myrica rubra	葉
010	019	㊦-2	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	
011	228	㊦-1	サンゴジュ?	Viburnum Awabuki?	
012	011	㊦	スダジイ	Castanopsis cuspidata var. Sieboldii	
013	078	㊦	ミズキ属	Cornus spp.	
014	196	㊦-1	コナラ属	Quercus spp.	
015	096	㊦-2	クロガネモチ	Ilex rotunda	
016	086	㊦	スダジイ	Castanopsis cuspidata var. Sieboldii	
017	083	㊦	ビワ属	Eriobotrya spp.	
018	020		モチノキ?	Ilex integra?	
019	063	㊦	ミズキ属	Cornus spp.	
020	063	㊦	クリ	Castanea crenata	台 輪
021	070	㊦	ヤマブキ	Camellia japonica	
022	015	㊦	ミズキ属	Cornus spp.	
023	109	㊦-2	シラカシ	Cyclobalanopsis myrsinaefolia	
024	102		キハダ属	Phellodendron spp.	
025	036	㊦	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	
026	248	㊦	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata	鋸 口 部
027	256	㊦	スダジイ	Castanopsis cuspidata var. Sieboldii	台 輪
028	013	㊦	不明 (広葉樹 散孔材)		
029	035	㊦-1	マツ (アカマツ 又は クロマツ)	Pinus spp.	
030	074	㊦-2	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata	
031	018	㊦	不明 (広葉樹 環孔材)		破 片
032	001	㊦	クスノキ	Cinnamomum Campobora	葉 逆 し

5. 青銅製鋤先

(1) 湯納遺跡出土の青銅製鋤先 (第10図)

Ⅱ-A区D5溝の弥生中期～後期の土器が伴う上層から発見されたもので、弥生後期後半のものと思われる。木器も出土した層で、溼潤な溝の中にあっただめか、表面に鉄分らしきものが付着し茶褐色を呈し、青銅器らしい色がない。したがって質は堅固で保存がよいが、表面の細分観察が不可能である。



第10図 湯納遺跡Ⅱ-A区D5溝出土青銅製鋤先 (縮尺1/2)

縦に破損した半分であるが、原形を推定しうるものである。袋部は本来の幅よりかなり圧縮されて狭くなっているが欠損はしていず幅の広い無突帯形式のものである。この袋部から全体の幅を復原すると8.8cm前後となり、他の例から推

計しても0.1cmほどの誤差内にとどまるであろう。鋤先全長は5.8cmで刃部の長さは1.7cm残っており、鋭利な片刃である。袋部内法は長さが4.1cmあるが圧縮されているので、本来の厚さは不明であるが、他の例から1.0～1.2cmと推計され、幅も8.1cm前後となる。破損面を観察してみると、破損後多少磨滅しており、破損後もなんらかの形で使用した可能性が高い。

(2) 青銅製鋤先について

① はじめに

ここで述べるものは、一般的には青銅製鋤先と呼ばれてきたものであるが、研究者によっては銅鍬あるいは銅斧として扱われてきた。ところが、今まで研究対象になっていた福岡市田隈・糸島郡三雲²¹・春日市立石²²・浮羽郡烏越²³の4例は発掘調査による出土品でなかったために、時期など不明な点が多かった。したがって、研究者は弥生時代青銅器を論ずる際に、申し訳程度に述べている感があった²⁴。こうした中で、この4例に福岡市湯納遺跡の2例を加えて銅鍬としてまとめたのが杉原莊介氏であったが、その後これ以上の検討を加えられることなく今日に至っている。

第 38 表 弥生時代青銅製鋳允出土地名表

(昭和52年1月現在)

番号	出 土 地	型式	遺 構	時 期	備 考	文 献
1	福岡縣糸島郡明原町三雲・柿の木	Ⅱ			ほぼ完形	①
2	＊ 福岡市西区田隈	Ⅰ			未使用 ほぼ完形 第11回	②
3	＊ 福岡市西区拾六町・湯納(1)	Ⅱ	住居跡	終 末	鋳部の一部	③
4	＊ 福岡市西区拾六町・湯納(2)	Ⅱ	住居跡	終 末	鋳部の一部	④
5	＊ 福岡市西区拾六町・湯納(3)	Ⅱ	溝	後期後半	手 分	⑤
6	＊ 福岡市西区野方中照	Ⅱ				⑥
7	＊ 福岡市博多区南田	Ⅱ				⑦
8	＊ 福岡市南区・警務部・弥永塚	Ⅱ	溝	後期後半	鋳部と刃の一部	⑧
9	＊ 春日市小倉大南(1)	Ⅱ	住居跡	後 期		⑨
10	＊ 春日市小倉大南(2)	Ⅱ				⑩
11	＊ 春日市小倉大南(3)	Ⅱ				⑪
12	＊ 春日市小倉立石	Ⅱ	豊積墓	後 期 初	ほぼ完形 第13回	⑫
13	＊ 春日市上白水・門田	Ⅱ			小 片	⑬
14	＊ 春日市上白水・辻田	Ⅱ			豊積墓周辺	⑭
15	＊ 糟粕郡吉宮町		住居跡	後 期		⑮
16	＊ 浮羽郡内井町高永・鳥越	Ⅰ	不 明	不 明	第12回	⑯
17	佐賀縣三養基郡基山町宮浦・南(1)	Ⅱ	住居跡	後期後半	完 形	⑰
18	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(2)	Ⅱ			完 形	⑱
19	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(3)	Ⅱ			ほぼ完形	⑲
20	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(4)	Ⅱ	環 壕			⑳
21	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(5)	Ⅱ				㉑
22	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(6)	Ⅱ				㉒
23	＊ 三養基郡基山町宮浦・南(7)	Ⅱ				㉓
24	＊ 神埼郡東谷振村大曲・東山	Ⅱ			ほぼ完形	㉔
25	山口県下関市伊倉				小 片	㉕

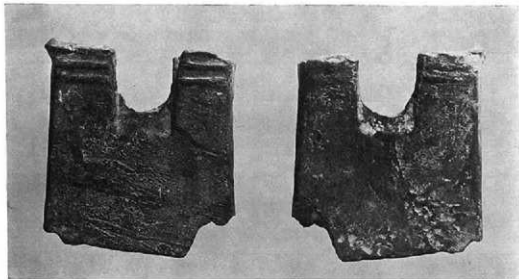
昭和44年発見の湯納遺跡の2例以来、発掘調査例が増加し、採集品も含めて昭和52年1月現在、表に示したように14遺跡25例となった。の中には、福岡県外の佐賀県2遺跡8例、山口県1例が追加されており、分布圏も拡大した。しかも、今までの4例の中にも見落されている点があり、ここに新たな問題が提起されると信じて、新旧資料を紹介し、再検討してみたい。

④ 青銅製鋤先と遺跡

出土例は一覧表にまとめたが、本報告されていないものが多く、詳細を述べる事ができないが、新旧資料のうち原形をとどめている9例を紹介したい。

(イ) 福岡市西区田隈(第11図)

出土状態不明。したがって遺跡の性格が明らかでないため現物の説明にとどめる。袋基部に2条の突帯をもつ形式で発見例中最も質がよく他の例と比較して本例のみ著しく異なるところが多い。その1つは刃部が長く、丸味がないことである。さらに地膚は小さな凹凸が多く、鑄放しのままの状態にちかい。ただ鑄造後甲張りのできる両側は研ぎ上げられ、湯まわりのせいか地膚にミミズばれ状の突出物があるが、鑄放しのままではなく、そこに不規則な方向に細い擦痕が走り、これは使用痕でなく研上げであることを示している。大きさは長さ9.6cm、袋部幅8.3cm、刃部復原最大幅8.9cm、袋内法深さ3cm、上端幅7.3cm、厚さ0.5cmである。

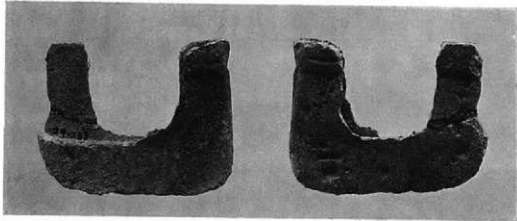


第11図 田隈出土青銅製鋤先

(ロ) 福岡県浮羽郡吉井町富永島越出土例(第12図)

谷川に面する約40度の急傾斜面を開墾中発見された。時期不明。2条突帯形式で、袋部の一部を欠損し、全体に鑄上りが悪く表面に凹みが多い。長さ6.5cm、基部の復原幅約8.0cmで刃部

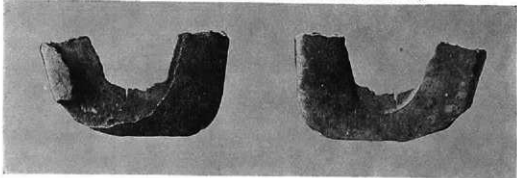
は丸味があり、表面には使用痕と思われる縦に長い擦痕が走っている。



第12図 烏越出土青銅製鋤先

〔4〕 福岡県春日市大字小倉字立石出土例 (第13図)

遺跡は、須玖岡本遺跡の南東約1.8kmの同一春日丘陵上に位置する。発見者の故鈴木基親氏によると須玖式の甕棺内から龍虎鏡(第14図)に伴って発見されたという。



第13図 立石出土青銅製鋤先



第14図 立石出土四乳龍虎鏡

本例は使用度の最もはげしいもので、刃先から基部にいたる擦痕が全面に見られる。その擦痕の付き方も、片刃状を示す側は片刃部分で切れるが、表面は刃先から基部までは直線と続く痕跡が全面に著しい。本例は一部欠損しているが、それとは別に中央に亀列を生じU字型が多少片開きとなって左右対象でない。

㉒ 福岡県春日市大字門田字辻田出土例

遺跡は須玖岡本遺跡の南西約2.5kmの春日丘陵の外圍に広がる段丘状の台地にある。福岡県教育委員会が調査し、プレ縄文から近世墓地にいたる遺跡が発見されたが、本例は荒された23号変葬の盗掘坑内から発見された。変葬は弥生中期後半のものである。本例は無突帯形式のもので、最も刃部が長く残り、原形を知りうるものである。詳細は本報告をまちたい。

㉓ 佐賀県三養基郡基山町大字官浦字宿(千塔山遺跡)出土例

遺跡は佐賀県の北東端にある基野城の東麓の台地状にあり、プレ縄文から近世墓におよぶ。とくに環濠を有する弥生後期の集落は重要な遺跡で、住居跡内や濠内から7例も出土している。調査をされている中牟田賢治氏によると、完形にちかひものが3例あり、弥生後期後半の住居跡その他から出土したという。詳細は本報告をまちたい。

③ 型式分類

青銅製鑢先は袋部の突帯の有無から2型式に分類することができる。

I型、田隈例を代表とするが、鳥越例と合わせて2例が知られているにすぎない。袋基部に2条の突帯を付けるのを特色とし、中国では袋部をもつ青銅利器にはこのような突帯を付けるものが多いところから、祖形を中国に求められると考える。田隈例は使用前の製品で、鳥越例はかなりの使用に耐えたものである。

II型、無突帯形式のもので門田例を代表としたいが、本報告されていないので立石例を示さざるをえない。現在I型の2例以外は全部II型に属する。これは杉原氏がII型に分類したU字形のもので、門田、千塔山例のようにあまり使用されず、刃部が長く残っていれば角丸形をなし、極限まで使いこなせば立石例のようにU字形となる。

青銅製鑢先は実用された痕跡が明らかでないため、最も磨滅する刃部の形状を型式分類の対象にすることはできない。總体的に見てU字形をした鑢先を単なる袋部の突帯の有無という細部の少差による分類をあえて行なったのは、この青銅器の系譜に関連すると思われるからである。

④ 性格および用途

弥生時代の青銅利器としては、これ以上に実用された証拠の明らかなものはない。伴出遺物から時期の明らかなものは、湯納の3例が後期後半から終末、千塔山7例が後期後半というように弥生後期後半に集中している。問題は変葬墓から発見された立石例と門田例である。門田例は盗掘坑内の発見で本報告がないので今回は除外するとして、立石例は前述したように須玖式変葬であったという。伴出した鏡(第14図)は平縁細線龍虎鏡で、後漢初期の鏡である。本例と同様な龍虎鏡は弥生時代では他に出土例がないが、縮歯文縁の龍虎鏡は佐賀県二塚山遺跡で29号石棺墓の棺外から発見されている。さらに佐賀県三津永田104号変葬墓からは素環頭鉄刀と共に虎雲文縁細線獸帯鏡が発見されている。この変葬は後期前半のものである。したがって、立石の変葬は後期初頭の可能性は強いが、中期の須玖式の可能性は弱い。

このようにⅡ型で後期初頭から前半に位置づけることのできる例があることからⅡ型は後期初頭から終末までの時期に使用されたことがわかる。Ⅰ型の2例は出土状態が不明なため時期を決定できる資料がない。可能性としては、有突帯のものは中国、朝鮮に形相を求めることができるから、Ⅰ型がⅡ型に先行して使用されたといえる。したがって、中期にのぼる青銅製鑿先の発見が予想される。

青銅製鑿先の金属質を分析した例を知らないので肉眼による簡単な観察によるが、Ⅱ型の大半の例は青白色に変化した脆いものである。これは北部九州の後期の青銅器としてあげられる小形仿製鏡や広形銅矛も同様である。これに対し、中期後半の青銅器としてあげられる中細形銅矛・銅戈は白銅色や黒漆色を呈し、銅質がよいことを示している。このことからⅡ型は後期の所産であることを示しているように思う。

出土例で示したように、使用痕あるいは刃の状況から土の中に全体を突刺して使用する農耕具であることは明らかである。なぜなら、儀仗用の鍔であれば刃先から基部まで長く長い擦痕が残るような使い方はしないはずであるし、使い込まれるほど片刃の状態が著しいのは、刃と平行に柄が着装されないことを意味している。斧であれば袋部をもつ片刃の鉄斧と同様に考え、刃と直行する柄を着けて手斧式に使用できるが、この場合、土以外の木材などを対象とする時、斧に残る擦痕は刃部のみに残る短いもので、同時にV字状に返りの擦痕も残る。これは金属の質からみても、木材などの硬度の材質を加工するには適さないことは明らかである。

それでは表代に掲げたとおり、青銅製品は鑿先であろうか。土を対象とする以上、鑿先か鍔先の2者しかありえない。出土した木器から見るとこの2者にはそれぞれ地方によって形態の変化があり、同一地域内においても目的に応じた種類がある。弥生時代前期、中期にはこれらに金属製の刃先を装着する構造のあるものは発見されていないが、後期のものは鑿が岡山県上東遺跡¹²²で発見されている。また、鉄器としての鑿先は長崎県佐渡白岳¹²³の後期初頭の例があり、鑿先あるいは鍔先といわれているものに長崎県原ノ辻の後期初頭例¹²⁴・福岡市宮の前C地点¹²⁵の終末例がある。

青銅製鑿先¹²⁶の大きさを原形を残している田隈・鳥越・三雲・立石・門田・千峯山3例・二塚山の9例から計測すると、磨減が少ない基部の幅を基準にし、最も狭まい三雲・鳥越例が8.0cm、最も広い門田例が9.3cmで、平均8.56cmとなる。型式別にするとⅠ型は8.15cm、Ⅱ型は8.68cmとなり、わずかであるがⅡ型が大きくなっている。ちなみに、上東遺跡の木製鑿の鑿先装着部の幅は9.8cmで、鑿先の内法を考えると1.5cm以上大きいことになる。鉄製品も原ノ辻例が幅約9.3cm、宮の前例が幅11.1cmとなって、大きくなっている。このように大きさの比較は、木製品の不足からどちらともきめたいが、鍔としては刃先を着装するものは古墳時代初期にもないようである。以上、未発表資料が多いため説得力のない記述となったが、鑿先か鍔先かの問題については、なおいっそうの検討が必要であり、またの機会にゆずりたい。

- 註1 フクニチ新聞社「伊都国王墓展」
- 註2 杉原荘介「銅鑄先」日本原始美術 4 1964
- 註3 九州考古学会「北九州古文化図鑑」1950
- 註4 三木文雄「青銅鑄造先」埋蔵文化財要覧 1355
- 註5 杉原荘介「銅鼓」日本青銅器の研究 1972
- 註6 註1に同じ。
- 註7 註4に同じ。
- 註8 註3に同じ。
- 註9 小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1976
- 註10 昭和51年九州史学会で発表。および中牟田實治氏から直接御教示。
- 註11 浜田信也「湯納遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 1 1970
- 註12 栗原和彦「湯納遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 4 1976
- 註13 福岡市教育委員会柳田純孝氏の御教示。
- 註14 福岡市教育委員会井沢洋一氏の御教示。
- 註15 渡辺正夫氏の御教示。
- 註16 福岡県教育委員会の横口達也・上野精志氏の御教示。
- 註17 福岡県教育委員会の井上裕弘氏御教示。
- 註18 福岡県教育委員会の酒井仁夫氏御教示。
- 註19 昭和51年九州史学会にて発表。
- 註20 山本一郎他「伊倉遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告 16 1973
- 註21 註19に同じ。
- 註22 金岡丈夫・坪井清足・金岡恕「佐賀県三津永田遺跡」日本農耕文化の生成 1961
- 註23 岡山県教育委員会「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 2 1974
- 註24 川越哲志「金銅器の製作と技術」古代史発掘 4 1975
- 註25 註24に同じ
- 註26 福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前遺跡(A~D地点)」 1971

6 植物遺体について

湯納遺跡では、澁・ビート屑・堆積土などから種子をはじめとする植物遺体が多量に出土している。早くから九州大学細川隆英先生（現第一薬科大学教授）・大阪市立大学細川昭平先生に一点ずつあたって頂いた。本来「今宿4」に調べて頂いた結果を掲載させて頂くべきであったが、改めて掲載させて頂く。

第39表 湯納遺跡出土の植物遺体 (その1)

資料番号	ラベル	植物遺体	推定時期
009	I-X 裏 D1-裏2層	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	古墳時代
011	I-X 裏 D1-1層	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea モモ Prunus persica	*
015	I-Y D1-1層	イヌガヤ Quercus gilva Blume Actinostemma lobatum	古墳時代
037	I-Y D1-裏3層	イヌガヤ Quercus gilva Blume アンの樺 Phragmites Communis Actinostemma lobatum	弥生時代後期
058	I-Y F29 D1	イヌガヤ Quercus gilva Blume シダの類 Prunus persica	
076	I-V B27 D1	イヌガヤ Quercus gilva Blume モモ Prunus persica	弥生時代後期
096	I-X 裏 D10-下層	ウリ科 Cucurbitaceae Leguminosae Lagenaria leucantha クヌギ Fagus sylvatica モモ Prunus persica	クヌギ Clerodendron trichotomum キカラスウリ Trichosanthes cucumeroides
105	I-Y D1-裏3層	ヤマモモ Myrica rubra S ジュズダマ Colix lachryma-johi カヤの葉?	ムクノキ Aphananthe asperae Planch マルバシヤノキ Ehretia ovalifolia
111	I-Y F30 D1	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea モモ Prunus persica ジュズダマ Colix lachryma-johi	クヌギ Styrax japonica S. et Z Actinostemma lobatum
113	I-Y 表 D1	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	古墳時代
114	I-Y E29 D1-裏1層	モモ Prunus Persica	*
116	I-Y F30 D1-1層	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	*

第40表 湯納遺跡出土の植物遺体 (その2)

資料番号	ラベル	植物遺体	種名	鑑定時期
119	I-Y/E29 D1	Cephalotaxus drupacea	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z
004	I-X西 D2-第1層	ゴキズル Actinostemma lobatum	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z
		ヒヨウタン Lagenaria leucantha	ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ジュズダマ Celastrus orbiculatus
		イチイガシ Quercus gilva	ムナギ Hamamelis japonica	カナムグラ Hamamelis japonica
		不明		
006	I-Y/HVQ2 D2第2分層	ゴキズル Actinostemma lobatum	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z
		ヒヨウタン Lagenaria leucantha	ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ジュズダマ Celastrus orbiculatus
		スモモ Prunus salicina	マクワウリ Cucumis melo	アザミ Anemone pulsatilla
		ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ヤマモモ Prunus salicina	ヤマモモ Prunus salicina
008	I-X西 D2第2層	ゴキズル Actinostemma lobatum	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z	ヤマモモ Prunus salicina
010	I-Y南D5 第4くぼ 第5層	ウキヤガク Scirpus flaviatilis		
016	I/E-ZD2 東陽閣下層	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z	ヤマモモ Prunus salicina	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z
		マメノコ Malvotax japonica	カスノキ Cinnamomum camphora	カスノキ Cinnamomum camphora
		カサノコ Castanopsis cuspidata	カサノコ Castanopsis cuspidata	カサノコ Castanopsis cuspidata
028	I-X西 D2第2層	ゴキズル Actinostemma lobatum	スモモ Prunus salicina	カスノキ Cinnamomum camphora
		ムクノキ Aphananthe aspera	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z
		ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ジュズダマ Celastrus orbiculatus
038	I-X西 D2第2層	カサノコ Castanopsis cuspidata	ジュズダマ Celastrus orbiculatus	ジュズダマ Celastrus orbiculatus
051	I-X西 D2第2層	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Syrax japonica, S.et,Z	イヌゴヤ Cephalotaxus drupacea

第41表 湯納遺跡出土の植物遺体 (その3)

資料番号	ラベル	植物遺体	種	古墳時代
057	1-Y032	キモ	スモモ	クスノキ
	D2 第3層	<i>Prunus persica</i>	<i>Prunus salicina</i>	<i>Cinnamomum camphora</i>
063	1-X西	エゴノキ	フアラジイ	ジュズダマ
	D2 第1層	<i>Styrax japonica</i> S.et.Z イヌガヤ	<i>Castanopsis cuspidata</i> ジュズダマ	<i>Coix lachryma-jobi</i> ゴキスル
068	1-YA32	ムクノキ	ミズバハ	Actinostemma lobatum
	D2 第3層	カラスウリ <i>richosanthus cucumeroides</i>	<i>Symplocos glauca</i>	
093	1-X	フアラジイ	エゴノキ	
	D2 第3層	<i>Castanopsis cuspidata</i>	<i>Styrax japonica</i> S.et.Z	
095	1-X西	ゴキスル	エゴノキ	スモモ
	D2 第2層下	<i>Actinostemma lobatum</i>	<i>Styrax japonica</i> S.et.Z	<i>Prunus salicina</i>
097	1-X	フアラジイ	クスノキ	
	D2 第3層	カンザブドウノキ ノブドウ	<i>Cinnamomum camphora</i> クサギ	スモモ Prunus salicina
		ヤブヒワ	マナハシイ	ゴキスル
		<i>Meliosma rigida</i> S.et.Z	<i>Passia</i>	スモモ
		クロキ	エゴノキ	ミズバハ
		<i>Symplocos lucida</i> S.et.Z	<i>Styrax japonica</i> S.et.Z	<i>Symplocos glauca</i>
		ムクノキ	アカエダシウ	フアラジイ
		<i>Aphananthe aspera</i>	<i>Malilus japonicus</i>	<i>Castanopsis cuspidata</i>
098	1-X西	フアラジイ	ジュズダマ	イヌガヤ
	D2 第1層	<i>Castanopsis cuspidata</i>	<i>Cucumis melo</i>	<i>Cephalotaxus drupacea</i>
		キウカスウリ	クスノキ	
		<i>Trichosanthes cucumeroides</i>	<i>Cinnamomum camphora</i>	
		モモ	ヒヨウタン	カナムヅラ
		<i>Prunus persica</i>	<i>Lageraria lucantha</i>	<i>Humulus japonicus</i> S.et.Z
		ヤブモモ	ゴキスル	イヌガヤ
		<i>Myrica rubra</i> S.et.Z	<i>Actinostemma lobatum</i>	<i>Cephalotaxus drupacea</i>

第42表 勃納遺跡出土の植物遺体 (その4)

炭料番員	ラベル	植物遺体	推定時期
008	I-X西 D2第1層	アラカシ or イチイガシの小さいの <i>Quercus glauca</i> Thunb or <i>Quercus gilva</i> Blume	
117	I-Y南 D2	イヌガヤ <i>Cephalotaxus drupacea</i> ヒョウタン <i>Lagararia leucantha</i> スモモ <i>Prunus salicina</i> シヤズダマ <i>Coix lacryma-jobi</i>	ゴキズル Actinostemma lobatum シヤズダマ Coix lacryma-jobi
120	I-Y南 D2第2層	クスノキ <i>Cinnamomum Camphora</i> イヌガヤ <i>Actinostemma lobatum</i> Cephalotaxus drupacea	スモモ <i>Prunus persica</i> ノゾク
005	II-A D5 1砂	Cinnamomum Camphora イヌガヤ エゴノキ Cephalotaxus drupacea	Ampelopsis brevipedunculata クスノキ Cinnamomum camphora
017	I-YP33 D5第3層	クスノキ <i>Prunus salicina</i> シヤズダマ <i>Phragmites communis</i> Cinnamomum camphora ゴキズル <i>Actinostemma lobatum</i> ヤマモモ <i>Myrica rubra</i> , S., et. Z. カンザワロウノキ <i>Symplocos chepharataefolia</i> , S., et. Z.	ヒョウタン Lagararia leucantha スモモ <i>Prunus salicina</i>
022	I-Y南 D5 第2層	イヌガヤ <i>Cephalotaxus drupacea</i> イヌガヤ <i>Trichosanthes cucumeroides</i> シヤズダマ <i>Illium anisatum</i> シヤズダマ <i>Coix lacryma-jobi</i> イヌガヤ <i>Cephalotaxus drupacea</i>	ゴキズル Actinostemma lobatum ヒョウタン Lagararia leucantha イヌガヤ Quercus gilva Blume
003	II-A D5 F層	イヌガヤ <i>Cephalotaxus drupacea</i>	ゴキズル Actinostemma lobatum ヒョウタン Lagararia leucantha
036	II-A D5 F層	スモモ <i>Prunus persica</i>	スモモ <i>Prunus persica</i>
039	I-Z D5第2層	イヌガヤ <i>Prunus salicina</i> イヌガヤ <i>Styrax japonica</i> , S., et. Z.	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea クスノキ Cinnamomum camphora
		イヌガヤ <i>Styrax japonica</i> , S., et. Z.	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea クスノキ Cinnamomum camphora

新度

第43表 遼納遺跡出土の植物遺体 (その5)

資料番号	ラベル	植物遺体	種	推定時期
059	I-Z D5 第2層	ジュズダマ	シキミ	ゴキズル
		コix lachryma-jobi	Illicium asiaticum	Actinostemma lobatum
		ヤマモモ	イチイガシ	
046	I-Z層 D5 第2層	Myrica rubra, S.et,Z	Quercus gilva Blume	クスノキ
		エゴノキ	ジュズダマ	クスノキ
		Styrax japonica, S.et, Z	Coix lachryma-jobi	Cinnamomum camphora
		ソブドウ	ソブラジイ	ヤマモモ
		Aspalopsis brevipedunculata	Castanopsis cuspidata	Myrica rubra, S.et, Z
		落葉の Quercus の幼葉	榎皮	
071	I-Y層 D5 第1層	モモ	イヌギヤ	ジュズダマ
		Prunus persica	Cephalotaxus drupacea	Coix lachryma-jobi
		エゴノキ	クスノキ	
073	II-A D5 下層	Styrax japonica, S.et, Z	Cinnamomum camphora	
		イヌギヤ	エゴノキ	スモモ
		Cephalotaxus drupacea	Styrax japonica, S.et, Z	Prunus salicina
		ムクノキ	クスノキ	センダン
		Aphananthe asperata Planch	Cinnamomum camphora	Melia azadirach
078	II-A D5	ヤマモモ	クサキ	イチイガシ
		イヌギヤ	Clerodendron trichotomum Thunb	Quercus gilva Blume
		Cephalotaxus drupacea	Prunus persica	エゴノキ
		クスノキ	ソブラジイ	ジュズダマ
		Cinnamomum camphora	Castanopsis cuspidata	Coix lachryma-jobi
080	II-A D5 下層	センダン	エゴノキ	ムクノキ
		Melia azadirach	Styrax japonica, S.et, Z	Aphananthe asperata Planch
		Cinnamomum camphora	ヤマモモ	ジュズダマ
		クワノソウ	クサキ	Coix lachryma-jobi
		Corrus brachyoda C.A.Mey	Clerodendron trichotomum Thunb	ゴキズル
		スモモ	キンゴジヤ	ソブドウ
		Prunus salicina	Viburnum swabuki	Ampelopsis brevipedunculata
		アケミガシラ	コナムグサ	イヌギヤ
		Mallotus japonicus Maell Ake	Hemilus japonicus, S.et, Z	Cephalotaxus drupacea
		ヒヨウタン	ソブラジイ	
		Lageraria leucantha	Castanopsis cuspidata	
		コバンモナ	キカスウリ	マカワウリ
		Elaeagnus japonicus, S.et, Z	Trichosanthes cucumerifolia	Cucumis melo

第44表 湯刺遺跡出土の植物遺体 (その6)

資料番号	ラベル	植物遺体	推定時期
080	目-A D5 下層	サンショウ <i>Zanthoxylum piperitum</i>	
083	目-A D5 底	モモ <i>Prunus persica</i>	ウキヤガラノ地下茎 <i>Scirpus flaviatilis</i>
084	目-A D5 下層	サクラノ樹皮	*
085	目-A D5 第2層	モモ <i>Prunus persica</i>	クロマツ or アカマツ <i>Pinus spp.</i>
091	目-Z D5	ジュズダマ <i>Coix lachryma-jobi</i>	カスノキ ホルノノキ <i>Elaeagnus lewisii</i> <i>Syrax japonica</i> , S.et.Z
092	目-Z D5 第2層	ジュズダマ <i>Coix lachryma-jobi</i>	ゴキスル <i>Actinostemma lobatum</i>
103	目-Z附 D5 第2層	カスノキ <i>Cinnamomum camphora</i>	
121	目-YR34 D5 第2層	ジュズダマ <i>Coix lachryma-jobi</i>	
122	目-Y附 D5 第2層Y砂	マクワケリ <i>Cucumis melo</i>	
013	目-YXY1 ピート層下	ヤマモモ <i>Myrica rubra</i> , S.et.Z	
040	目-Y ピート層下	フクラジイ <i>Castanopsis cuspidata</i>	
047	目-YXY1 ピートY04E3X	カスノキ <i>Cinnamomum camphora</i>	カスノキ <i>Castanopsis cuspidata</i> Sell var. <i>sieboldii</i> Nak フクラジイ <i>Castanopsis cuspidata</i>
065	目-YF30 XY1 第2層砂	ゴキスル <i>Actinostemma lobatum</i>	クマハシイ <i>Psittaculus</i> <i>Quercus spp.</i>
		モモ <i>Prunus persica</i>	イヌガヤ <i>Cephalotaxus drupacea</i>
		イチイガシ <i>Quercus gliva</i>	ジュズダマ <i>Coix lachryma-jobi</i>
069	目-YXY1 ピート層下	モモ <i>Prunus persica</i>	ヤマモモ <i>Myrica rubra</i> , S.et.Z
		クマハシイ <i>Castanopsis cuspidata</i>	
		クマハシイ <i>Psittaculus</i>	

第40表 游納遺跡出土の植物遺体 (その7)

資料番号	ラベル	植物遺体	種名	推定時期
045	I区 651 第5層	ユズノキ Styrax japonica S.et.Z	クスノキ Cinnamomum camphora	イナキガシ Quercus gilva
062	井堀 143枚付迄	モモ Prunus persica	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	エゴノキ Styrax japonica S.et.Z
		クスノキ Cinnamomum Camphora	ヤマモモ Myrica rubra S.et.Z	ワブタソライ Castanopsis cuspidata
		アシ Phragmites Communis	ウキヤガラ Scirpus flaviatilis	不明
007	井堀 007のF	モモ Prunus persica		不明
086	1-P.A.15 第1層(灰層)上下	モミノ葉 Firmis	スギ科の地下茎	
087	1-P.A.15 第2層下砂層	スタジイ Castanopsis cuspidata Seii var sinoboldii Nak	モミノ葉 Firmis	
082	1-VAライン	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	ヒョウタン Lagenaria leucantha	ムクノキ Aphananthe aspera
		マクワウリ Cucumis melo	ゴキスル Actinostemma lobatum	クマノミツバ Cornus brechypoda C.A.Mey
		クスノキ Cinnamomum camphora	シキミ Illicium anisatum	Quercus sppの子葉
054	1-VAライン 第3層	モモ Prunus persica	エゴノキ Styrax japonica S.et.Z	イヌガヤ Cephalotaxus drupacea
048	1-V ピート層内	ユズノキ Styrax japonica S.et.Z	ヤマモモ Myrica rubra S.et.Z	ゴキスル Actinostemma lobatum
		ゴングイ Encaphis japonica Kanitz	ワブタソライ Castanopsis cuspidata	ワキハシライ Fenzlia
066	1-U.P.26 第3層	モモ Prunus persica	ヤマモモ Myrica rubra S.et.Z	エゴノキ Styrax japonica S.et.Z
		イヌガヤ Cephalotaxus drupacea	ヒョウタン Lagenaria leucantha	マクワウリ Cucumis melo
084	1-Z033 在 穴	モモ Prunus persica		
089	1-X西 pit	カシノ葉 Quercus spp		
100	1-Z E 2	アラカン Quercus glanched Thomb		

古墳時代初期

古墳時代初期

縄文時代

弥生時代前期

弥生時代前期

弥生時代前期

第 3 今宿大塚南遺跡

福岡市西区今宿所在遺跡の調査 その1

本文目次

1. 調査の概要	78
(1) 今宿大塚南遺跡 (A地点)	78
(2) 今宿大塚B地点	78
2. 遺跡の位置	79
3. 遺構と遺物	79
(1) 検出遺構	79
(2) 出土遺物	80
4. むすび	81



第15圖 今宿付近地形圖 (縮尺1/5000)

第3 今宿大塚南遺跡

1. 調査の概要

(1) 今宿大塚南遺跡 (A地点)

調査は、1974年1月18日から2月4日までの18日間に実施し、130㎡を試掘した。本遺跡の調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課 技師 栗原和彦

馬田弘毅

なお、調査補助員として、岩永司、また明治大学生関晴彦・福岡大学生佐藤保雄・三津井知廣の協力があつた。

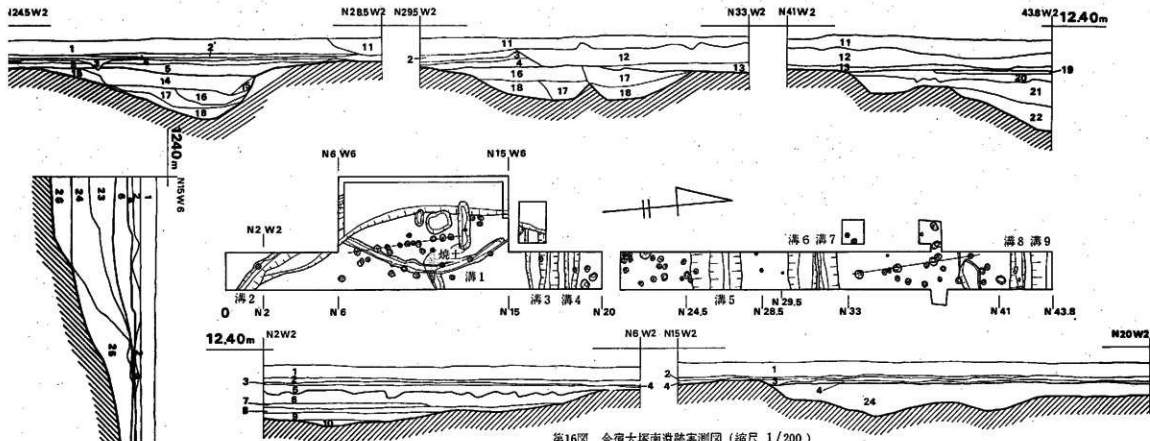
国指定史跡大塚古墳(1967年12月15日指定、前方後円墳)が調査地点の北側にあり、周溝部分の水田は、福岡市が買収していたため、それに南接する水田(A地点)にトレンチを設定した。しかし、バイパス建設予定地ではあるが未買収であるため、トレンチの拡張およびその掘り下げは最小限度なものとなり、作業進行は困難をきわめた。開田時に東側部分は大きく地山が削平されているので、水田の西側寄りに南を原点0として、北にN44まで、西にW2まで、1mごとに区切り、幅2m・長さ44mの第1トレンチを設定した。その後、遺構の検出に従って拡張区を5箇所設定した。

A地点では、明確な遺構は少なくピット列が2例その他であるが、遺物の散布もあり、前述の古墳が、通称「今宿大塚」として著名であるので、「今宿大塚南遺跡」とした。

(2) 今宿大塚B地点

A地点の調査中の2日間で、試掘を行なった。B地点北側の畑地での表採で弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器の破片が多く認められたため、当初はこの畑を調査地点に選んだ。しかし、一部の試掘で耕作土下25cmですぐ地山層であることを知り、現在イモ畑として使用されて借地も困難であるため、B地点となった。

B地点は雑草地で、3本のトレンチを設定した。その結果、表土下15cmですぐ地山層に至り削平が著しく、遺構は存在しなかった。



第16図 今宿大塚南遺跡実測図 (縮尺 1/200)

- | | | | | | |
|-----|---------------------|-----|---------------------|-----|-----------------------|
| 1層 | 現水田耕作土層 (砂流り粘質土) | 11層 | 現水田客土耕作土層 (赤褐色細砂質土) | 21層 | 暗褐色土層 |
| 2層 | 鉄分含植根土層 (灰褐色土) | 12層 | 旧水田耕作土層 (1層に類似) | 22層 | 暗褐色粘質土層 |
| 3層 | 厩 (青灰褐色土) | 13層 | 鉄マンガンを分含床土層 | 23層 | マンガンを分含土層 (褐色粘質土ブロック) |
| 4層 | 床土層 (褐色粘質土) | 14層 | 粘質褐色土層 | 24層 | 旧水田耕作土層 (細砂含灰色土) |
| 5層 | マンガンを分含床土層 (同) | 15層 | 暗褐色土層 | 25層 | マンガンを分含土層 (灰色粘質土) |
| 6層 | 旧水田耕作土層 (1層に類似) | 16層 | 茶褐色土層 | 26層 | 灰色粘質土層 |
| 7層 | 鉄分含植根土層 (2・3層に類似) | 17層 | 褐色土層 | | |
| 8層 | 床土層 (4層に類似) | 18層 | 粘質暗褐色土層 | | |
| 9層 | マンガンを粒小含床土層 (5層に類似) | 19層 | 黄褐色土層 | | |
| 10層 | マンガンを粒大含層 (5層に類似) | 20層 | 灰色土層 | | |

0 2m

2. 遺跡の位置 (第15図)

本遺跡は、福岡市西区今宿に所在する。糸島平野の東端部にあたり、南方の高嶺山の裾部から北方に伸びる数多い低丘陵の1つの端部に立地する。標高は、12.20mであるが、丘陵西斜面を削平によって開田化されたものである。すぐ北側には、前述の前方後円墳が所在し、表探でも弥生期以降の各種遺物が認められるが、古墳の封土内からも土器片が採集される。

3. 遺構と遺物

(1) 検出遺構 (第16図)

1号ピット列

N17W2～N12W3にかけて、N-4°-W方向で4.95mの間に10個の柱穴様小ピットが検出された。径35cm前後・深さ約40cmの掘り方で、径約20cmの抜き跡を明確に示すものがあり、杭あるいは欄列か。

2号ピット列

N33.5～N39.5にかけて、N-4°-W方向で心間198cmの4個の柱穴様小ピットが検出された。径40cm前後・深さ40～50cmの掘り方で、径約30cmの抜き跡を示している。掘立柱建築物の可能性を考えて東西に3個所の拡張区を設定したが、規則性あるピットは出土しなかった。杭あるいは欄列か。

柱穴様小ピット

N19～N25およびN35～N41付近で特に集中して検出されたが、まとまりのあるものではなかった。

焼土

N10.5～N12.5にかけてその分布が認められたが遺構に伴うものであるかは不明である。

土層断面図

溝1

N2W2～N6W6の断面図で、6層の下から検出されており、6層の旧永田に伴うものであろう。

溝2

N15W2～N15W6の断面図で、6層が前述の断面図にも確認されているが、23層の客土で

24層の旧水田を埋めており、この旧水田に伴うものであろう。

溝3・4

N15W2～N20W2の断面図で、24層で埋没しているが粘質であり、N15W2～N15W6の24層の旧水田とは別の旧水田に伴うものであろう。

溝5

N24.5W2～N28.5W2の断面図で、現水田床土の5層下で検出されたが、14層で5層が若干凹んでおり、また溝6・7と平行するから、旧水田に伴うものであろう。

溝6・7

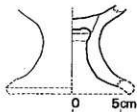
調査時は、1単の水田であったが地籍図では南北に2筆に記入されており、その畦畔がN29.5W2～N33W2の12層が北側の旧水田にあたるものと思われ、11層を客土したものであろう。したがって、溝5・6は旧水田に伴うもので、遺構ではないと判断した。

溝8・9

N41W2～N43.8W2の断面図で、21層は暗褐色を呈しマンガン粒等が顕著ではないが、20層は灰色を呈し水田耕作土に類似しており、旧水田に19層を客土して12層の水田が拡張されたものであろう。したがって、この客土前の畦畔に伴うものと考えた。溝9は、底面レベルが前方後円墳東側周溝内の水田床土とほぼ一致する。この溝の肩まで周溝南端部がのびていたものとすれば、22層の埋土を切って周溝内に水田が開かれたことになるが、北側周溝の規模からすれば、溝9の肩はその範囲外となるが、周溝の一部であるかは、今後の発掘に待つべきであらう。

(2) 出土遺物

土器片は、水田耕作土中からも出土したが、柱穴縁小ピットからは、須恵器・糸切り底土師器・埴輪弁背磁器の細片が出土している。しかし、トレンチ調査であり、遺物からの出土遺構の時期決定にまでは至らない。



第17図 今宿大塚南遺跡出土遺物実測図(縮尺1/4)

なお、第17図に示した土器は、南拡張区で出土した弥生後期の土器脚台部片である。遺構に伴うものではない。石英砂粒を多く含み、焼成は普通で、赤褐色を呈し、底部は黒褐色をなす。

4. む す び

今回の試掘によって、ピット列が2例と9条の溝が検出されたが、遺構と言えるものはピット列のみであり、出土遺物からすれば鎌倉期の生活遺構が考えられるが、削平により消滅したものであろうか。また弥生期から古墳期にかけての遺物も出土するので、周辺にその遺構の存在が考えられるが、造或が著しく消滅したものであろうか。また、前方後円墳の南側周溝群については溝9との直接の関連性はないようである。しかし、丘陵の東・西側の谷水田を考えれば、古代における生活遺構の存在は十分に考えられる適地をなしており、前方後円墳の糸島平野部における所在もこのことを考えねばならないであろう。

第 4 今宿高田遺跡

福岡市西区今宿所在の遺跡の調査 その2

本文目次

1. 調査の概要	83
2. 遺跡の位置	83
3. 遺構と遺物	83
(1) 検出遺構	83
(2) 出土遺物	85
(3) その他の遺構と遺物	86
4. むすび	89

第4 今宿高田遺跡

1. 調査の概要

調査は、1974年1月28日から2月16日までの19日間に実施し、96㎡を試掘した。本遺跡の調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課 技師 栗原和彦
 “ 馬田弘稔

なお、調査補助員として、岩永司の協力があつた。

幅2mのトレンチ3本を設定し、弥生時代後期後半の溝状遺構1条・柱穴様小ピット6個が出土し、溝中から多数の土器片が検出された。

2. 遺跡の位置(第15図)

今宿大塚前方後円墳と同一丘陵上の、水田化された東側傾斜面に位置する。大塚南遺跡は、褐色粘質土を地山とするが、本遺跡は、花崗岩パイラン土層上に立地する。

3. 遺構と遺物

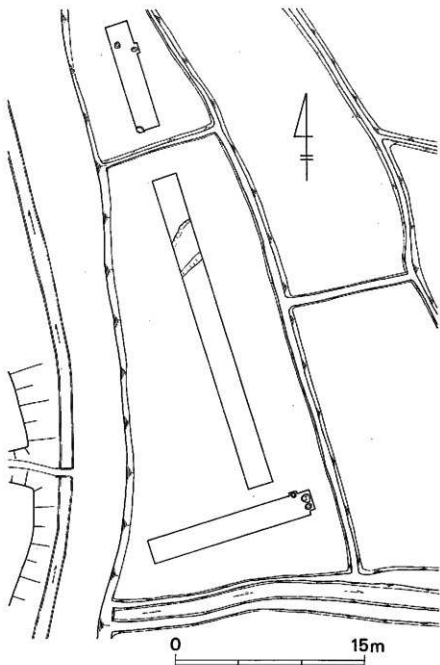
中央のトレンチ内で、東西方向に伸びる溝状遺構を検出したが、その両端は未掘である。

(1) 検出遺構

溝状遺構 (第18・19図 図版12・13)

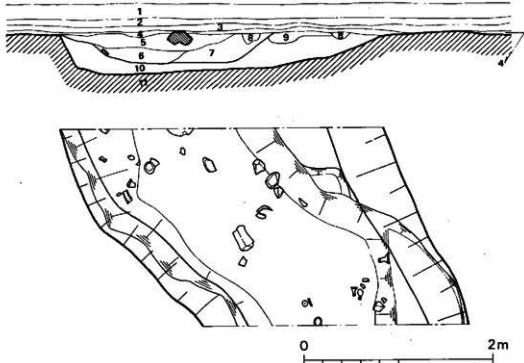
第2トレンチ内で出土し、現水田で削平されている。現存上幅3.10~2.6m、底面幅2.2~2.7mを測るが、その後現存上幅1.6m・底面幅1.2m前後の縮小された溝が第9・10層を切っ

て再度設けられている。当初の溝の深さは現況で0.4m、次のそれは0.3mを測る。なお、底面レベルは東西ほぼその差がみられない。



第18図 今宿高田道跡平面実測図 (縮尺1/300)

12.60m



第19図 今宿高山遺跡第2トレンチ内溝状遺構・遺物出土状態同断面図(縮尺 1/2)

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1層 水田耕作土層(暗灰色) | 7層 遺物包含土層(暗茶褐色) |
| 2層 同 (灰白色) | 8層 灰白色砂層 |
| 3層 床土暫移土層(灰白黄褐色) | 9層 茶褐色砂層 |
| 4層 床土層(黄褐色花崗岩砂) | 10層 遺物包含土層 |
| 5層 遺物包含土層(暗褐色) | 11層 地山層(灰白色花崗岩・バイラン砂) |
| 6層 同 (灰暗褐色) | |

(2) 出土遺物(第20・21図)

高杯 1~4 1は磨滅が著しく、焼成が悪く白褐色を呈し、砂粒を若干含む。屈折部周残 $\frac{1}{4}$ からの復原屈折部径18.6cmを測る。2は杯部内面は丁寧なナデを施すが、脚部内面はシボリ目成形痕をそのまま残し、脚屈折部内面はヨコナデを施す。器外面は磨滅が著しい。胎土は精製されているが、焼成が悪く白褐色を呈す。3は杯部外面はハケ目状整形後丁寧なナデ

調整を施す。脚部外面は一部に整形痕を残す。脚部内面はシボリ目成形後指先で丁寧にナデ整形を施し、屈折部に3箇所の穿孔を有す。石英砂粒を多く含み、焼成は普通で、赤褐色を呈す。4は器外をタテ方向に丁寧に研磨し、器内上部は指先でタテ方向にシボリ目成形痕をナデ整形する。砂粒を多く含み、焼成は普通で、赤褐色を呈す。穿孔は3箇所に認める。

小形鉢5～8 5は磨減が著しく整形は不明であるが、胎土は精製されている。焼成は悪く、器内褐色・器外黒褐色を呈す。口縁器周残 $\frac{1}{4}$ からの復原口径15.6cmを測る。6・7も磨減が著しく、 $\frac{1}{4}$ 弱器周残からの復原口径16.0cm・19.2cmを測る。8は器内をヨコ方向ハケ目状整形後ナデ調整を一部施す。器外は丁寧に調整する。口縁上端は、ヨコナデにより若干凹んだ平坦面をなす。石英砂粒を含み、焼成は良く、灰褐色を呈す。器周残 $\frac{1}{4}$ 弱からの復原口径は19.4cmを測る。

壺9 埴に近い器形と思われ、内面に一部密なハケ目状整形痕を残す以外は丁寧にヨコナデ調整を施し、また器壁も薄く仕上げる。精製胎土を使用し、焼成は普通で、赤褐色を呈す。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復原口径は13.4cmを測る。

器台10～12 10は内外共にナデを丁寧に施し、焼成は普通で、褐色を呈す。11・12は共にタタキ成形痕を残すが、シボリ成形痕を残さず丁寧にナデ調整を施す。11は器外、12は器内に密なハケ目状整形痕を残す。11は口径8.0cm、器高12.6cmを測り、砂粒を含み、焼成は良く暗褐色を呈す。12は口径10.8cm、器高13.1cmを測り、石英砂粒を多く含むが、焼成は良く、褐色を呈す。

タコ壺形土器15 器内底部近くは指押し成形痕をそのまま残すが、それ以外はナデ整形を全体に施す。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復原口径は9.7cmを測り、石英砂粒を多く含み、焼成は普通で、淡褐色を呈す。

脚部片16 内外共に丁寧にナデ整形を施し、胎土は精製され、焼成は普通で、褐色を呈す。脚台付域か。

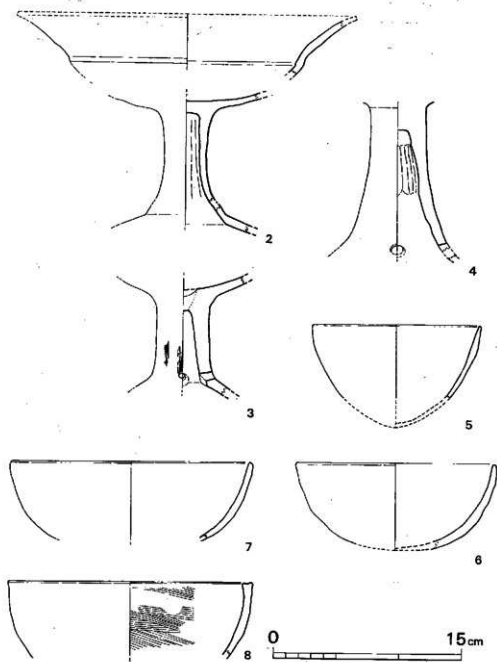
異形土器13 内面は磨減が著しく、外面はナデを丁寧に施す。砂粒を含むが、胎土は精製されており、焼成は良く、器内褐色・器外黒褐色を呈す。

その他に底部片19が出土している。

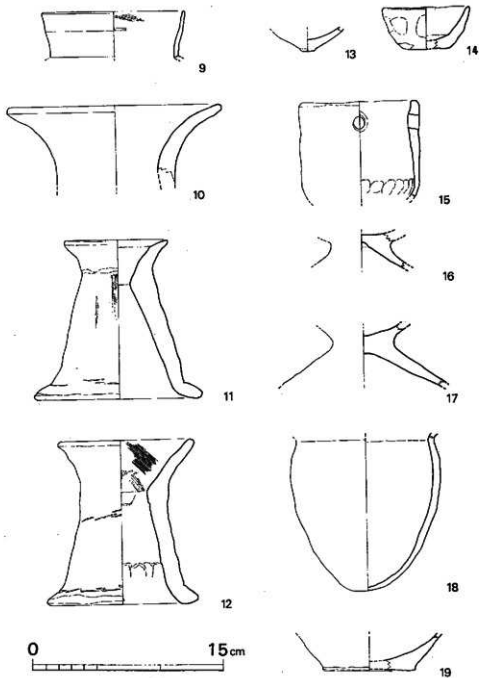
以上の遺物で、1・3・4・6～8・10・13・19は下層の10層から出土し、その他は上層の5～7層から出土したものである。9は土師器と思われるが、下層の土器と上層の土器にはほぼ新旧関係が認められ、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

(3) その他の遺構と遺物 (第21図 図版12-1)

第1・3トレンチで各3個の柱穴椽ビットが検出された。



第20図 今宿高田遺跡第2トレンチ溝状遺構出土土器実測図（縮尺1/3）



第21図 今宿高田遺跡第2トレンチ溝状遺構 (9~12,15,16,19) 第3トレンチ (14,17,18)

手捏形土器14 第3トレンチ東壁側ピット出土で、内面はナデを施す。外面は指押え成形痕をそのまま残す。砂粒を含み、焼成は良く、器内灰褐色・器外黒褐色を呈す。口径7.0cm、器高3.4cmを測る。

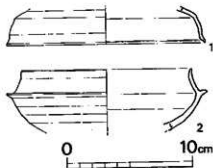
脚部片17 第3トレンチ西壁側ピット出土で、器内はハケ目状整形痕をほとんど認めぬほどにナデ調整を施し、器外はヨコナデ整形後、ヘラ研磨を施す。精製胎土を使用し、焼成は良く、赤褐色を呈す。丁寧なつくりであり、脚台付塊か器台と思われる。

小形甕18 第3トレンチ南壁のピット出土で、底部内面は指押え成形痕を残し、胴部はナデ整形を施す。器外はタテ方向ハケ目状整形痕を一部に残すが、上半部は丁寧にナデ調整を施す。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復原頭部径は11.0cmを測り、底部は丸底で、器高15cm前後を測る。砂粒を含み、焼成は良く、黒褐色を呈す。

須恵器 (第22図)

水田耕作土中から出土した。1は砂粒をあまり含まず、焼成は良く、器内灰白色・器外暗灰色を呈す。器周残 $\frac{1}{4}$ の復原口径15.9cmを測る。

2は、砂粒をあまり含まず、焼成は良く、器内灰白色・器外青灰色を呈す。器周残 $\frac{1}{4}$ の復原口径13.5cmを測る。



第22図 今宿高田遺跡表採遺物実測図(縮尺1/3)

4. む す び

調査地点は、東側の谷水田から所謂カナクソが出土するとのことであった。また、土壌が花崗岩・パイラン土であったので、製鉄関係の遺構の検出の可能性を考えた。しかし、耕作土中からの鉄滓は出土したが、遺構に伴うものは検出されなかった。溝状遺構については、弥生後期後半に属するものであるが、その全容を知り得ない一部の試掘のみにとどまっている。しかし、遺物の出土状態は、上層と下層に分離され、新旧関係が認められる。今後の本調査の結果を待ちたい。

第 5 今宿小塚遺跡

福岡市西区今宿笠掛所在遺跡の調査

本文目次

1. 調査の概要	91
(1) 今宿小原遺跡(A地点)	91
(2) 今宿小塚B地点	91
(3) 今宿小塚C地点	91
2. 遺跡の立地	93
3. 遺構と遺物	93
(1) 検出遺構	93
(2) 出土遺物	93
4. むすび	96

第5 今宿小塚遺跡

1. 調査の概要 (第15図)

(1) 今宿小塚遺跡 (A地点)

調査は、1974年2月4日から3月2日までの26日間に実施し、150㎡を調査した。本遺跡の調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課 技師 栗原和彦
 " 馬田弘稔 (現場担当)

なお、調査補助員として、岩永司、また明治大学生調晴彦・福岡大学生佐藤保雄・三津井知廣の協力があつた。

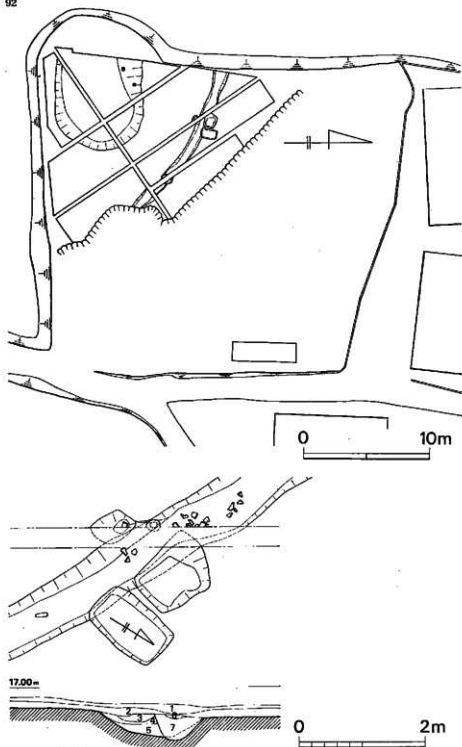
事前の分布調査で、須恵器の散布が認められていたが、北半部はブルドーザーによって大きく土取りがなされており、残りの南半部を全面調査し、古墳の周溝の一部と思われる溝状遺構を検出し、その埋土中から多数の須恵器破片を出土した。

(2) 今宿小塚B地点

A地点の調査中の数日間、試掘を行った。今宿小塚遺跡の立地する丘陵は宅地化が進み、残された数少ない畑地で、丘陵東側の調査部分として、幅1.7mのトレンチを3本設定した。発掘面積は45㎡あるが、耕作土下はすぐ地山層に接しており、遺構・遺物の出土はなかった。

(3) 今宿小塚C地点

A地点の調査期間中の1日で、試掘を行った。A地点の南隣り、約2m下の畑地で、以前磁筒が出土したとの作業員の話で、1㎡を試掘したが、耕作土下はすぐ地山層で、その確認はできず、また遺物の出土もみなかった。



第23圖 今宿小塚遺跡地形圖(縮尺1/300)・周溝実測圖(縮尺1/60)

2. 遺跡の立地

調査地点は、南から北にのびる丘陵上にあり、今宿大塚南遺跡の立地する丘陵とは約370m西側に谷水田をはさんで指呼の間にある。この丘陵以西の同様の丘陵上には若八幡前方後円墳等が位置し、分布調査でも須恵器の散布が認められており、古墳等の存在が予期される場所である。

3. 遺構と遺物(第23図)

(1) 検出遺構

溝状遺構は弧状に約13mの長さまで発掘した。東端は、土取りと南側の一段低い削平された畑地で破壊されている。また西端は、緩斜面となって消滅するものと考えられる。現況は竹藪となっていたが、以前桃園として利用されており、溝状遺構の3箇所長方形ピットの移植時の掘乱穴が認められる。溝の上面幅は80cm前後、床部幅は50cm前後を呈し、床面レベルは東端よりも西端が約40cm低い。

遺物は溝中でも特に出土状態を円示した地点で多く出土し、3層から5層にかけて出土した。調査区内の南西部に7×7m程の西方向に緩傾斜した凹地が検出され、黒褐色土層で埋没していた。調査区外の南西部の地形はコンターが若干西側に張り出しており、この凹地から石材等は検出されなかったが、西方向に開口する径30m前後の円墳が後世の削平で消失したものと考えられる。

(2) 出土遺物(第24～26図)

溝状遺構内からは弥生時代の今山製玄武岩の太形始刃石斧が流入していた以外は、すべて須恵器で、円示した以外にも多数出土している。

杯蓋 **1** 天井部と体部の境に稜を有し、口縁部内面には若干ゆるい段を有する。他に同種の破片が1例出土している。

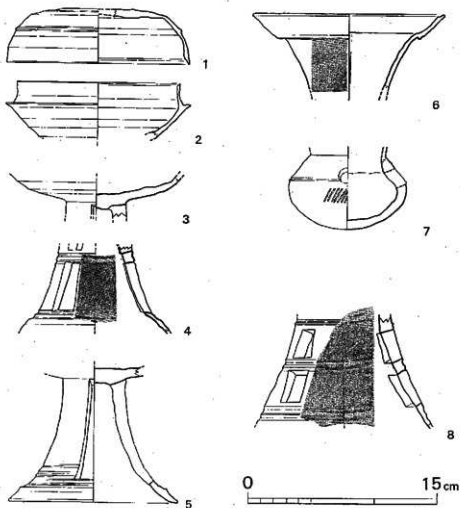
杯身 **2** 1.7cmと大きい立ち上がりの内面はシャープさが認められる。

高杯 **3～5** **3**は長方形透孔が3箇所認められる。**4**は2段長方形透孔が3箇所認められ、下半部は波状文を施す。**5**は1段長方形透孔が3箇所認められる。

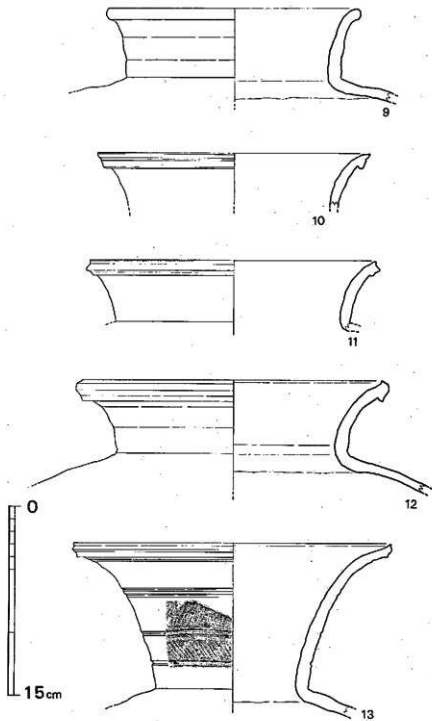
題6・7 6は頸部と口縁部に段を有し、口唇部内面にはシャープな稜を認め、口縁外面および頸部外面には波状文を施す。7は胴部やや上方部に1条の沈線を施し、下半部に斜方向刺突文を施す。

脚台部片 8 現在2段の長方形透孔が3箇所確認できる。沈線は3箇所1～2条施し、この間波状文を施す。

壺13 大きく外反する長い口縁形に対して、頸部径は12.2cmと小さい。口唇部は古式のシャープさを十分に有す。口縁部外面は、1～2条の平行沈線を4箇所施し、その間を波状文で装飾する。口径は25.5cmを測る。

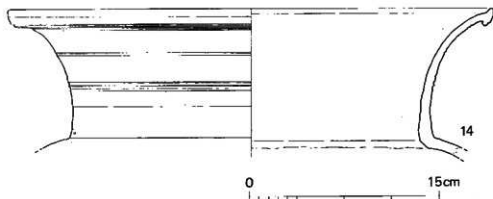


第24図 今宿小塚遺跡周溝内出土遺物実測図(その1)(縮尺1/3)



第25図 今宿小塚遺跡周清内出土遺物実測図(その2) (縮尺1/3)

寛 9~12・14 9 は立ち上がり気味に外反する口縁形を呈し、口唇部は丸味をなす。内外に自然釉をみる。器周径 $\frac{1}{4}$ の復原口径は20.3cmを測る。10~11は直線気味に外反する口縁形を呈し、口唇部に1~2条の平行沈線を有し、シャープに仕上げる。 $\frac{1}{4}$ 器周径の復原口径は、それぞれ21.7cm・23.4cmを測る。12は口縁端部が上下に引き伸ばされ、器周径 $\frac{1}{4}$ 強の復原口径は20.5cmを測る。14は立ち上がりつつ外反する口縁形を呈し、口縁端部は上下に引き伸ばされているがシャープさが無い。1~2条の平行沈線を3箇所に施す。復原口径は、51.4cmを測る。



第26図 今宿小塚遺跡円溝内出土遺物実測図(その3) (縮尺1/4)

4. む す び

出土した遺物の中で、杯類および臍口縁部片はⅢA期の古い特徴を有している。また壺はより古い姿をとどめている。これに対して臍胴部片は若干新しい様相を示している。器種としては高杯・臍・器台部片・大形壺などを含み、出土した溝状遺構も弧状を呈することからして、ⅢB期に径30mを越える円墳が築造された可能性が強く指摘されよう。

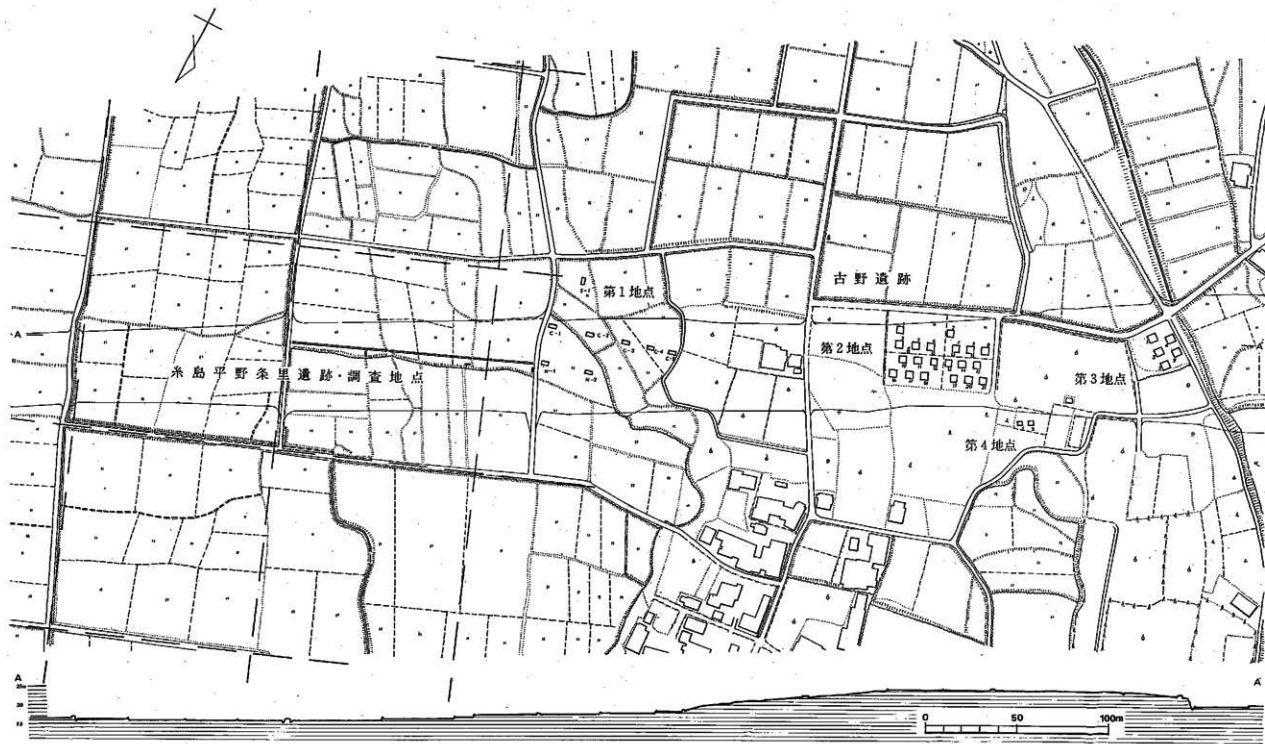
なお、溝状遺構内の流入遺物として、今山製玄武岩の太形蛤刃石斧が出土したことは、第1図に示した原産地の今山を望むこの丘陵の、弥生期の立地上、単なる一資料の提示にとどまらないであろう。

第 6 糸島平野の条里遺構の 調査と古野遺跡の調査

糸島郡前原町所在の遺跡

本文目次

1. 糸島平野の条理遺構の調査	97
(1) はじめに	97
(2) 地図上で見た糸島条野の条理遺構	97
(3) 発掘調査	97
2. 古野遺跡の調査	99
(1) はじめに	99
(2) 調査の経過	99
① 第1地点	100
② 第2地点	100
③ 第3地点	103
④ 第4地点	103
3. 出土遺物	103



第27図 糸島平野の糸里遺跡発掘調査地点 (縮尺1/2000)

第 6 糸島平野の条里遺構の調査 と古野遺跡の調査

1. 糸島平野の条里遺構の調査

(1) はじめに

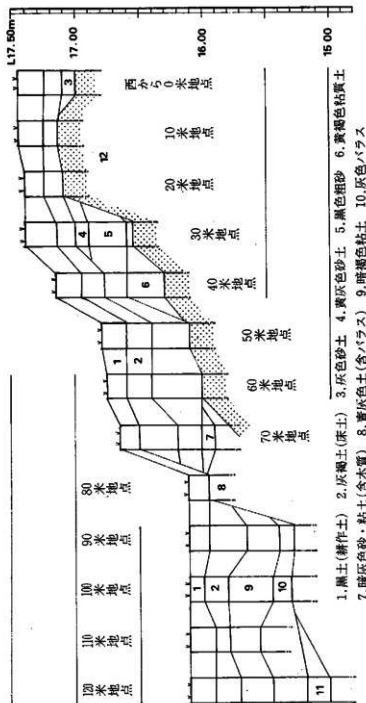
1971年度の九州地方建設局との依託契約に糸島平野の条里遺構の発掘調査が入っていた。夏期に大又・高崎古墳群の調査を実施したため、水田が休耕する冬に発掘調査の予定を組んでいた。この年は、11月末から福岡市西区・湯納遺跡の調査を開始していたし、当初は湯納遺跡の調査を年度内に完了する計画でいたので12月1日より、平行した1週間の発掘調査計画で栗原がトレンチ調査を実施した。発掘調査地点を古野遺跡の東隣に決めたのは、条里遺構の西限付近と思われたからである。

(2) 地図上で見た糸島平野の条里遺構

地図は、九州地方建設局作成5,000分の1の地図である。この地図では平野全体が入っていないので検討上に問題を残すが、ほぼ方位は、 $N-20^{\circ}-W$ くらいに計り出される。範囲は、耕地整備や圃場整備事業などにより多少の変化はあるが、東は高祖山の山麓をとおり県道曲淵、周船寺線のあたりまで、さらに高祖山の北にまわりこんで、福岡市西区今宿の女原と北原を結ぶ線あたりまでとなるようだ。北は、北原・板持・田崎・本村を結ぶあたりまで、西は、本村・篠原・原田・有田・葦持・三坂あたりまで、南は、三坂・高上・山北・子我鹿・西堂・末永あたりの山つきまでと想定される。現在、国鉄筑肥線の北側は、耕地整理がかなりいきとどいているが、条里制の方位は維持しているようである。また平野南半部は、日向峠から流れる瑞梅寺川、雷山方面からの雷山川の氾濫によってかなり大きく変化しているようだ。地図上の検討もここまでで、いわゆる字名を検討しながら坪並の復元などは今後の問題としたい。なお早良平野の条里制について $N-10^{\circ}-W$ が測り出されていて、その基準線が国鉄姪浜駅裏の五塔山から、背振山の峰への見透しの線を推定されているように、糸島平野の条里も背振の峰を一方の基準にとっているのかもしれない。

(3) 発掘調査 (第27図, 図版17・18)

このように何条何里はおろか坪並の検討もないまま、長さ127m、巾1mのトレンチと3本の短いトレンチを糸島郡前原町大字有田223・224番地の条里遺構推定一区割の中央部に入れ



第26図 糸島平野の糸田遺跡調査地点土層柱状様式図

た。この部分は灌漑用水路の蛇行により地形に若干の変化がみられるところなので畦畔や用水路が埋没していれば、発見出来る可能性があると考えたからである。トレンチは地山面をつかまえるまでを目的に深さ平均80cm程まで掘り下げた。

結果は、第28図の土層柱状模式図に示す。土層の変化は観察出来たが、糸里遺構の坪並を示すような埋没した畦畔や、用水路は発見出来なかった。地山は灰白色の粘土層で、西から40mを越えるあたりから青味をおびてきている。80m付近で植物遺体を含む砂層と粘土層が互層になって見られ、遺物の包含は他の土層の土中でも希薄であるが、7層中には含んでいないようであった。

このような状況は、8層（バラス面をもつ部分がある）、9層（1部で木質を含む）でも見られたので、糸里関係の遺構が埋没しているならここまでの土層で発見出来るはずのものと判断された。出土遺物は、若干の点数があるが古野遺跡の遺物と合わせて後にゆずりたい。

なお、糸島平野の糸里遺構の調査はこれで終了したのではなく路線建設工事前、地図上の検討・整理をもとに再度発掘調査を予定している。

2. 古野遺跡の調査

(1) はじめに

1971年になりこの地区で1部路線の計画変更が行なわれたので5月に分布調査をやりなおした。この時に、'68年の分布調査実施地区の13地点ほどの遺物散布状況は見られないまでも地形的には低湿地から一段登った低い丘陵で格好の生活条件をそなえた場所と判断された。

発掘調査は、6月に入り水田に稲を作付するまでの期間に遺跡の内容や保存状況などを知る目的で実施した。

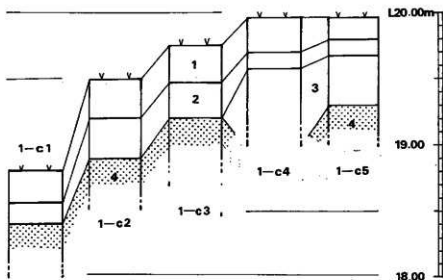
古野遺跡関係の調査者は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課

調査係長	藤井 功	技師	栗原 和彦 (現場担当)
技師	柳田 康雄		
補助員	桜井 康治	渡辺 和子	桑田 和義
	浦山 博子	鹿島 英世	

(2) 調査の経過 (第29図、図版19)

発掘調査は、分布調査後すぐに土地の借上げ交渉を開始し、掘りはじめたのは6月1日から水田に稲を作付ける関係から6月16日までの12日間わたっている。借り上げの出来た水田・畑は、丘陵が東西巾300mにわたっている場所の東側斜面の水田・丘陵中央部の水田・西



第29図 古野遺跡第1区土層柱状様式図
 1. 黒色土(表土) 2. 黄褐色土(床土)
 3. 暗褐色土(粘土) 4. 黄褐色土(地山)

斜面の畑地・墓地脇の空地の4つの場所である。これを東から第1地点、第2地点・第3地点と呼び墓地脇の空地を第4地点と呼ぶこととした。

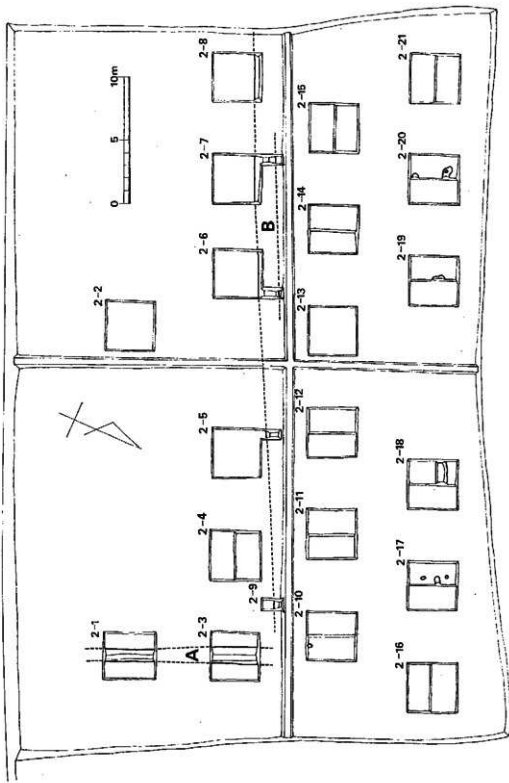
発掘調査を実施した場所は、糸島郡前原町大字有田および大字篠原で、有田228他6筆の水田と畑地である。

① 第1地点

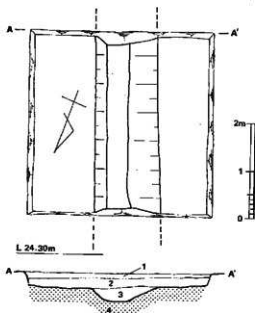
すでに1960年代にこの部分を開田するためにブルドーザーによって整地したとの土地の人の話があったが、水田が階段状に連なる部分に4m×2mのトレンチを東西方向に5ヶ所、(東からC1・C2……C5トレンチと呼ぶ)この北で2ヶ所(N1・N2トレンチと呼ぶ)また、南側に1ヶ所(S1トレンチと呼ぶ)の計8ヶ所を発掘した。この結果、古い遺構らしきものはまったくみつからないので土層の整理だけしておく。(第29図)C1・C2・C3・C5トレンチでは、地表下40~60cmで地山に達しているが、C4トレンチの西側を部分的に1.2mまで掘り下げても地山にあたっていないで近世の陶器片が出土した。地山の状況からC3~C5トレンチの間は約22mを隔るが、谷がこの間にあるものと予想され、C4トレンチの床土の下の土層はブルドーザーで運んだ客土と判断された。近世の陶器片もこの客土中のものである。

② 第2地点(第30・31・32図、図版20・21)

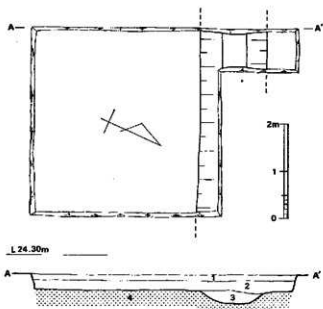
丘陵中央部の4枚の水田で畦畔にそわせて1辺4mの正方形の地区割を行って南東隅を基準に東西をアルファベットで南北を2桁の算用数字で表示することにしたが、発掘の進行するに



第30图 古钱津路第2区平面采掘区(缩尺1/300)



第31図 古野遺跡第2-3区実測図 (縮尺1/80)
 1. 黒土 (耕作土) 2. 灰褐色土 (地山)
 3. 暗褐色土 4. 黄褐色土 (地山)



第25図 古野遺跡第2-7区実測図 (縮尺1/80)
 1. 黒土 (耕作土) 2. 灰褐色土 (床土)
 3. 暗褐色土 4. 黄褐色土 (地山)

従ってグリットが2地区にまたがる状況が生れたので、各グリットを2-1・2-2……2-21と表示することとした。この結果、2-1・2-3区でN-26°-Wに方向をとる東西溝(A溝)と、2-9・2-5・2-6・2-7区でN-63°-Eに方向をとる南北溝(B溝)とが検出された。A溝もB溝もその検出状況は第30図に示すとおり床土下から掘り込まれている。A溝の2-3区の埋土中から近世の陶器片が見つかる。また、A溝・B溝は2-3区の北側で交差するならば2-10区にA溝が検出されなければならないが、検出されていないので2-3区北側で合流して東側に流れ出すようになっていたものと思われる。A溝・B溝の存在は、現在の水田よりも古い地割を示すものではあるが、出土した陶器の破片から考えても近世以前にはのほり得ないであろう。じつは、この水田の東方50mのところこの丘陵一帯が溜池の完成により大正年間に関田された

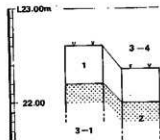
旨の記念碑があるので、A溝・B溝は、このおりに埋め込まれて水田として開かれたと考えるべきものと思われる。この地点では、A溝・B溝の他に2-17・18・19・20区に於て小さな穴などが検出されているが、いずれも床上直下の地山面から掘り込まれた不整形な穴で遺物も見つかっていない。

③ 第3地点 (第33図, 図版22)

丘陵の西斜面の畑地に一辺4mの正方形のグリットを設定し5ヶ所を発掘した。この畑は、地主の話によれば牛糞を作った畑であるとのことで地山まで深いと予想されたが、約40~50cmほどのグリットも地山に達した。傾斜地の為、地山は、西に低くなっており、その上土は、耕作土一枚であった。耕作土中に地山が塊状に混入しているのがごく最近の仕事と思われた。遺構・遺物はともに見つかっていない。

④ 第4地点

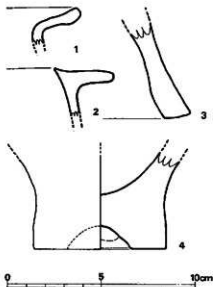
墓地の脇の空地に2×2mのグリットを2ヶ所を発掘したが、ここは近世に墓地として使用された場所であった。墓塚が3ヶ所に見つかり、骨片、珠数玉などがみつかった。



第33図 古野遺跡第3区土層柱状模式図
1. 黒土(耕作地)
2. 黄褐色土(地山)

3、出土遺物

糸島平野の条里遺構の調査と古野遺跡の調査で出土した遺物の量は2つあわせても図版に示した程度である。第34図は古野遺跡出土の弥生土器片である。この他にも形態の不明な破片が数片ある。1は、弥生中期の甕の口縁破片で内外面ともによこなでされている。胎土に砂粒を含むが焼成も良い。2も弥生中期の甕の口縁破片である。やや、鐘先状に近い形状を示している。内外面とも横なでで胎土に少量の砂粒を含むが焼成は良い。3は器台底部の破片と考えられるが時期不明。やや器面があれており整形などは不明。胎土に荒い砂粒を含み焼成もよくない。4は甕形土器の底部で、中期前半城の越式土器の特徴であるくぼみがある。胎土に多量



第34図 古野遺跡出土弥生土器片実測図(縮尺1/2)

の砂粒を含み、焼きもよくない。1・2・3は第3地点の表土より出土。4は第1地点の表土より出土した。この他には黒曜石片、青磁の小破片・近世の陶器片などの出土があった。図版の5・6は、黒曜石片である。いずれも剥片である。7は須恵器の破片で器形は不明。8・9は青磁である。8は底部内面の円圏に草花文と思われる文様がある。竜泉窯系のものであろう。9は珠光青磁である。10以下は近世の陶器片である。10は、白い釉のうえにややくすんだ青色の染付けが見られる。11は白色の釉がかかる。12も11に近いが白濁が釉に見られる。13は白地釉の上に染付けが残る底部で低い高台がついている。14は高麗青磁をまねたものであろうか白い粘土を象眼したうえに青濁する釉をかけている。15・16は白濁した釉を地にして染付けがされている。17は黄褐色の地に黒の鉄釉で格子状の文様がある。18・19は白色の釉のかかる小破片である。このなかで10・13が古野遺跡第2地点のA溝よりの出土。8・9・11・12・14は糸島平野の糸里遺構の調査の床土中に、5・6・7は、床土下の土層中から出土した。

第 7 上 鐘 子 遺 跡

糸島郡前原町大字篠原所在遺跡の調査その1

本文目次

1. 序	説	105
(1)	はじめに	105
(2)	第1次調査の概要	106
(3)	第2次調査の概要	106
2. 遺構と遺物		107
(1)	住居跡	107
(2)	溝状遺構	110
(3)	方形周溝	111
(4)	土塚墓	108
(5)	建物跡	109
(6)	溝	113

第 7 上 鎌 子 遺 跡

序 説

(1) はじめに

糸島郡前原町大字有田の三角形をした丘は、古野遺跡と同様に一部路線変更があり71年5月の分布調査の時にリストに登録された遺跡である。高校の実習園であって、茶畑が階段状に作られた後、手が入られないまま荒地となっていた。分布調査の時には頂上付近で黒曜石の破片なども採集されている。

第1次調査は遺構の有無保存状態などを調査する目的でつゆ明けをまって開始した。古野遺跡の調査が終って、水田の作付けが終りはじめた1971年（昭和46年）6月26日から7月14日の期間であった。この時に弥生後期の住居跡と及び、掘立柱の柱穴とが調査出来たため本調査を必要とすることとなった。第2次調査は、72年3月に'72年度の調査計画を九州地方建設局と打合せた折に発掘調査を終了するよう要請があったので、1972年（昭和47年）12月6日より1973年（昭和48年）2月12日まで調査を遂行した結果第1次調査で掘った地区の西側に密集した遺構群が検出された。なお、紙面の関係から、遺物については第6集に収録する予定である。

発掘調査の関係者は次のとおりである。

第1次調査（1971年）

調 査 員		田 坂 美代子
福岡県教育委員会文化課	調 査 係 長	藤 井 功
	技 師	栗 原 和 彦
	"	柳 田 康 雄
		(現場担当)
	調 査 補 助 員	坂 井 康 治
		肥 山 正 秀
		渡 辺 和 子
		桑 田 和 義
		木 太 久 守
		佐 藤 保 雄

第2次調査（1972年）

福岡県教育委員会文化課	課長技術補佐	藤 井 功
-------------	--------	-------

調査係長	松岡史
技師	栗原和彦
〃	上野精志
	(現場担当)
調査補助員	尾形桂子
	中尾徹

(2) 第1次調査の概要 (第35~37図)

伐採の作業から開始し、頂上部に基準点を置き、地形測量を行ったのち、磁北を基準にして北側斜面に1辺4mのグリッドを基準線の東側に組み、高いところから発掘調査を開始した。ここでは、発掘区の名称を便宜上、東から西に、高いところから低いところへの順で通し番号をつけることにする。1区では、炭化物が入った落ち込み、3区ではピットの中から土器の細片、5、7区ではピットの検出はあったが、性格は不明のものである。この部分は急傾斜の場所であり、遺構の存在は考えなくともよいものと判断された。9、10区あたりでやや緩傾斜になる。この部分で弥生中期~後期の土器の細片が出土したが遺構は削平をうけて浅いものであった。10区の北辺の線を西に延長して、延長線の北側に10区の北西隅から8m離して11区、4m離して12区、さらに4m離して13区を設定した。この結果、11区で溝が、12区で大きな柱穴列が、13区で住居跡の東南隅をみつけた。

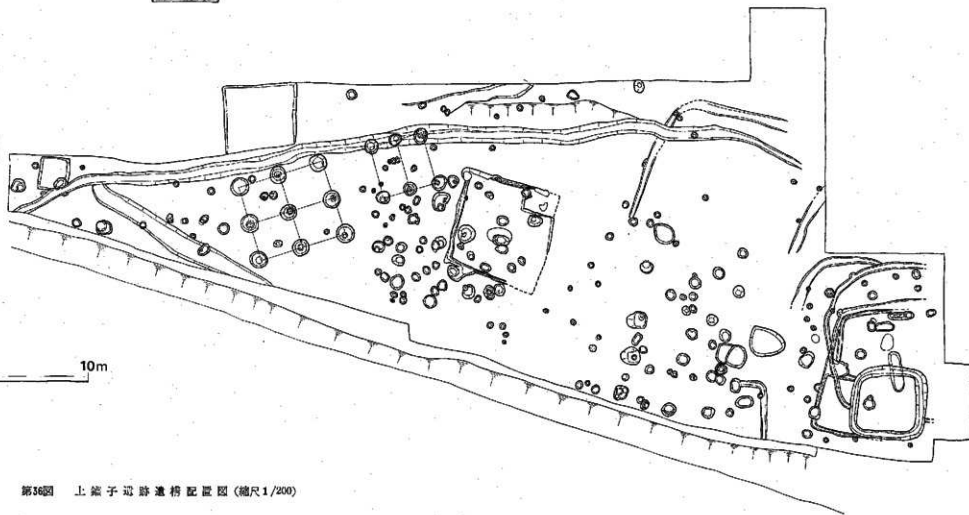
このため、11、12区を完全に掘り上げること、13区住居跡1軒分を掘り上げることにより、後は次回にまわすことにした。

(3) 第2次調査の概要 (第39~46図)

先の第1次調査における発掘調査結果に基づき、溝と柱穴列と住居跡が検出された丘陵斜面底位置の北斜面である11区、12区、13区を含んで全面発掘調査を実施する。9区、10区あたりでは遺構検出が無いので発掘調査を行わずに、丘陵斜面をよこ切る溝を境にして低位置の北斜面を集中的に発掘調査したものである。溝は第1次調査の検出溝より東西に拡張して掘り進め、柱穴列も全体プラン検出に蓄めた。さらに1号住居跡より西側に調査して行くと、方形溝や1号土壇基、住居跡などの検出が合つぎさらに西側斜面と考えたが、1号溝状遺構など削平されて検出されず調査を打ち切った。又溝についてもさらに西側に延びると思われるが、削平のため検出できない。溝の東側は現在道路により丘陵斜面が切られており道路工事の際に破壊されたと思われる。以上のように結果的に丘陵斜面をよこ切る溝より低位置の北斜面を全面発掘調査を行なったこととなる。

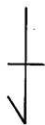
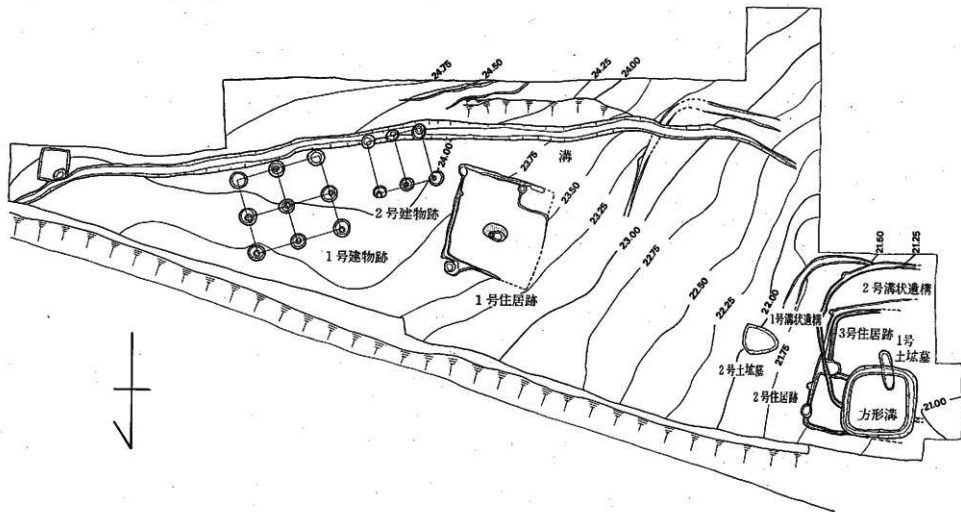


第38圖 上矽子遺跡周辺地形圖(縮尺1/2000)

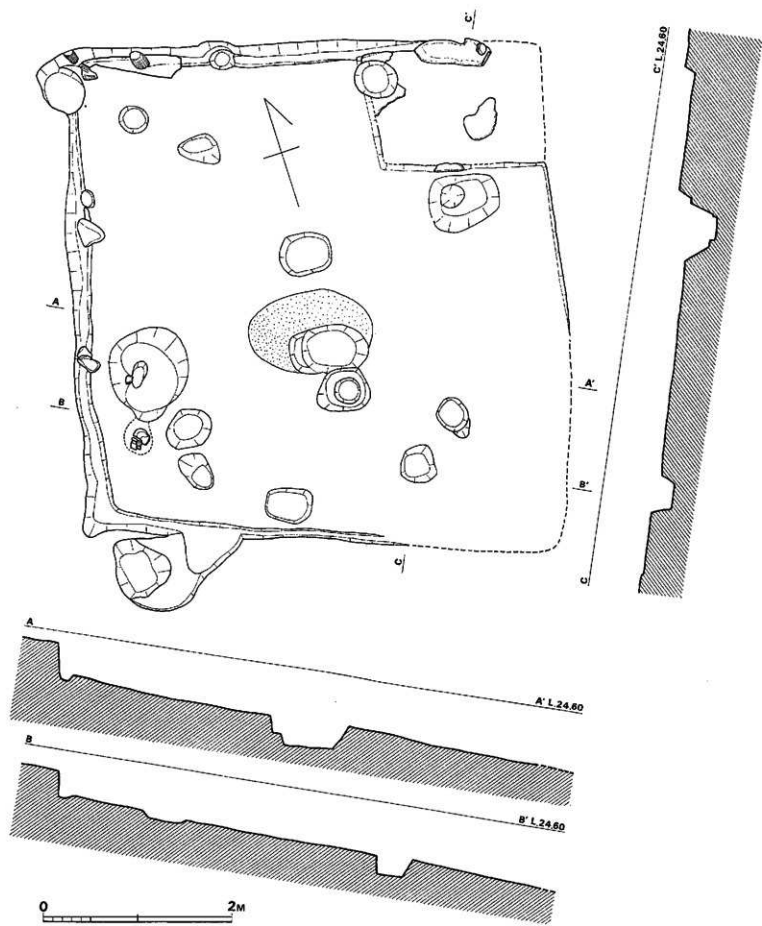


0 10m

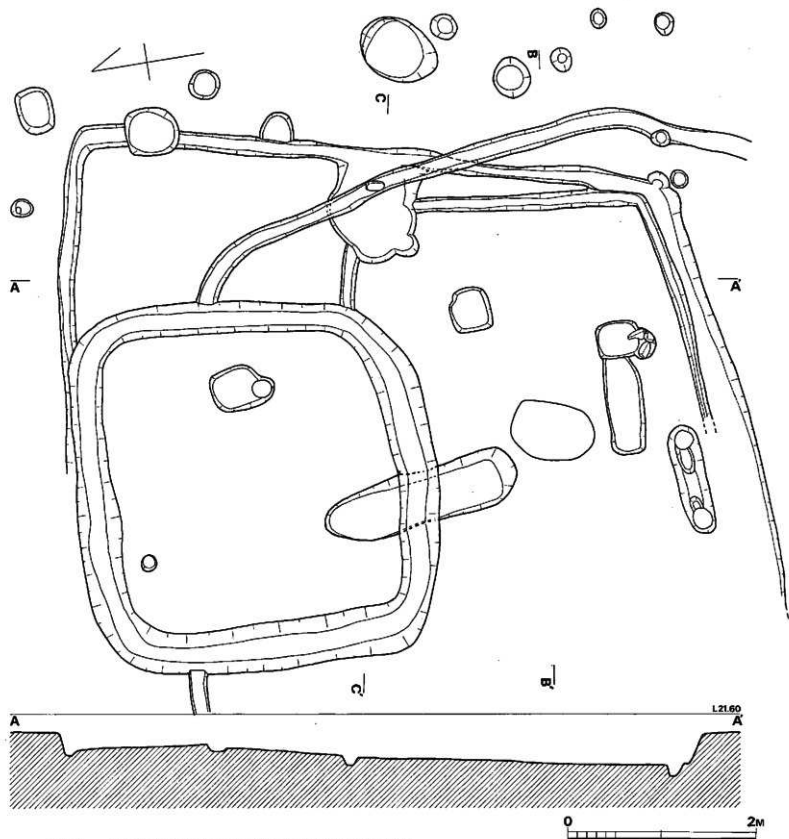
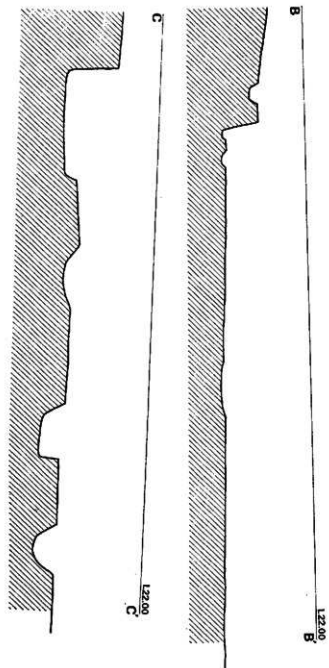
第36圖 上館子司跡遺構配置圖(縮尺1/200)



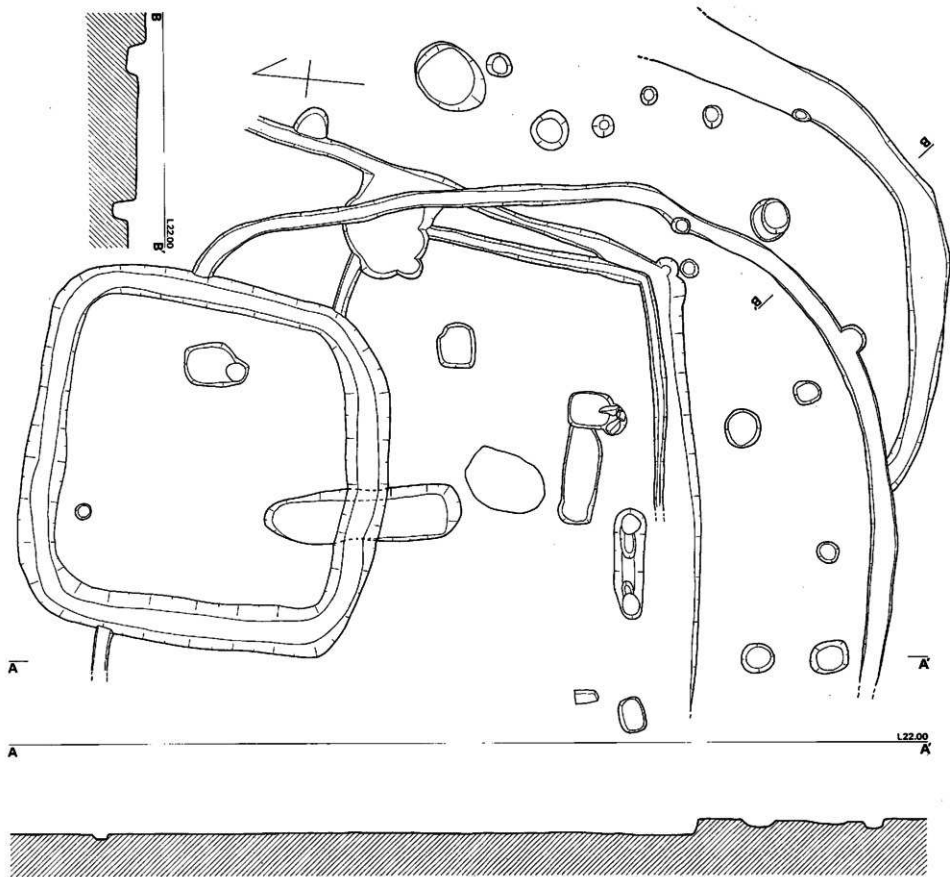
第47圖 上羅子遺跡地形 (縮尺1/200)



第58图 上阳子遗址1号住居跡实测图(缩尺1/40)



第38圖 上蓮子遺跡2号・3号住居跡実測圖(縮尺1/40)



第40图 上庭子遗址1号·2号溝状遺構実測图(縮尺1/40)

0 2M

2、遺構と遺物

(1) 住居跡

1号住居跡（第38図、図版4）

上罐子台地の北西側の急斜面から緩斜面に移るところに位置する方形の竪穴式住居跡である。斜面にあるためか、北西側の壁面を確認することはできなかったが、原形を知りうるものである。東側一辺5.2m、西側辺約5.4m、北辺約5.4m、南辺5.1mの大きさで、南西側角に長さ1.95m、幅1.3mのベッド状遺構を附設している。中央より少し北寄りに長径1.3m、短径0.9mの長円形の炉があり、焼土・炭化物・灰が詰っている。この住居跡は、焼失して廃棄されたらしく、床面には全体に焼土と炭化物が多い。北・東・南側の壁面下には幅10～20cmほどの小溝がめぐるが、西壁とベッド状遺構には溝は確認できなかった。東側の溝にかかって小石が4個発見されているが、何に使用したか不明。

住居の上部構造に関連するピットを検討してみると、先ず、炉にかかっているものは炉を破壊しているので、住居跡には関係ない。北壁の中央附近にあるものは、床面から深さ8cmであるから柱穴とは考えられない。こうしてみると、各コーナー附近にあるいずれかのピットを柱穴として、4本の主柱をもつ構造と考えられる。しかし、いずれも深さは20cmほどの浅いものである。東壁近くにある径約80cmのピットは弥生後期の土器片が出土したので、住居に関連する可能性はある。

焼失したらしい住居跡であるのに、出土遺物は少なく、確実な時期はつかめないが、土器片から弥生後期後半のものであろう。

2号住居跡（第39図、図版5・6）

1号住居跡より西に16m離れてあり、丘陵斜面でも北西隅側の低位置に存在するが、東方より西方にかけて緩傾斜しているため、東方は遺存がよく、西方では壁の検出はできなく、又他の遺構と重複しているために遺存が悪い。

やや不整の方形竪穴式住居跡で、大きさは残りのよい東側壁で6.30m、途中で検出できなくなる南側壁で4.70mであり、南側壁と北側壁は西側になるにつれて東側より広くなるようである。床面は3号住居跡や方形周溝と重複しており北東隅が遺存がよい。ほぼ平坦であり凹凸はなく、床面は硬い。周溝が伴わない幅20cm前後、下幅は10cm前後、深さ5cm内外で浅い。東側壁の中央部分の床には、1m×0.9m、深さ約20cmの円形状ピットが在る。壁高は東側壁で約40cm程であり垂直に立ち上がる。柱穴は不明である。

出土遺物は床面より石虎丁と磁石、若干の弥生式土器がある。

3号住居跡 (第36図, 図版5・7)

2号住居跡と全く重複していて、さらに方形周溝とも重複している。方形の周溝と思われるものが2号住居跡内にて検出されたので3号住居跡とする。方形の竪穴式住居跡と想定され大きさは東側壁で3.1m, 南側壁で2.5m+ α である。周溝は上幅15cm前後, 下幅5cm前後, 深さ10cm内外である。床面は北側が高くなっており南側が低くやや傾斜していて水平ではない。床面中央の西方に階円形のピットが在り、ピット内には若干の灰土と炭化物が認められる。この3号住居跡の炉と考えられよう。時期は不明である。

1号溝状遺構 (第40図, 図版8)

2号溝状遺構と重複しており1号溝状遺構の方が古く、2号により西側は切られており不明である。北側は丘陵斜面の低位置のため削平されているようで途中で切れる。溝は2号よりやや小さな円形と想定され径約7mである。溝は2号の溝より幅広く上幅40cm前後, 底面幅30cm前後であり深さ20cmを測る。円形内にいくつかのピットが存在するがこの遺構に伴うものかどうか不明である。溝内より図版8-2のように土器が出土している。これらは弥生式土器か土師器か判断がつかかねるものであり、どちらかというと後述の「溝」内出土の土器に近似している。

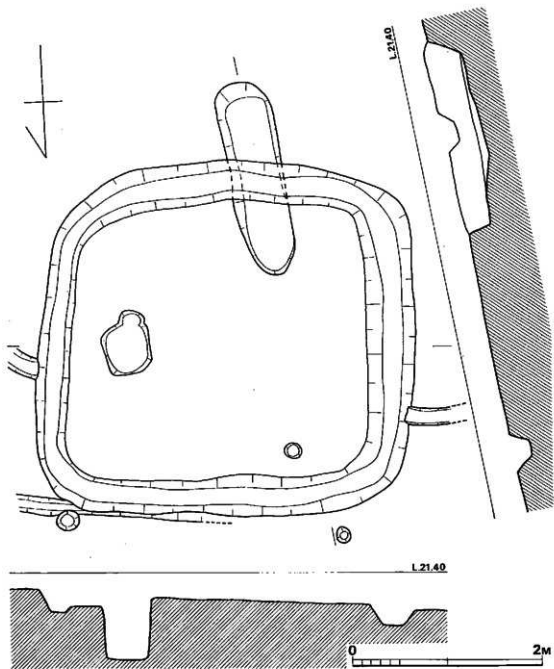
2号溝状遺構 (第40図, 図版9)

2号住居跡や方形周溝と重複しており、方形周溝と重なっている部分は方形周溝が新しいため壊されており検出できない。又、2号住居跡と同じく西方斜面の部分は削平されており不明である。溝状遺構は8.50mの円形と思われる。溝は上幅30cm, 下幅10cm, 深さ25cm前後の細いものである。溝底面は北側の方が若干低い、南側が10cm程高い。なお1号溝状遺構よりは新しい。

出土遺物は図版9-2のように甕や高坏が溝内より出土しており、これらはいずれも土師器でも最古式のものである。

方 形 周 溝 (第41号, 図版10)

1号土塚墓より新しいもので, 本遺跡中では一番新しい遺構である。方形周溝の大きさは東

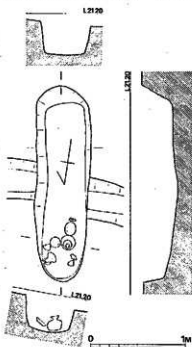


第41号 上雄子遺跡方形周溝・1号土塚墓実測図 (縮尺1/40)

西辺4.00m、南北辺3.80mの隅丸方形プランで内面の大きさは東西辺3.15m、南北辺2.90mであり一見方形周溝墓を思わせる遺構である。溝は上幅は55cmから30cm、底面幅25cmから15cmであり深さは20cm前後を測る。立ち上りは垂直でなくかなりの傾斜を有する。図版10-1のように表上より土層断面ベルトを残して発掘調査を実施した際に土層断面の観察によると周溝の内側に若干の盛り上がりが見られ墳墓と想定して主体部に注意して調査するも検出できない。

1号土墳墓 (第41・42図、図版11)

方形周溝と重複しており方形周溝より古い。長辺2.07m、短辺0.55m、深さ0.35m前後の隅丸長方形の土墳墓であり主軸をN9°Eにとる。床面横断面はほぼ水平、縦断面は中央部がくぼんでいる。壁面の立ち上りは東側・南側は緩であり西側・北側はほぼ垂直に立ち上っており、床面の長辺1.85m、短辺0.40m前後である。南側床面は直線的で、北側床面は丸い。北側に集中して副葬品が発見された。これは土器が主で須恵器平瓶、坏、土師器高坏、石器には石庖丁を再利用した石ノミ状石器がある。



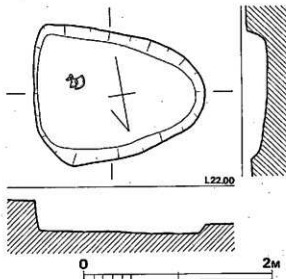
第42図 上埴子遺跡1号土墳墓実測図(縮尺1/40)

2号土墳墓 (第43図、図版12)

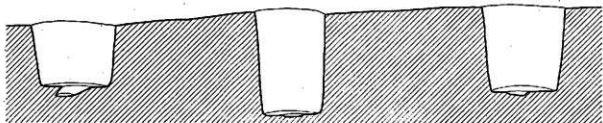
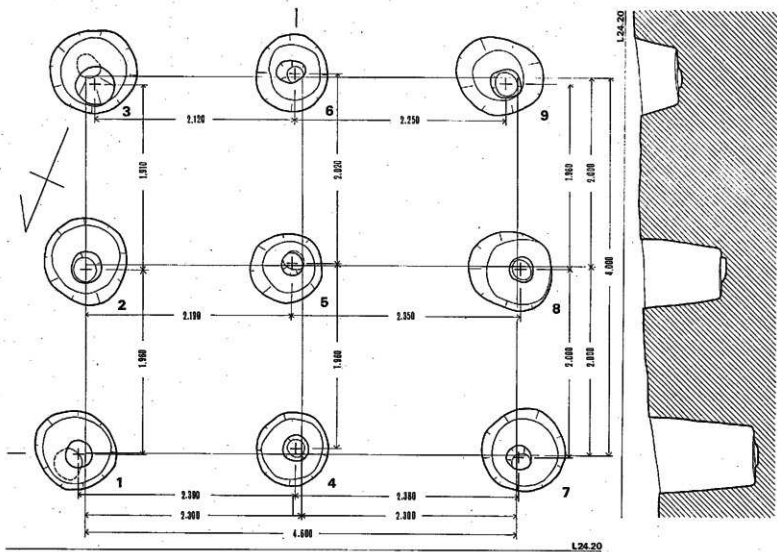
1号土墳墓の東方6m離れてある。

長辺1.85m、短辺1.50mから0.70m、深さ0.30m前後の隅丸三角形に近い不整形長方形であり主軸をN80°Wにとる。壁高が浅いのは開墾により削平されていると思われる。床面はほぼ水平であり床面の長辺1.65m、短辺1.20mから0.50mである。東側壁に近い方に副葬品として須恵器坏がある。

以上2基の土墳墓を検出したが、1号、2号土墳墓とも7世紀代に比定されよう。



第43図 上埴子遺跡2号土墳墓実測図(縮尺1/40)



第442图 上庄子遗址1号建筑物基平面图(缩尺1/40)

1号建物跡 (第44図, 図版13・14)

1号住居跡の東方5m, 2号建物の2m東方に検出された2間×2間の9本の柱の掘立柱建物跡である。東西にやや長く桁方向はN23°Wをとり正方形よりやや長方形となる。柱間寸法は梁行で4.00m, 桁行で4.60mほどであるが, 柱穴中心間は丘陵斜面高位置にあるP3, P6, P9の南側3本の桁行は $2.12m + 2.25m = 4.37m$ で丘陵斜面底位置のP1, P4, P7の北側3本の桁行は $2.39m + 2.38m = 4.77m$ を測り丘陵斜面の底位置側である北側3本の桁が長い点に気付く。桁行はほぼ同間隔である。

柱穴掘方は皆ほぼ正円形で上径95cmから75cm, 下径70cmから55cm, 深さは丘陵斜面高位置のP3, P6, P9が浅く50cm前後, 底位置のP1, P4, P7は深く1m前後である。掘方内の柱穴は円形で大きさは20cm前後である。

P1, P3, P7などはP5中心に向かって傾斜している。

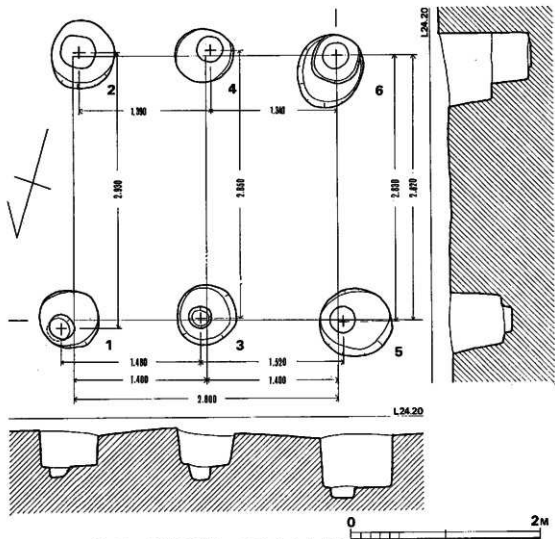
第46表 1号建物跡計測表

(単位cm)

2間×2間		梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	掘方		柱穴	
P	P			P	P				深さ	径	深さ	径
1	2	196}	387	1	4	239}	477	1	67	90	12	28
2	3			191}	4	7		238}	2	105	93	9
4	5	196}	398	2	5	219}	454	3	115	93	5	43
5	6			202}	5	8		235}	4	105	76	4
7	8	200}	396	3	6	212}	437	5	83	78	3	24
8	9			196}	6	9		225}	6	105	80	4
平均		196.8	395.7	平均		228	456	7	90	90	5	25
								8	85	87	6	25
								9	45	90	5	32
								平均	88.9	86.3	5.89	29.1

2号建物跡 (第45図, 図版14・15)

1号建物の2m西方, 溝と重複していて, 1号住居跡とはほぼ接した位置にある6本柱の掘立柱建物跡であり, 棟の方向N75°Eを向いている。柱間寸法は梁行で2.83mから2.93m桁行で2.73mと2.97mほどである。柱穴掘方は正円形で, 大きさは30cmから40cm, 深さは地山表面より25cmから45cmを測る。南側柱3本は溝と重複しており溝よりは新しい。南側柱列が北側柱列より桁行が狭い。南側柱列の西方柱穴掘方は2段掘りでありその他は一段掘りで柱穴掘方床面にはいずれも柱穴がある。柱穴は円形であり大きさは15cm前後である。



第45圖 上籠子遺跡2号建物跡実測図(縮尺1/40)

第47表 2号建物跡計測表

(単位cm)

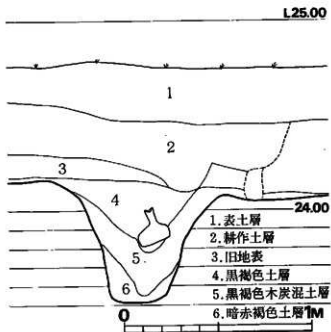
1間×2間		梁間間	桁間間		桁行間	P	掘方		柱穴		
P	P		P	P			深さ	直径	深さ	直径	
1	2	293	1	3	148	300	1	40	63	10	25
3	4	285	3	5			152	2	80	70	6
5	6	288	2	4	139	273	3	37	63	18	25
			4	6			134	4	69	62	1
			4				5	52	76	10	26
							6	95	70	3	27
平均		288.7	平均		143.25	286.5	平均	62.17	67.3	8	27.3

溝 (第36・37・46図、図版16~20)

上郷子の丘陵斜面を横断するように東西に走る溝で全長42m+αで東側は道路により破壊されている。溝の幅は中央部で1.10m、南東・西側で細くなり50cmとなる。底面は狭いところで30cm、広いところで50cmであり、深さは60cmから20cmで遺跡中央附近が深い。2号建物跡と重複しており溝の方が古い。

出土遺物は底面及び覆土中よりかなりの土器が出土している。図版16・17・18・19は出土状態であり、20は遺物写真である。後期後半の弥生式土器が大半であるが、覆土中より出土したものは最古式の土師器が在るようである。

溝は丘陵斜面の高位置と低位置とを区分けするように横断して存在する。溝より高位置には遺構は検出できず、低位置のみに遺構が検出されることは注目される。



第46図 上郷子遺跡横断面図 (縮尺1/20)

圖 版



湯納遺跡出土土器に見られる技法

左 湯納I式土器に見られる技法

上 壺頭部下のへら削り

中 壺頭部下の叩打痕

下 甕胴部の叩打痕

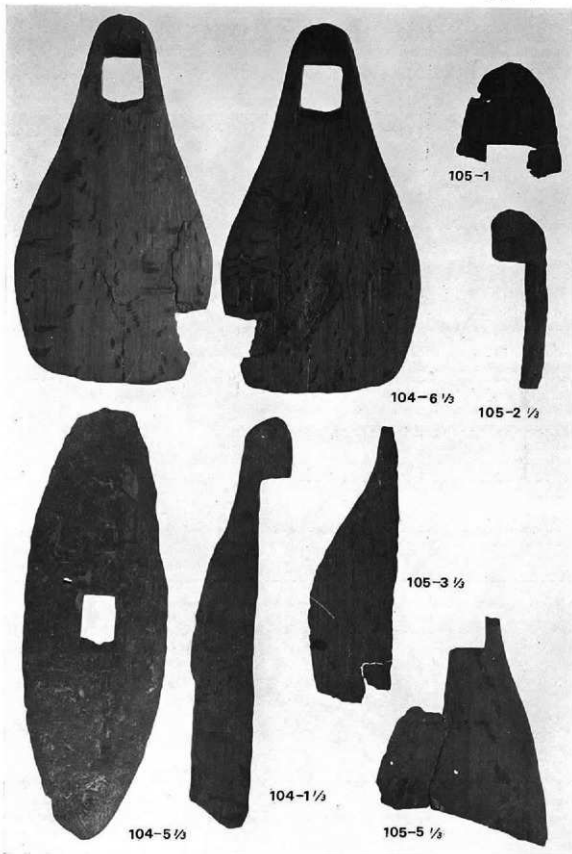
右 上 須恵器杯底部の刻印

中 須恵器皿の粘土輪積痕

下 高台付椀の高台剥離痕

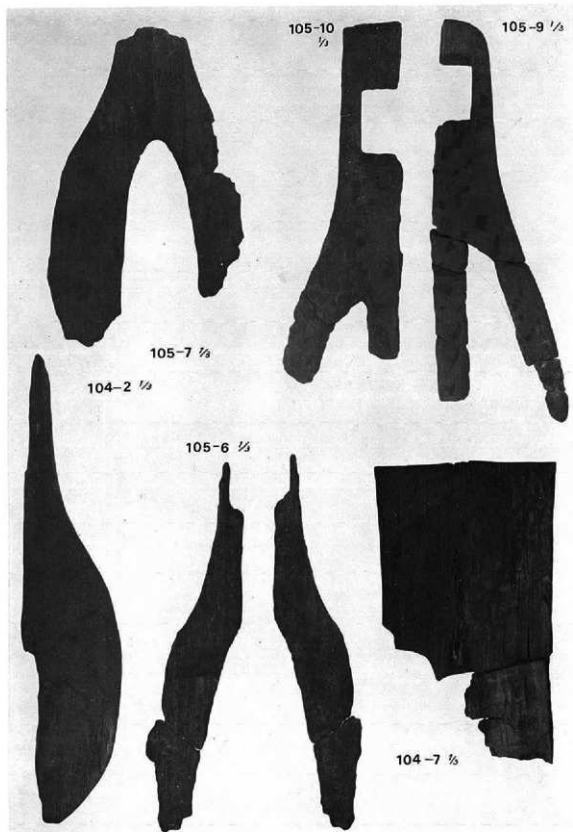


潟納遺跡土師器・高杯の観察 1. 外面ヘラ磨き
 2. 杯部内面ヘラ磨き 3・4 杯部接合痕 5. 脚頭
 部のヘラ痕 6. 脚柱部内面シボリ 7・8・9・10
 接合法

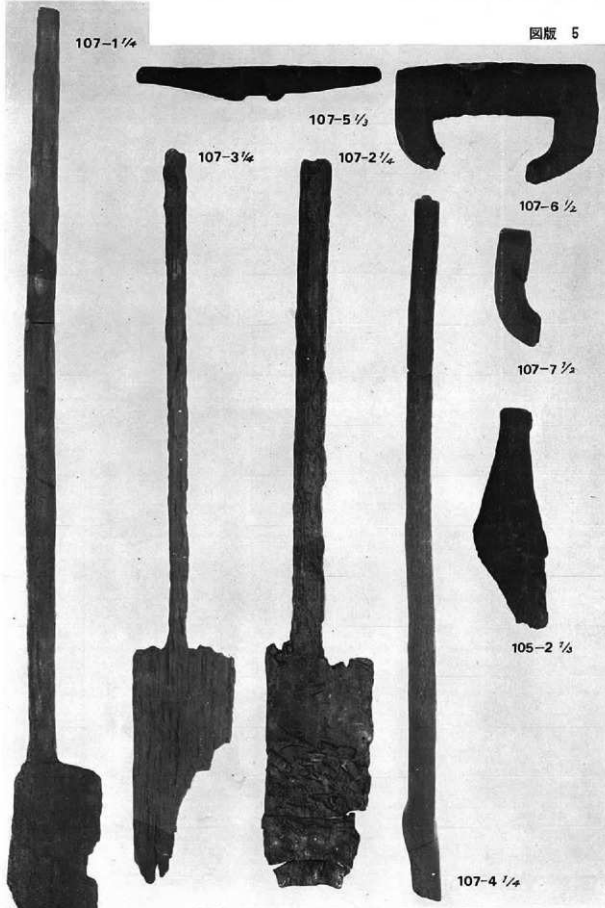


湯納遺跡出土木製農耕具

その1. (図版3～9の遺物番号は「今留4」の押図番号)



湯納遺跡出土木製農具 その2.



高納道跡出土木製農具 その3.



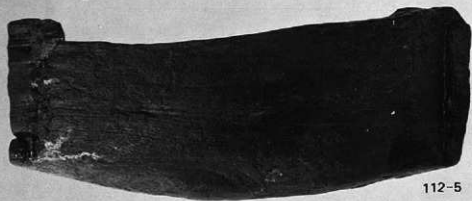
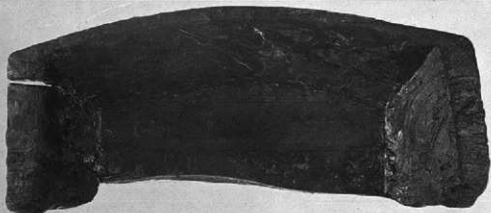
112-4 $\frac{1}{2}$



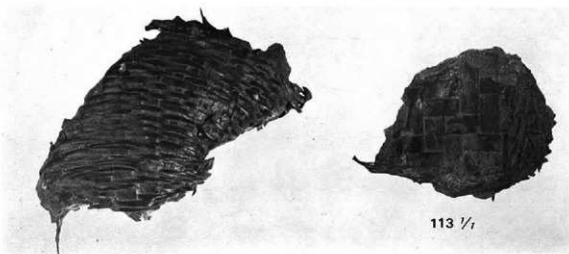
112-3 $\frac{1}{2}$



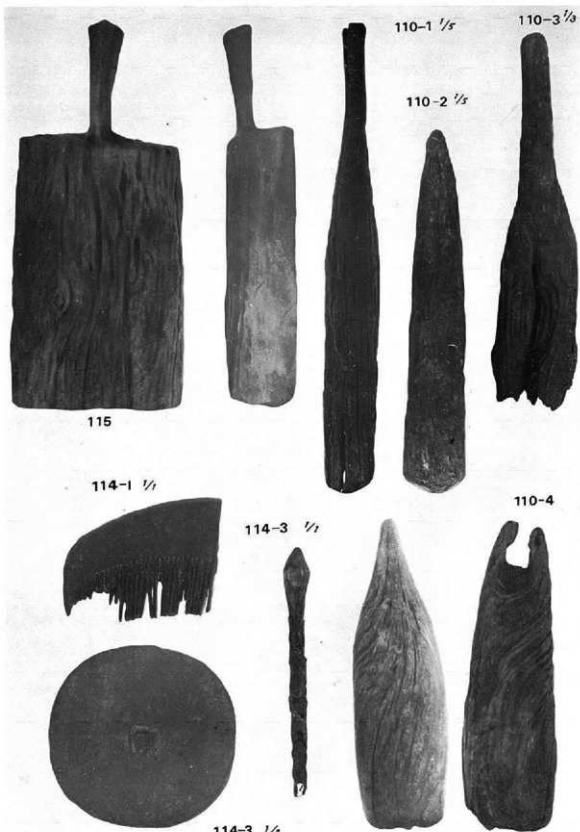
112-0 $\frac{1}{2}$



112-5



湯納遺跡出土木製槽と竹籠



115

110-1 1/5

110-3 1/5

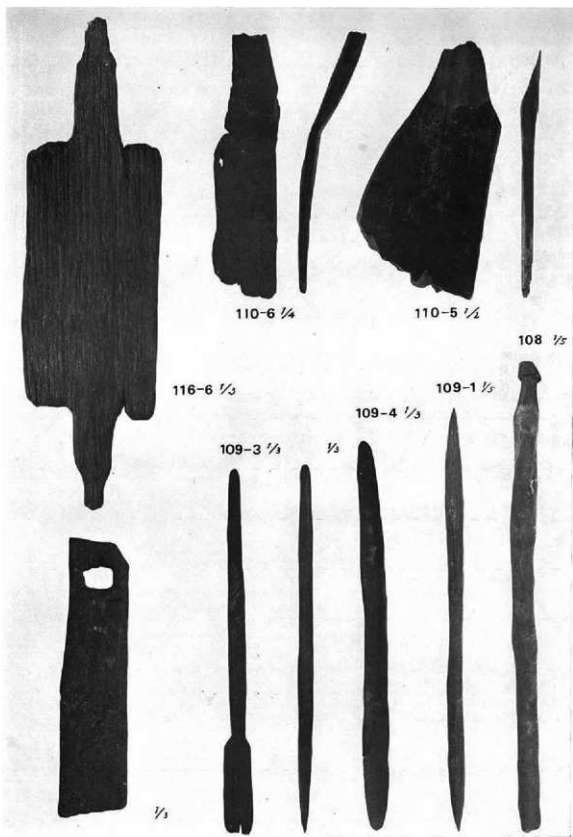
110-2 1/5

114-1 1/5

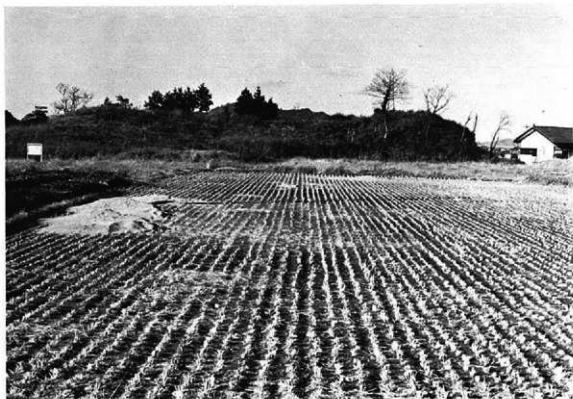
110-4

114-3 1/5

114-2 1/5



湯納遺跡出土木製日用品 その2.



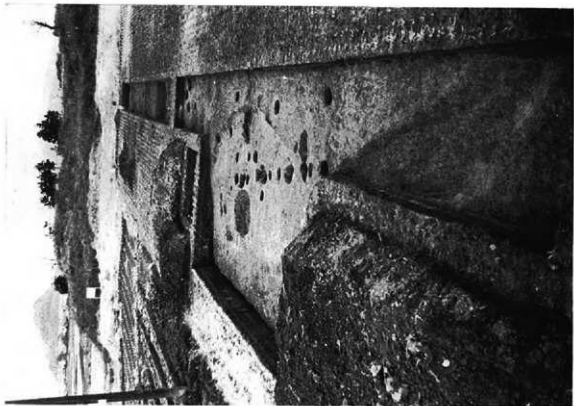
1. 今宿大塚南道跡から今宿大塚前方後円墳を望む

(南から)

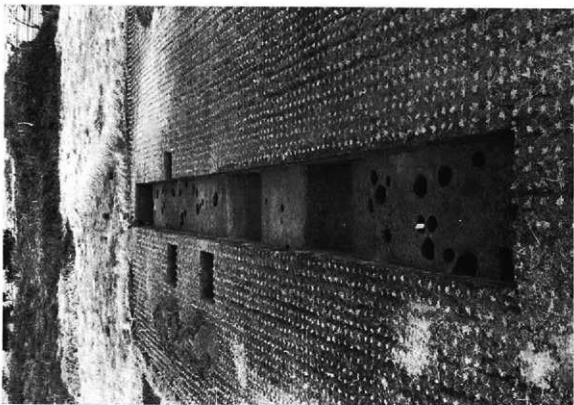


2. 今宿大塚（前方後円墳）から今宿大塚南道跡を望む

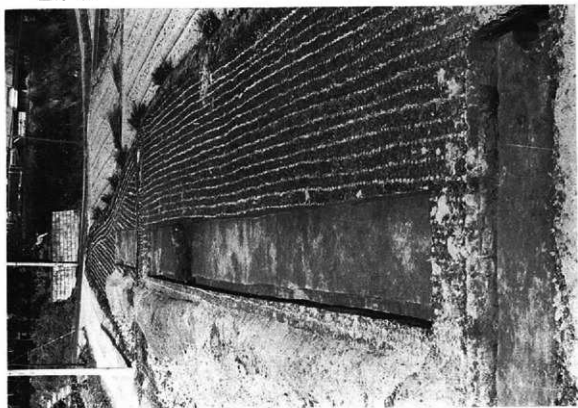
(北から)



1 今市大塚南遺跡全景



2 今市大塚南遺跡全景



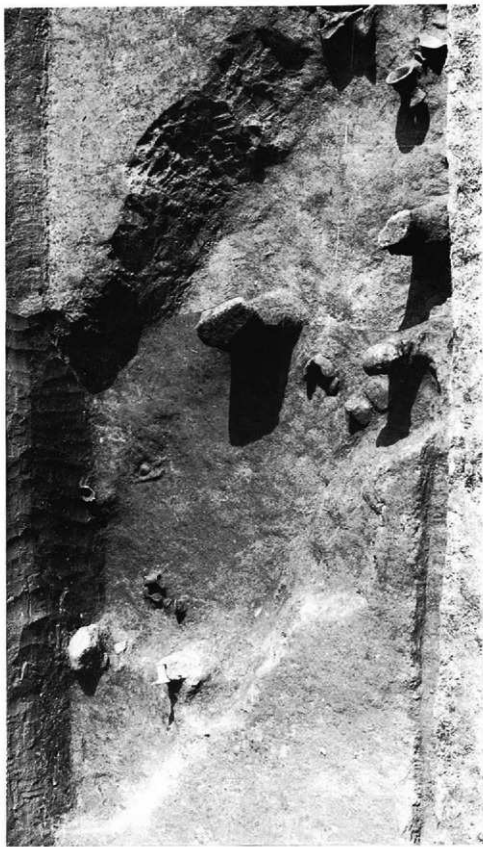
1 今宿富田遺跡全景

(南から)



2 今宿富田遺跡第2トレンチ遺状退層後出土物

(南から)



今富高田遺跡遺物出土状態

(東から)



今野小塚道跡全景

(北から)



1 今宿小塚遺跡溝状遺構内遺物出土状態

(西から)



2 今宿小塚遺跡溝状遺構内遺物出土状態

(東から)



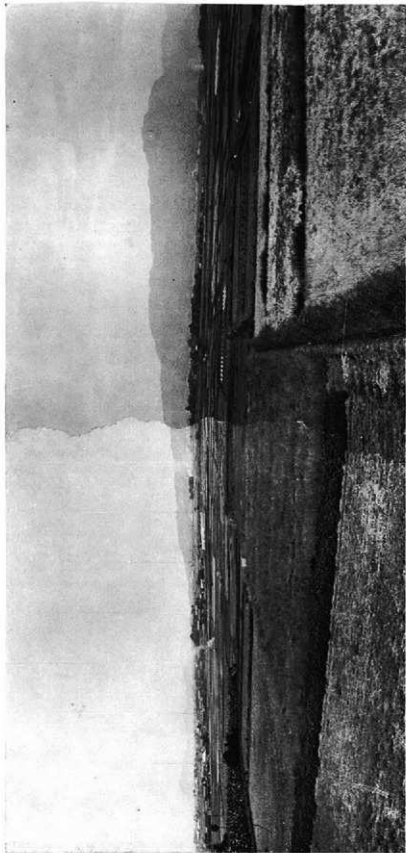
1 今宿小塚C地点（下方）から今宿大塚南道跡を望む

（西から）



2 今宿小塚C地点から今宿今山（石芥製作所）を望む

（南西から）



糸島平野の糸里道跡 背後は高祖山

(西から)

右 糸島平野糸里遺構の調査トレンチの状況
下 糸島平野糸里遺構の調査土層の状況

(西から)
(南から)





1 古野遺跡第1地点の状況

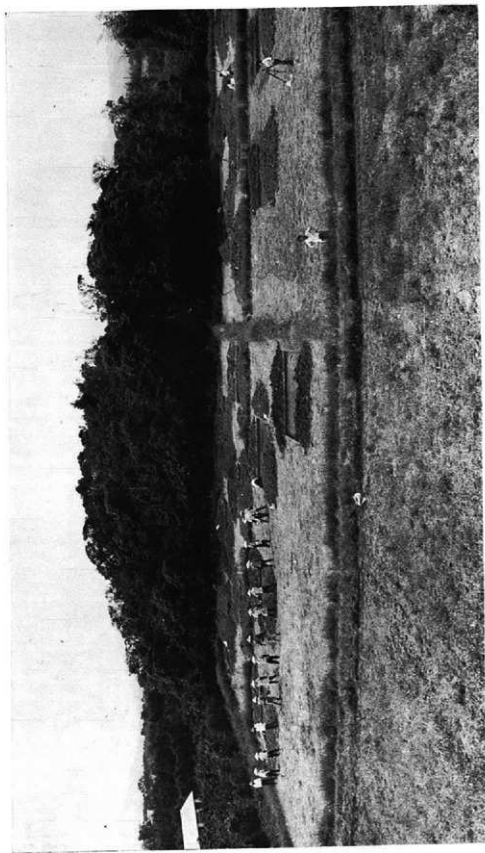
(東北から)



2 古野遺跡第1地点, C-1トレンチ (東から)



3 古野遺跡第1地点C-4トレンチ (東から)



古野道跡第2地点全景



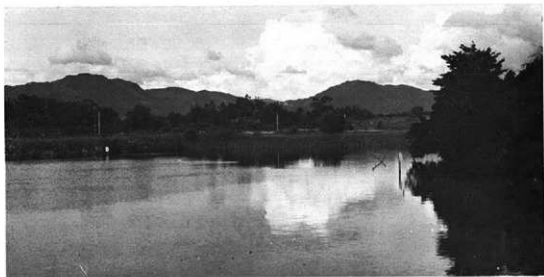
1 古野道跡第2地点A溝の状況・2-3t

(南東から)



2 古野道跡第2地点A溝の状況。2-1t

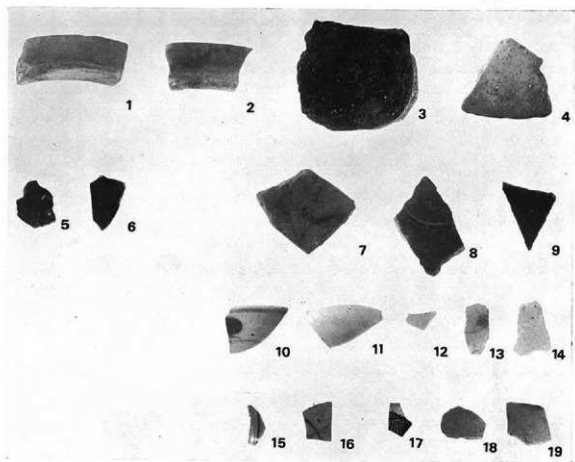
(南から)



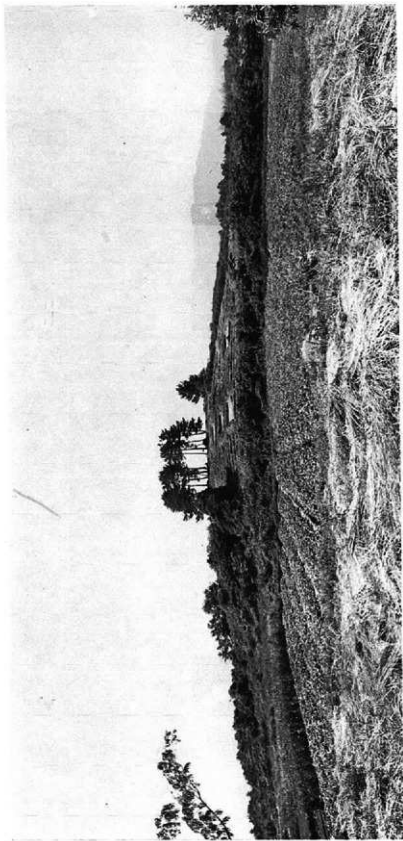
上 吉野遺跡第3地点遠景
(北から)

中 吉野遺跡第3地点
(西から)

下 吉野遺跡第3地点調査
状況 (南から)



糸島平野糸里遺構の調査と古野遺跡の調査で出土した遺物



(北から)

上細子遺跡近景



上織子遺跡遺構全景

(東から)



1 上種子遺跡遺構の状況

(東から)



2 上種子遺跡遺構の状況

(東から)



1 上瀬子遺跡1号住居跡

(北から)



2 上瀬子遺跡1号住居跡ベット状遺構

(北から)



上董子遗址 2·3 号住居跡



1 上籠子遺跡2号住居跡東壁下ピットの状況

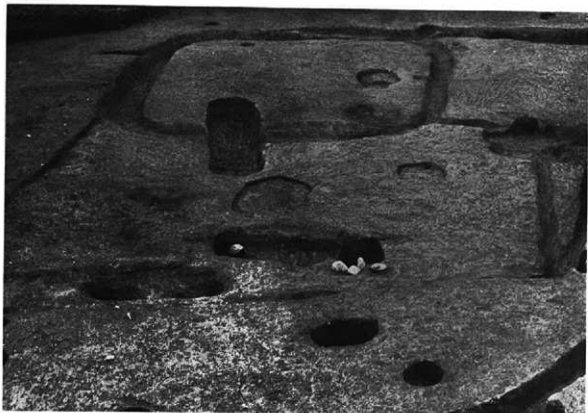
(西から)



2左 上籠子遺跡2号住居跡より石庵丁の出土状況
(西から)



2右 上籠子遺跡2号住居跡より砥石の出土状況
(西から)



1 上繩子遺跡3号住居跡

(南から)



2 上繩子遺跡3号住居跡

(西から)



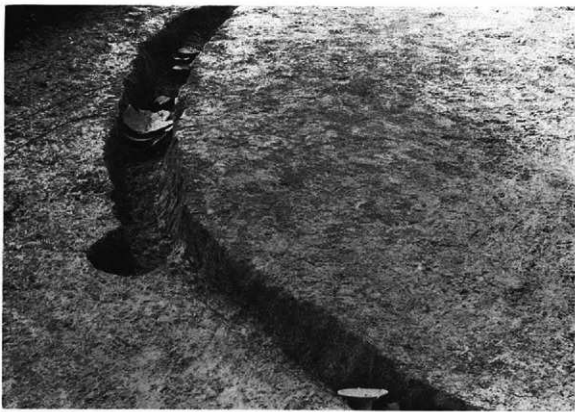
右 上瀬子遺跡1号溝状遺構より土器出土状況
上 上瀬子遺跡1号溝状遺構

(東から)
(西から)



1 上繩子遺跡2号溝状遺構

(東から)



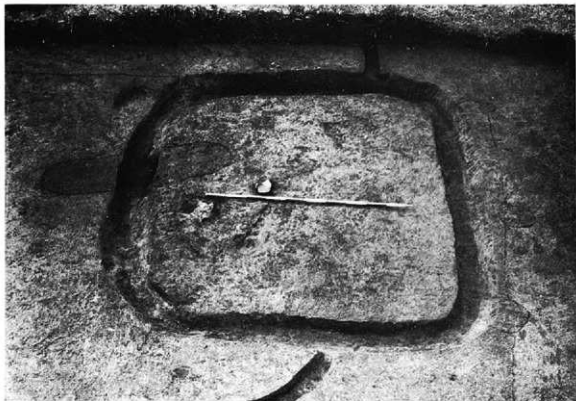
2 上繩子遺跡2号溝状遺構より土器出土状況

(東から)



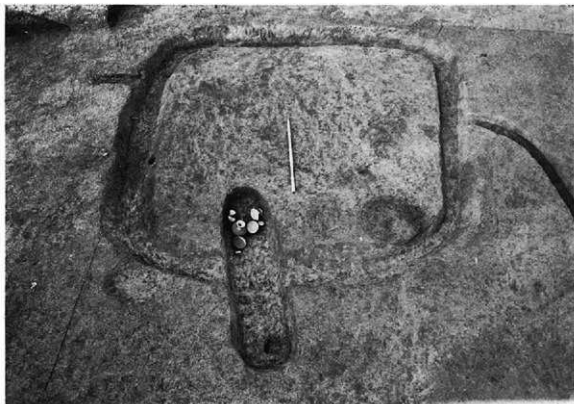
1 上糞子遺跡方形周溝埋土の状況

(東から)



2 上糞子遺跡方形周溝

(東から)



1 上種子遺跡1号土壙墓道物副葬の状況

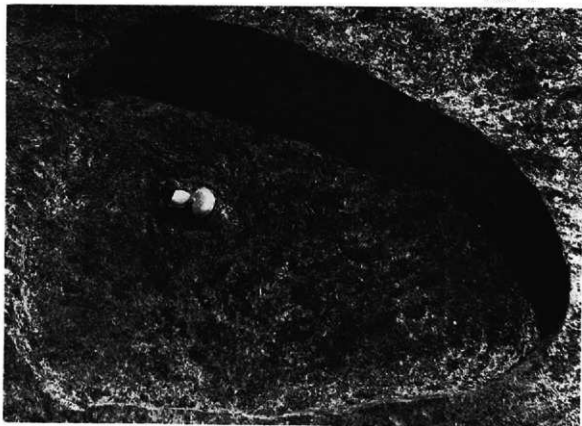
(南から)



2左 上種子遺跡1号土壙墓より道物出土状況
(南から)



2右 上種子遺跡1号土壙墓(南から)



1 上籠子遺跡2号土壙墓

(北から)



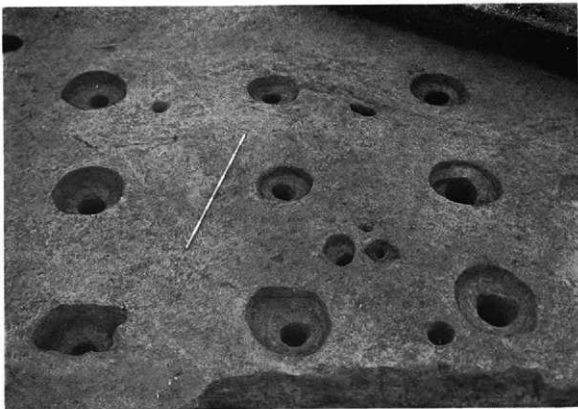
2 上籠子遺跡2号土壙墓より土器出土状況

(北から)



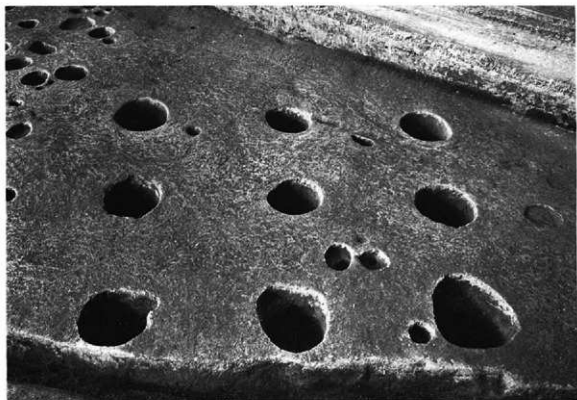
1 上種子道跡1号(右)・2号(左) 建物跡

(南から)



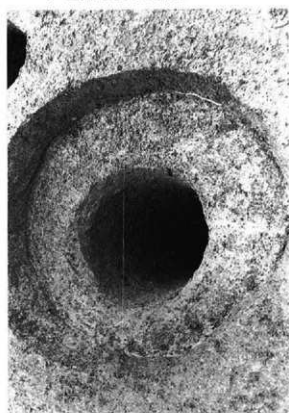
2 上種子道跡1号建物跡

(南から)



1 上瀬子遺跡1号建物跡

(南から)



2上 上瀬子遺跡1号建物柱穴の状況
(東から)



2下 上瀬子遺跡1号建物柱穴と溝状遺構より土器の
出土状況
(西から)



1 上種子遺跡2号建物跡

(南から)



2 上種子遺跡2号建物と1号住居跡と溝

(南から)



1 上郷字河原崎跡の断面

(四から)



2 上郷字河原崎跡より土器出土状況

(四から)

1 上種子遺跡溝の断面

(西から)



2 上種子遺跡の溝

(西から)

右 上 埴子道跡溝より土器出土状況
下 上 埴子道跡溝より土器出土状況



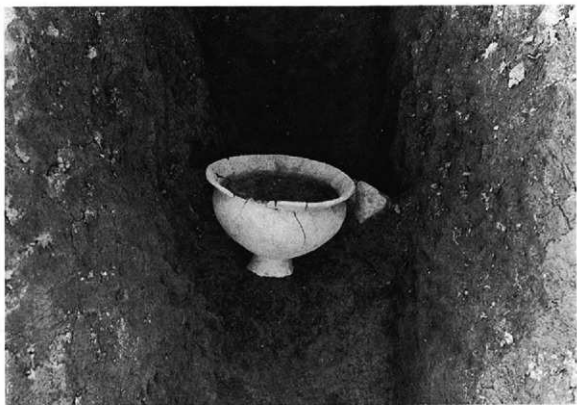
(西から)
(北から)





1 上糠子遺跡の溝

(西から)



2 上糠子遺跡溝より土器出土状況

(西から)



上縄子遺跡溝出土の土器

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告—第5集—

昭和52年3月31日

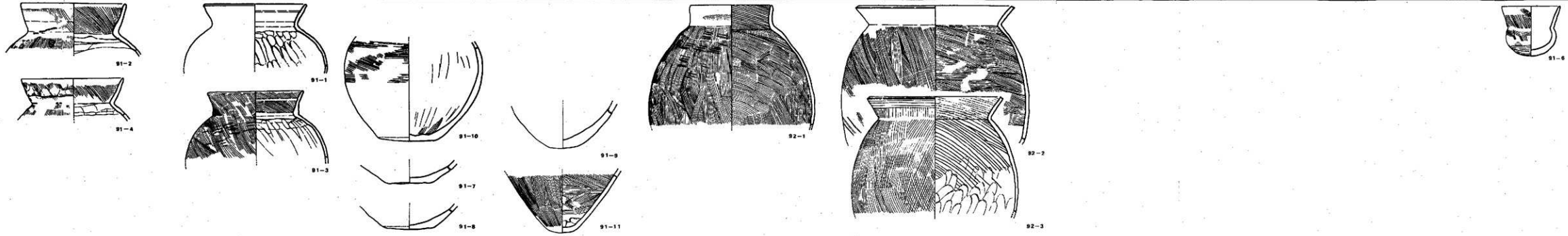
発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

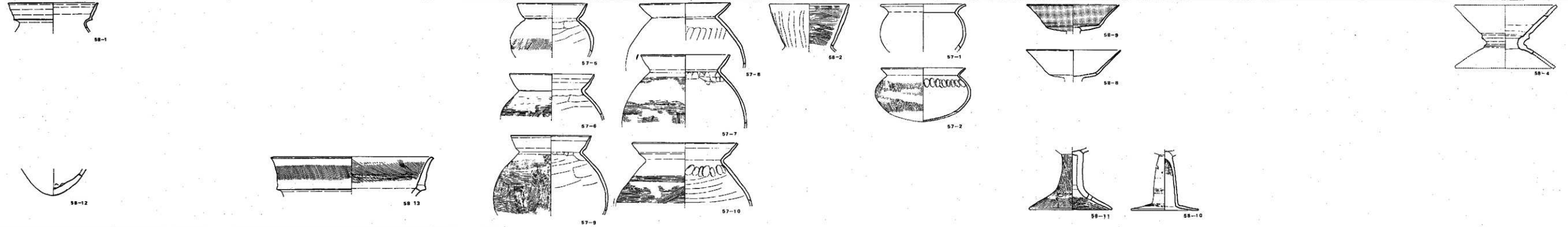
印刷 株式会社 西日本新聞印刷

福岡市中央区天神一丁目4番1号

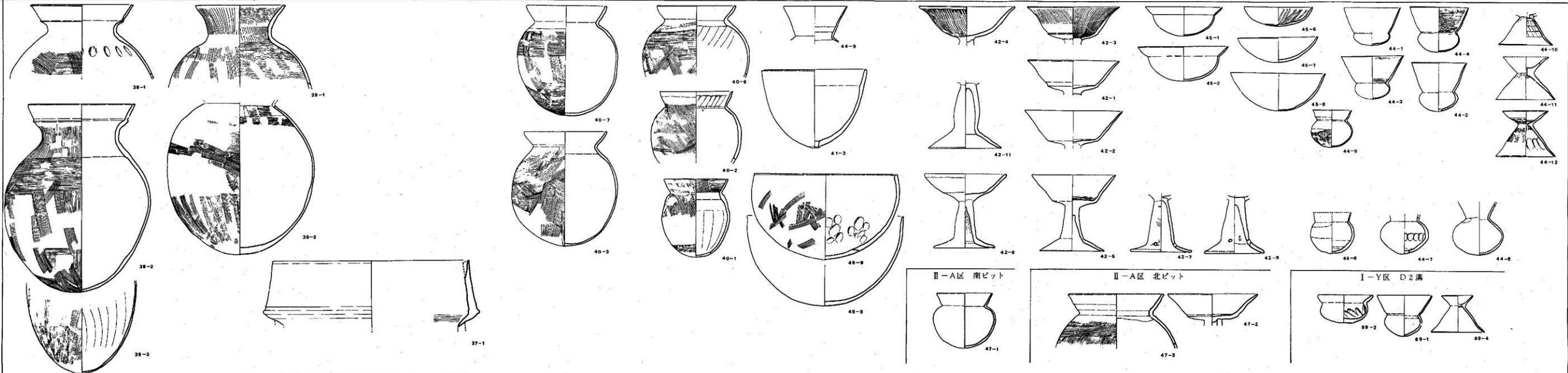
湯納Ⅰ式(井堰跡)



湯納Ⅱ式(D11溝)



湯納Ⅲ式(D5溝一括)



付図第1図 湯納遺跡古式土師器編年図(縮尺1/4) (土器右下の数字は「今宿4」の挿図番号である。)